
彼女の恋愛事情 ～暁の場合～

丹嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女の恋愛事情　　～暁の場合～

【Nコード】

N4729F

【作者名】

丹嶋文絵

【あらすじ】

暁^{あきら}、26歳独身。名前も言葉遣いも男らしい彼女だけど、実は可愛いものが大好きで……。そんな、外見と中身のギャップにコンプレックスを抱く彼女の恋物語。

プロローグ

……ほら、小説やマンガであるじゃないか。

朝起きたら見知らぬ男が自分の横に裸で寝ていて、当然自分も裸で。にもかかわらず、自分には記憶がさっぱりなくて慌てふためく、というような話が。

筑茂 つくも 暁 あきら、26歳独身。男みたいな名前でも一応女、の私。

これまでいくらか恋愛なんてものもやってきた私だけれど、正直、そんな阿呆 あほう みたいな経験が………ない、と言えないのが悲しい。

……しかも、3度も。

だから、今現在、ようやく朝を迎えるかというような中途半端な時間に目が覚めてしまって、昨晚飲みすぎたぞ、と頭がズキズキと二日酔いを訴えている中で、ふと横に誰かの生肌があることに気付いても、

(ああ……またやってしまった)

というのが、第一の感想だった。

そりゃあもう、次の瞬間には泣きたいほどの激しい後悔に襲われた。

しかし、悲しいかな、さすがに何度か経験すると嫌でも慣れるも

ので……。

自己嫌悪や何もかもは後回し。うろたえる時間があつたら、慌てず騒がず、まずは現状を把握はあくした方がいいということを学んでいる。

というわけで、身動きして相手を起こしてしまわないよう注意しながら、いつものように、昨晚の記憶を、一応たどってみようと痛み頭をひねってみるも……やっぱり毎度のことながら、てんで記憶が定かじゃない。

うう、情けない……。

こうなると、私に残された選択肢は2つ。

こっそり帰ってしまうか、相手が起きてから『昨日は楽しかったわ』なんて笑ってごまかすか、だ。

一晩だけのおつきあいのこと、相手にとっても私にとっても、こっそりといなくなってしまう方がいいだろうから、相手が起きそうにない場合は、前者だと思う。実際、今までも私が先に目覚めればそうしてきたし。

……よし、やっぱり今日もそうさせてもらおう。

そう思って、ずっと身じろぎせずにした体を、薄暗闇の中でそうっと起こす。

うん、大丈夫だ。ぐっすりと眠っている。

相手の規則正しい寝息を確認してから、暗闇に慣れてきた目で、

服を探そうと部屋の様子を見回……し……。

ん？

んん！？

「！！」

目が覚めてから5分。

どうやらいつもと様子が違うことに今さらながらに気づき、そして、その事実が体が固まった。

「まさか、そんな……」

思わずつぶやいてしまって、慌てて自分の口を押さえた。

隣に寝ている人が、一瞬身じろぎしたただけで再び心地よい寝息をたてたのを見て、とりあえず安心する。

う、うろたえるな、うろたえるな、私！

そう呪文のように自分に言い聞かせるけれど、私の中で絶対にありえないはずのことが起こっているらしい事実、心臓はバクバク、今にも目が回ってしまいそうだった。

よりによって、よりによって！

……自分の部屋！？

今まで持ち帰られていたことはあっても、決して相手を持ち帰って来たことなんてなかった。

それは、私の中に、決して他人にこの部屋を見られたくないという気持ちが深く、深くあったからだけれど……。

あああああああゝ。

昨日、一体何があったというんだろう!? いくら記憶がなくなるくらい、ベロンベロンに酔っ払っていたとしても、この部屋に知らない人間を入れてしまうなど……。

……いや、ちょっと待った。

知らない……人間?

さっき一瞬だけ見た相手の顔がちらついて、それがどこかで見たことのある顔のような気がして、嫌な予感に血の気が引いていく。

ゴクリとつばを飲み込んで、覚悟を決めておそろおそろ隣の男の寝顔を覗き込めば。

……そこには、嫌な予感大中の寝顔が、無防備に転がっていた。

「……………なななななっ! なぜ、元宮君がここにいるんだあゝ!」

私の叫び声に、そのかわいい人は驚いたように飛び起きた。

プロローグ（後書き）

初めての投稿です。

つたない文章ですが、がんばりますので、よろしければお付き合い下さい。

1

私は、私立藤花学園という、そこそこの進学校で、高校生相手に国語を教えている。

6月を迎え、今年も初々しい教育実習生たちがやってきたのは、6日前の月曜日のことだった。

今年は、私も初めて一人担当することになっていて、緊張半分のれしさ半分という気持ちで彼らを迎えた。

「元宮幸紀もとみや ゆきです。短い期間ですが、よろしくお願いします」

おろしたて感ただようスーツに身をまとった実習生たちが次々と挨拶をしていく中で、一番私の目を引いたのは、スーツに着られているような、童顔の彼だった。

メガネをかけているので、多少は大人っぽく見えているものの、それでもうちの学校の制服を着れば、間違いなく学生にまぎれてしまうだろう、美少年（青年だけれど）に、私は目を奪われてしまった。

か、かわいいっ……！

……実は私、大のかわいい物好き。

そりゃあもう、ぬいぐるみから何から、かわいい物が、愛くるしい物が、大大大だいっ好き！なんだ……！

それでもって、目の前で少し緊張しつつもしっかりと挨拶をしている元宮幸紀君は、そんな私が、ぎゅううってしたくなるほど、めちゃくちゃかわいかった。

実習生たちは、教頭先生からの注意事項を真剣に聞いていたけれど、私はそんなものそっちのけで、そのかわいい顔をこっそり見つめていた。

ああ、顔小さいなあ。目大きいし、髪もふわふわ……触ってみたいなあ。

「――では、元宮君は筑茂先生、井上君は各務先生、お願いします」

「はい」

うおおうっ、なんってラッキー！！

二週間だけとはいえ、あのかわいい顔を毎日近くで拝めるなんて！

顔には出さず、心の中でだけガッツポーズをする。

「では、連絡事項は以上。せっかくの実習です。幸いにも我が学園には個性的……ではありませんが、優秀な先生方が揃っておられる。彼らや生徒達から数多くのことを学び、ぜひ教師になりたいという意欲をかきたてられて下さいね」

「はい！」

教頭先生のにこやかな笑顔につられるように、緊張していた実習

生達が笑顔で答えた。

私は、この教頭先生を、教師としてとても尊敬しているんだけど……個性的、というところで目が合ってしまったのは、どういうことでしょうか、教頭？

まあ、それはともかく、私はウキウキした気持ちを隠しつつも、元宮君の前へ立って、友好的に見えるように軽く笑みを浮かべてから、右手を差し出した。

「1年5組の担任で、現代国語担当の、筑茂です。よろしく」

「あ……元宮です！こちらこそ、よろしくお願いします！」

握手を求められたことに戸惑った様子の元宮君だったけれど、少し頬を染めてそれに応えてくれた。

身長は165cmぐらいだろうか？視線の高さがヒールを履いた私と変わらないし。色も白いし、肌もきれい。全体的に色素が薄いのか、髪も瞳の色も茶色がかっていて……。

ああ……近くで見れば見るほど、持って帰りたいくらい、かわいい……。

「あきちんってば、ヨダレたれそう」

「うわっ！」

いきなり耳元で囁かれて（しかも息まで吹きかけられて）、思わずのけぞる。

その様子を楽しげにクスクスと笑っているのは、私の同僚兼親友（悪友？）で、私がかわいい物フリークであることを知っている数少ない人間の一人、各務麻由だ。

「麻由……。耳はやめろと言っているだろう？」

こそばゆい耳を押さえて睨む私を、背の低い麻由が小悪魔のような笑みを浮かべて上目遣いに見上げる。

「あら、ごめくん。そういえば、暁は耳が弱かったっけ？」

「おい……」

他の実習生は、古株の先生達と談笑していて聞こえていないだろうけど、目の前の元宮君にはしっかりばっちり聞かれたぞ？

おかげで彼は、どう反応すべきかわからず、頬を染めて、曖昧な笑みを浮かべていた。

まったく、こいつは……。

麻由は、私より年は1つ下だけれど、新卒でこの学園に入っているため、2年前からここで働き始めた私よりここでの教師生活は1年長い先輩だ。

そして、かわいい物好きの私にはたまらないくらい、麻由はかわいい。肩までのふわふわウェーブがよく似合う、お人形のような人だ。

ただし。

……口を開かなければ。

「あたし、英語担当で1―6担任の各務。その個性派教師代表の筑茂先生とは、隣の教室だし、合同授業は5組と同じになるから、絡むこと多いと思うわ。よろしくね？」

にっこりと、男が見とれずにはいられないとびきりのかわいい笑顔で元宮君と挨拶を交わす麻由。

「……こら、なんで私が個性派代表なんだ？」

「えー、だって、教頭先生がぼっちり暁のことを見て言ってたじゃない？」

「……………」

麻由の指摘に、やっぱりあれは、偶然目があったわけじゃなかったらしいと、少し落ち込む。

確かに、私は身長も高い方で、立ち居振る舞いも男らしいと言われるし、ハスキーボイスの上にこの話し方。せめてもと髪だけは肩過ぎまで伸ばしてはいるものの、男性より女性にもてるし、実際、小柄な麻由と並んで歩くとそっちの方の恋人同士に見られたこともあるほど。

まあ、男に間違われることがないだけ、マシかもしれないけれど……。

「それにしても元宮君って、かわいいね。名前もゆきくんっていうのよね？なんか、暁とは正反対な感じね」

麻由のあけすけな態度に元宮君は苦笑いしている。

普通、男性が、かわいいなんて言われても嬉しくないだろうけど、麻由が言うど嫌味に聞こえないのが、彼女のすごいところだと思う。

「筑茂先生は、暁さんっておっしゃるんですね。素敵なお名前ですね」

元宮君がかわいい笑顔でにっこりと笑いかけてくれた。

その笑顔にこっちもつられてしまう。

「ありがとう。名前の通り男らしく育ってしまったし、どうやらかなり個性的らしいから戸惑うこともあるかもしれないけど……。私もがんばって、元宮君には納得のいく2週間を過ごして欲しいと思っているから」

「はい。僕もたくさん先生から吸収できるようがんばりますので、よろしくご指導お願いします」

元宮君は、まぶしいくらいの笑顔でそう言ってお辞儀をした。

……とまあ、元宮君と私の関係はそこから始まったわけだけれど。

元宮君が、卒業生組ではないこととか（地元が遠いので大学に近いうちの学校を選んだらしい）、大学に入る時に1浪していて22歳だとか、彼のプライベートもいくらか教えてもらったけれども、それもただの担当教師と実習生の間にかわされる、ごく普通の情報だと思う。

……確かに、元宮君を持って帰りたいくらいかわいいとは思った。思ったけれども！それは、あくまで飾って眺めていたいた感情であって、こういう関係になりたかったとかでは決してなかったはず！？

「あ、あの……。おはよう、ゴザイマス……」

私の叫び声で目を覚ましてしまった元宮君が、ベッドにちょこんと正座して、照れたように頬を染めて言う。

メガネのない顔は、いつもより幼く見えて、さらにかわいらしい。

……でも、どう考えてもそんなことを言っている場合じゃないな、今は。元宮君だって、私だって……素っ裸だし。

やばい、本格的に頭が痛くなってきた……。

「……………」

「えっと……先生？」

固まっている私の顔を、元宮君が覗き込む。

「は、はい……」

思わず返事した声は、格好悪いくらいに上ずってしまった。

「……覚えてませんか？昨日のこと」

「ああ………」

まったく見ず知らずの遊び人相手になら通じるごまかしも、見知った顔には通じないだろう。

言葉が続けられずに、うなった私に、元宮君がポリポリと頭をか

「やっぱり。もしかしたら、とは思ってたんですけど……」

「ごめん……」

謝る私に、元宮君が慌てたように手を振った。

「いや、先生が謝ることじゃないでしょっ！っていうか、先生が覚えてないかもっていう気がしながらも自分を止められなかった俺に責任があると思うしっ！……だから、すみませんでした！」

元宮君が慌てて謝る中、私は“元宮君って自分のことを普段は俺っていうんだな”とか、全然関係ないことを考えていた。

だって、なんか、本当に頭が痛くなってきて……。

ああ、やばい……。

「あの、先生？ひどく顔色が……」

「ん……。頭、割れそう、かも……」

それだけ言って、私はズルズルとベッドへ沈む。

「うわ！ちよっ、先生、大丈夫！？」

「も、だめ……」

それだけ言うと、頭が本当に割れそうなほど痛くて、私は何も考えられなくなった。

1) (後書き)

教育実習の経験がないので、変なことを書いていたらすみません。

2

そして、2時間後。

「ごめん。本当に迷惑をかけてしまって……」

あの後、元宮君が探してきてくれた薬を飲んで、なんとか頭痛も治まった私は、元宮君と交代でシャワーを浴びた後、色々なお詫びも込めて、ささやかながら朝食を準備した。

今は、それを食べ終わって……さあどうする、というところ。

「いえ、こちらこそ、朝食までごちそうになってしまって……。あの、おいしかったです、とても」

「そうか。口にあってよかった」

「……………」

「……………」

お互いになんとも気まずくて、すぐに沈黙がやってきてしまう。

今日が日曜で本当によかった。こんな調子では、他の教師や生徒に怪しまれてしまったに違いない。

コーヒーで無理やり気分を落ち着けて、私は所在なげに、同じくコーヒーをすすする元宮君を見つめた。

「ええと……。とりあえず、昨日のことを話してもらってもいいだろうか？」

できるだけ自分のやってしまったことを反省するためにも。

正直、記憶がない時の自分を知るのは怖いけれども。本当に、もう二度と繰り返さないためにも、私は聞くべきだろうし……。

「あ、はい。それは、いいですけど……。えっと、先生は、昨日のことをどこまで覚えてるんですか？」

姿勢を正した元宮君に聞かれて、昨日の記憶をたどる。

昨日は、土曜だったから授業はなかったけれども、たまった仕事を片付けてしまおうと思って私は学校へ行った。

そうしたら、麻由と、元宮君たち何人かの実習生がクラブ活動の練習に参加しているのに会って。せっかくだから、麻由と夕飯でも食べに行こうと話している時に、麻由の担当実習生の井上君が、『一緒にしたい』と言い出して、それなら、と他にも誘って……。

「君と井上君と阿部さん、香田さんと一緒に、麻由と私おすすめの<とりや>へ飲みに行った」

<とりや>は、その名の通り鶏料理をメインに扱う居酒屋で、和風な店内が落ち着ける、今、麻由ともどもハマっているお店だった。

元宮君がうなずくのを見て、<とりや>へ行った後からのことを、思い出したまま口にする。

「……確か、麻由がいるから安心して飲めると思って、昨日は蒸し暑かったし、ビールをジョッキ3杯飲んだ……。そうだ、女の子たちが、麻由の彼氏について聞きたがって、特定の彼氏はいないと言った麻由に、井上君が立候補して適当にあしらわれていたな……。ええと、私は、その頃チューハイに切り替えて飲んでいて、それで……………」

それで……………あれ？

「……………先生？」

「……………どうしたんだろう？」

その辺りからパタッと記憶がなくなっていた。

あれ？？と首を傾げて元宮君を見ると、彼は心底驚いたような顔をしていた。ただでさえ大きな目がさらにまん丸にまで開かれている。

「ちょ、ちょっと、先生！そんなに前から記憶がないんですかっ！？」

「……………そんなに前、なのか？」

それすらわからないんだけれども。

「ええ！？じ、じゃあ、その後、俺のメガネにほとんど度が入っていないってわかったら、先生に奪われて返してくれなかったこととか、カラオケに行って、先生がジャーズメドレー熱唱したこととか、阿部と香田が酔っ払いにからまれたのを、先生、ひと睨みで蹴散ら

しちゃって、俺と井上、出る幕なかったこととか……」

「……………」

私、そんなことをしていたのか……。

「ご、ごめん、全然だ」

申し訳なく目を泳がせる私に、元宮君は盛大にため息をついてテーブルに突っ伏した。

「先生、よく飲んでたけど、顔色もまったく変わらないし、普通に話してるし。すぐお酒に強いんだなって、思ってたけど……。あれで、本当に酔ってたなんて……」

そう。

私は、酔ってもまったく顔に出ないうえに、気持ち悪くもならないし（二日酔いはひどいけれども）、態度も変わらないらしいから、強いと思われがちだった。

「あ………」

「……いいんです、いいんです。なんか、ようやくわかりました」

再び謝ろうとしたら、元宮君の声がかぶる。

「ええと……？」

言っている意味がわからなくて首をひねると、彼が、微苦笑を浮

かべた顔をあげた。

「先生は、覚えてないみたいですけど、さっき話したみたいに、＜とりや＞から出た後、カラオケに行っただんです」

「うん」

「それで、カラオケ終わったのが、もう終電ない時間だったんで、家の近かった俺が先生とタクシーに同乗して帰ることになったんですよ」

「あれ？麻由は……？」

確かに、元宮君の暮らしているアパートが、ここから歩いて5分程度のところにあるのは聞いていた。しかし、麻由の家だってそんなにここから遠くないし、彼女と飲みに出た時には私の悪い癖が出ないように、いつも送ってくれていたのに……。

「ああ、それは、初めは、各務先生も一緒に帰るっておっしゃってたんですけど、なんかすごい外車が迎えに来て。しばらくもめてたみたいですけど、そっちに乗って帰ることになったらしくて……」

ああ、あれだ、きっと。

麻由の、今一番本命に近い所にいる、青年実業家どの。

そうか、迎えにきたんだ……。

「それで、それを見た井上が、激しくへこんでうるさいんで、阿部と香田は、慰めるためにもう一件飲みに行くって言って、俺が先生

を送ることになったんです」

「なんで私達は井上君たちと一緒に行かなかったんだ？」

「それは、各務先生が、筑茂先生は全然酔ってないように見えるけど、かなり酔っ払ってるから、帰らせてって言われたので。……まあ、それが真実だったことに俺は、今、気付いたわけですけど」

本当にすみません……。

「それで、さっき『わかった』って言ったのは、各務先生が彼氏の車へ向かう前、俺に『暁、本当に酔ってるから、気をつけてね。忠告はしておくわ』っておっしゃったことに對してなんですよ。俺、それを聞いた時、酔ってるってことは、突然気分でも悪くなるのかになって思ったんで、『わかりました。大丈夫です』って答えたんですけど……。今思えば、あれは、全然違う意味だったんだなあ、と」

……要するに、襲われないように気をつけろってことが麻由は言いたかったということか。

そういえば昔、麻由と初めて飲みに行ったときにも、朝起きたら一緒に寝ていたし。いや、もちろん麻由とは何もなかったけれど……。

あの時、麻由は何も言わなかったけれども、相当苦労させたかもしれない。

「そうか。私、酔うと（見境なく）襲うのか……」

私は、新たな事実ショックを受けてうなだれた。

痴女ちじょじゃないか、それじゃあ……。

「え?」

私のつぶやきが聞こえたらしく、元宮君が聞き返す。

「元宮君、ごめん。私が、無理やり君を、そのお……」

「え!?! ちょ、ちょっと待った! 違いますよ、先生!」

申し訳なく頭を下げたら、元宮君が慌てた声を出す。

そして、その声に反応して上げた私の顔が変だったのか、突然おかしそうに笑い出した。

「?」

「すみません。……でも、女の先生が男の俺を襲えるわけないでしょう? いくら先生が男っぽい話し方で、俺がひ弱に見えても、力は俺の方が強いんですよ?」

元宮君がそう言って、力こぶを作ってみせた。シャツに隠れていても、それは確かに浮き出ている。

確かに、私には、あんな力こぶはできないけれども……。

「で、でも、今までのこともあるし、麻由も『気をつけろ』って……。ほら、酔うとすごい馬鹿力になる、とか?」

「な〜り〜ま〜せ〜んってば。それに、各務先生がおっしゃったのは、全然違う意味で……」

「??.」

元宮君の頬が、突然赤みを増す。

そして、こっちをチラッと見ると、困ったように、少し長めの髪をかきあげて、息を吐いた。

「……あの、ですね。昨日、皆と別れた後、俺が先生をここまで送ってきたら、先生が『もうちょつと飲みたいから付き合え』っておっしゃって。夜中に女性の一人住まいにお邪魔していいものかとも思ったんですけど、突然先生が気分悪くなってもいけないし、少しでもお付き合いすることにしたんです」

「う、うん」

先を促すように、小さくうなづく。

「それで、結局、お邪魔したんですけど、缶ビールを一気に一缶開けた先生が『着替えてくる』って部屋へ入って行って……」

なんだろう? も、もしかして全裸で出てきたとか! ?

「でも、先生が30分近く待っても部屋から出てこられなくて、おかしいなあと思って……。それで、もしかしたら気分が悪くなって動けなくなっただんじゃないかって心配になってきて。部屋をノックしてみたら、かすかにうめく声が聞こえる気がするし、慌てて部屋を開けたら……」

……………ああ、そういう経緯で元宮君は私の部屋に入ったのか。

それは、驚いただろうな……。

「……ぬいぐるみで埋まったベッドに先生が突っ伏して寝てたんですよね」

元宮君がそう言ってフツと軽く笑う。

「……………！」

……悪かったな、似合わない部屋で！

ああ、もう、だからあの部屋へは誰も入れなくなかったというのに！私の、阿呆！

フリルのたくさんついたカーテンとベッドに、たくさんぬいぐるみと人形達。私がかわいと思うものが集まった、あそこは、私にとって一番の安らぎの空間だ。

けれども、自分に似合わないことはよくわかっている。だから、あの部屋以外は、比較的シックにしてあるし、あの部屋には、私の趣味を知っている人間以外、誰も入れないように気を付けていた。

なのに……。

私が激しく後悔していることに気づいていない元宮君は、そのことには深く触れずに、話を続けた。

「それで、俺、先生が風邪引くといけないと思って、布団をかけようとしたんですけど、その時に先生が目を覚ましちゃって。寝ぼけてる先生に、『帰りますね』って言ったら、先生が、そのお……」

元宮君の顔がさらに赤くなる。

「？」

「『帰っちゃイヤだ』って……」

「は？」

「だから、先生が、『帰っちゃイヤだ』って、おっしゃったんです」

「……………」

な、なんですと？

「先生の、その時の顔が、すごく、なんていうか色っぽくて、かわいくて……。俺の手を掴んで、イヤイヤって首振ったりして、目も唇も潤ん……」

「わぁー！わぁー！それ以上いいっ！言わなくていいっ！！」

元宮君の言葉を遮って、私は叫んで耳を塞いだ。

なんだそれ！？なんつだ、それ！？

顔が熱い。すごく熱い。

私のその様子を、元宮君がクスクスと笑う。

「だから、各務先生が言いたかったのは、酔うと無茶苦茶かわいくなる先生に対して、襲わないように気をつけろってことだったんだと俺は理解したんですけど」

「あゝ……うゝ……」

し、信じられない。

まさか酔った自分が誘い上戸（？）だったとは……。

今まで付き合ってきた恋人にも、かわいいとか色っぽいとか言われたことないし、そもそも恋人の前で、そこまで酔っ払ったことはなかったし……。

……知らなかった。

麻由め！なんで教えてくれなかったんだ！

「あの、先生。俺、改めて……すみませんでした。でも、俺……」

「ん！？……あ、いや、気にするな！今までもこんなことあったし、男の君からすれば、その状態で我慢できなかったのだろうしっ！こんな私相手に申し訳ないくらいで……。大体、私の酒癖の悪いのがいけないのだし……」

責任を取るとか言い出しそうなまじめな顔で謝る元宮君を遮って、慌てて言葉を連ねた。

しかし、それを聞いた元宮君がなぜか少し怒った顔をする。

「こんな私相手、とか言わないで下さい。……それと、さっきから何度か気になってたんですけど、先生こういう経験、初めてじゃないんですね？」

あ……しまった……。

思わず口をついて出てしまっていたのか。

ジッと私を見つめて返事を待つ元宮君に、いたたまれなくなつて、目を逸らした。

「あ……うん、そうらしい」

「そうらしいって……。もしかして、それ、知らない相手と？」

「……………」

ああ、さらに墓穴。

反応しない私をみて、口を開けたまま固まってしまった元宮君の様子に、チクリと胸が痛んだ。

軽蔑された、かな……。するよな、普通。自分でも、どうかと思うもんな……。

元宮君が、はあくっと盛大にため息をつく。

「先生」

「……は、はい」

元宮君の少しきつい声に、思わず姿勢を正す。これじゃあ、どっちが年上かわからない。

「今度から、飲みに行きたい時は、俺が付き合いますから。それでもって、今度はちゃんと、その……我慢しますから」

「へ？」

「だから、もう二度と、知らない男になんてついて行かないでください！」

元宮君が一体何を言い出したのかわからず、私の頭は混乱している。

「ええと……??? 私は軽蔑されたんじゃないのか？」

「軽蔑なんてしてませんよ、全然！ただ、少し腹は立ってますけど……」

「？」

一体何が元宮君の怒りを買ったというんだろうか？

首をひねって、答えを待っていたら、元宮君が、観念したようにフウツと息を吐き出した。

「……だって、先生の中では、俺もその今までの男たちと同じなわ

けでしょう？」

「いや、それは……」

元宮君は知り合いだったし、知り合いでこうなったことはなかったし、あの部屋へ男の人を入れたことだって今までなかったわけだし……。

「俺が顔見知りだとかそういう違いを言っているわけじゃありませんよ？」

「……………」

私の考えていることがわかったらしく、元宮君に突っ込まれてしまう。

「俺が言いたいのは、先生の気持ちのことです。……先生は、俺とこうなったことを、とても後悔してるでしょう？ また、やってしまったって」

「そ、それは……」

後悔しているというか、なんてことをしてしまったんだろうと反省しているというか……。元宮君に対して申し訳なくは思っているけれども。

うまく言葉にできずに押し黙ったら、元宮君の顔が悲しそうに曇った。

そんな顔をされると、なんだか胸が痛いのですが……。

「……そりゃあ、先生にとっては、記憶のない間のことだし、自分の知らない所で起こってしまったことだから、後悔するのは当たり前だと俺だって思います。俺だって、自分を止められなかったこと、反省してますし、だから、謝ったんですけど……」

元宮君はそこまで言って、うつむいてしまう。

「……………」

こういうとき、一体何と云えばいいんだろう？

『お互いに忘れよう』とか？それはそれで、なんとなく元宮君を傷つけてしまいそうな気がするな。

『いい思い出にしよう』とか？……自分が覚えてないくせに、思い出もなにもないか。

ええい、国語教師なんてものをやっているくせに、自分のボキヤブラリーのなさに腹が立つ。

そんなことを考えながら内心うなっていると、突然、元宮君の顔が、勢いよく上がった。

「な、なんだ？」

その勢いに驚いて思わず身を引くと、元宮君の真剣な顔がずいっと近づく。

「先生」

「はい？」

「俺、先生が好きです」

「はあ………はいっ!？」

はあ!？」

言われたことの意味が一瞬わからず、思わず聞き返してしまった。

なんか、今、好きとかなんとか……？

「先生が、好きなんです」

やっぱり、聞き間違いじゃない。

ええと、今、私は愛の告白を受けているらしい!？」

なんだ!？」この展開は!

「ええ!？」だって……え?そ……?」

みつともなくうろたえて意味のない言葉を発していると、元宮君が、姿勢を正したまま、真剣なまなざしで見つめてくる。

「昨日のことの責任を取ろうとか、そういうことを考えて言ってるんじゃないですね。俺は、初めて見た時から、先生に惹かれていました。正直、一目ぼれだったんです」

「!？」

パクパクと口を動かすだけで声が出てこない私に、元宮君は驚くことを次々と畳み掛けてくれる。

ひ、一目ぼれ!？

「本当は、実習が終わるまで気持ちには伝えないつもりでした。でも、事情が変わった」

「も、元宮君? あの……」

「俺、好きでもない相手と、したいとは思いません。あなたが好きだから、我慢ができなかった。先生は、酔って人恋しかっただけかもしれないけど、俺は違います。俺は、うれしかったんです。だから、今までの男と一緒にしないで下さい。記憶がない自分を後悔するのはいいい、でも、相手が‘俺’だってこと、後悔して欲しくない」

「!」

……驚いた。

なんて、格好いい顔をするんだ……。

頬が火照るのを感じて、思わずうつむいた。

元宮君は、私の担当実習生で、この一週間でわかったこととはいえ、見た目は守ってあげたくなるほどかわいいけれど、中身は結構しっかりしていること。それから、本気で教師を目指しているということ。

それだけだった。

彼が私を慕ってくれていたなんて……まったく気づかなかった。

しかも、一目ぼれだど？……なんて物好きな。

思いがけず格好いい顔を見せられて動揺しまくっていた私は、どうしたらいいのかわからず、うつむいたまま顔を上げられずにいた。

……だから、全然気づかなかった。

いつのまにか、大きいとは言えないテーブルに、体を乗り出した元宮君の端正な顔が、至近距離にきていたなんて。

「俺、本気ですから」

「へー？……！……ん……んん！？……」

すごく近くで聞こえた声に驚いて顔を上げたら、いきなり唇を塞がれた。

………！

………！？

………！！？？

どれくらいの時間がたったのか、気づくと元宮君が間近でニコッと笑っていた。

その唇が濡れているのを見て、顔が熱くなる。

キス、された……深いやつを……！しかも、しかも！

……すごくうまかったような！？

「……な、何をするんだ、突然」

軽く睨みながら言った私の声は、自分でも情けないほど掠れていた。

やばい。腰が抜けそう……。

「先生が昨日のことを覚えてないのはズルイから、ひとつくらい思い出を、と思って」

精一杯虚勢を張る私に対して、元宮君はそんなことを言う。

「はぁ？」

「あと、宣戦布告、かな」

そう言っ、て、元宮君は、いつものようにとってもかわいく笑った。

……かわいいじゃないか、ちくしょう。

3

「へえ。元宮ゆっきーってば、結構やるじゃない」

月曜日、昨日起こった出来事の顛末を、昼のランチタイムに麻由に白状させられた。

そして、その感想がこれ。ゆっきーって……。

「お前な、他人事ひたひただと思って……」

弁当派の私達は、普段、私が過ごしている図書準備室で一緒にそれを食べていた。

決して広くはない部屋だけれど、元宮君が学食に行っている今、私達以外誰もいないから、何の気兼ねもなく話ができるのがあるがたい。

「だって、他人事だもん」

麻由が、手だけで食後の紅茶を催促しながら、ニッコリと笑って言う。

「なんて、友達甲斐のない……」

ため息をつきながら立ち上がって、小さな流し台の横にある棚に手を伸ばす。そこには、私が趣味で用意しているコーヒーやら紅茶やらが並べてある。

麻由がここへ弁当を食べにやってくる目的の一つがこれ。

「んゝ、おいし！やっぱり暁のお茶は最高ね」

「それはどうも」

麻由の褒め言葉に適当に返事を返せば、ジトツと恨みがましい視線が返ってきた。

「あきちんってば、怒ってるのね？あたしがちゃんと連れて帰ってあげなかったから」

「……………そんなわけないだろう？子供じゃあるまいし」

自分がしでかした事は、自分で責任を取らなければと思うし。

例え、麻由がいたから安心して酔っ払ってしまったとか、連れて帰ってくれていたなら今回のことは起こらなかったとか思っても、それで麻由に怒ったら、ただの八つ当たりだ。

だから、怒ってはいない。

……少々、恨んではいるけれど。

「今、間があったけど？やっぱり、怒ってるんじゃない。……んもう、悪かったって思ってるのよ？」

「わかってる。別に、麻由のせいじゃない。麻由が、城ヶ崎じょうがさきさんのこと、今が正念場だと言っていたのも知っているし」

城ヶ崎さんというのが、カラオケに麻由を迎えに来たという青年実業家だ。麻由が狙っている玉の輿の相手。

しかし、その名前に、麻由は嫌そうな顔をして手をヒラヒラと振って見せた。

「あの人とは別れたんだ」

「はあ！？いつ？」

「暁が元宮君を持ち帰った日」

「……………」

そういう言い方はやめて欲しい……。

「なんでまた？顔良し頭良しで、その上金持ちだって、麻由にしては珍しく本命に近かっただろう？」

驚いて聞けば、麻由の頬がプツツと膨れた。25歳だというのにそんな仕草が様になるんだから、すごい。

「その言い方って、あたしが男を条件でしか選んでないみたいじゃない」

「違うのか？」

「……違わないけどお」

ボソツと肯定した麻由に、思わず笑ってしまう。

麻由は本当にかわいい。女からは羨ましがられ、男からはモテすぎてしまうほどに。

でも、その容姿とは裏腹に、結構言うこともきついし、性格もサバサバしているところがあるから、それが原因で恋人に振られるという経験が何度かあったらしく……。

私が出会った時は、すでに特定の彼氏を作らなくなっていた。

まあ、その代わり、適当に男をあしらって、さらに、適当に貢がせているけれども。

そんな麻由が、珍しく本命にまでしてもいいかなと思った相手、それが城ヶ崎さんだった。

……条件でしか選んでないなんて、冗談に決まっている。

麻由は、口ではそんなことを言っているけど、相手に愛情がなければ恋人にはならない。

なれない、と私は思っている。

「……なにか、あったのか？」

紹介されて、一度だけ、その城ヶ崎さんに会ったけれども、さわやか好青年という印象がぴったりはまる感じで、麻由を見る優しい目に嘘はないように思えたし、とても悪い人には思えなかったけれど……？

「うーん、なんていうか、独占欲強くて、うざくなってたし。あんまりにも頭にくること言うからさ、キレちゃって……」

「キレた？麻由が？……珍しい」

特定の彼氏を作らず、しかも男達から色々貢がれている麻由が、彼らから恨まれず、修羅場を迎えることもないのは、彼女がそうならないように細心の注意を払っているからだ。

そういうところはかなり徹底している麻由が、城ヶ崎さんにキレた？

らしくない。けれど、らしくいられなかったからこそ……。

「大丈夫か？」

「……ぜんっぜん、平気！」

そう言った麻由の瞳が、一瞬揺れたのがわかった。

「そうか」

精一杯強がっている彼女に苦笑する。

「あたしのことはいいの。もう終わったんだから……。ね？」

これ以上聞かないで欲しいと言われているようで、曖昧にうなずく。

もう少し時間が経てば、何かしてあげられるだろうか……？

「それよりも、暁は、自分のこと考えなきゃ。元宮君のこと、どうするの？」

「どうって聞かれても……」

困ってしまう。

彼の気持ちは、ありがたいと思うけれども……。

「だめなの？彼じゃ」

「だめ、というわけじゃ……」

「じゃあ、好き？」

「好きか嫌いかと言われればそれは、好きだと……」

「それなら、付き合っちゃえば？」

「うーん……」

「できないなら振っちゃえば？」

「うー……」

「ああ、もうっ！じれったいわねえ、暁は」

「……ごめん」

思わず謝ると、麻由が呆れたように、盛大なため息をつく。

「まったく。元宮君も大変ね、これが相手じゃ」

うう……。

本当に。一体、彼は私のどこが良かったというんだろうか？

小さくため息をついた私を見た麻由が、突然、驚くことを言う。

「でもさあ、実はあたし、元宮君が暁を好きなんだってこと、気づいてたんだよね」

「ええ!?!」

なんでだ？当の私はまったく気付かなかったのに！

「鈍い暁には、わからなかっただろうけど」

「……………」

ひどい。

「元宮君さあ、しょっちゅう暁のこと目で追ってたもん。暁に笑いかけられると、本当に嬉しそうにするし、ああ、惚れてるんだなあって」

……し、知らなかった。

ショックを受けている私を無視して、麻由が、小悪魔的な笑みを

浮かべる。

なんか、嫌な予感。

「そ・れ・で。カラオケの後、結局二人で帰ることになったじゃない？もしかしたら、こういうこともあるかもって、実は思ったりしたんだけどお。……………あたし、元宮君ならいいかなあって」

「おい……」

「だってえ、元宮君、本気で暁のこと好きみたいだし。顔はかわいいけど、中身はしっかりしてそうだから、反対に、外見の割りに中身は鈍くて、ぼけた暁には合うかもしれないって思ってる。ほら、暁にしたって元宮君の容姿はストライクゾーンでしょ？もしかしたら、かなりはまるんじゃないかなってね」

「こら……」

「でも、一応、忠告だけはしてあげたのよ？気をつけてねって。……まあ、暁のあんなかわいい顔みたら、理性なんてあつという間に飛んでくとは思ってたけど」

そこまで言って、麻由がイッシッシと笑う。

こ、こいつはあ！

「まあ〜ゆう〜！！お前、私の気持ちは無視かつ！」

「あら、いけなかった？」

ぬるくなった紅茶を飲みつつ、しれっと微笑む麻由に、ガツクリと体の力が抜ける。

……私、本当にこんなのが親友でいいのか？

そんなことを考えていたら、麻由が急にまじめな顔になって、こっちを向く。

「でもね、暁。あたし、確かにこうなること予想はしたけど、元宮君を自分の家に上げたのも、成り行きとはいえあの部屋へ入れたのも、暁なんだからね？めったに人を家に入れない暁が、酔っていたとはいえ、元宮君を自分から入れたんだからね？そのところ、わかってる？」

……そう言われれば、確かにそうだけど。

あの家は、私にとって特別な思い入れのあるものだから、基本的に、自分の信頼した人しか入れない。

自分の部屋に関しては、もっとだ。

だから、麻由の言いたいことはわかる。

私が、根本で元宮君に心を許しているんじゃないか、と。

「……でも、かなり酔っていたんだぞ？」

「そうだけど。なんとなく、暁にとってそこは大事だと思うの。うまく言えないけど。んゝ……麻由さまの、勘！」

なんだか、とても説得力のある勘だな……。

「それに、あたし、暁と元宮君って、結構お似合いだと思うし」

「そ、そうかな？」

「うん。飼い主とペット、みたいな？」

……………。

本当に、友達やめようかなあ。

結局、その日の午後も、元宮君は普段どおりのまじめな実習生で、なんの問題もなく一日が終わった。

梅雨入り宣言が出され、それに合わせたように降り始めた、しとしと雨の中。心身ともに異様に疲れた体を引きずるように買い物を済ませて、自宅マンションまで帰る。

昨日あんなことがあったのに、今日の元宮君の様子はあまりにも自然で、なんだか少し腹が立ってしまった。こっちは、内心の動揺を悟られないように必死で、おかげでいらぬ疲労まで増えた気がするというのに……。

はあくため息をつきながら、キューインと軽い音がして開いた自動ドアをくぐって、いつものように暗証番号を打ち込もうと機械へ近づいた時、後ろの自動ドアが再び開いた音がして、何気に振り返

った。

そして、そこに立っていた人物の姿に、驚く。

「……元宮君!？」

学校で別れた時と同じスーツを着て、大きなスポーツバッグを抱えた元宮君が、いた。

しかも、びしょ濡れで。

「先生……」

心底困ったようにこっちを見つめる元宮君に、慌てて近寄る。

「ど、どうしたんだ、一体!」

上から下までびしょ濡れじゃないか……。

鞆からハンカチを取り出そうとしたら、その手をすがるように掴まれた。

「先生! 俺を……泊めて下さい!!」

「ええ!？」

……まだ、一日は終わっていないいらしかった。

とりあえず、びしょ濡れの元宮君を放っておくわけにもいかず、急いで私の部屋へ連れて上がり、昨日同様シャワーを使わせた。

一体、何事なんだ……？

彼が抱きかかえるようにしていた大きなスポーツバッグは、あまり濡れていなかったけれど、中に何が入っているのか、パンパンに膨らんでいて、かなり重そうだった。少なくとも、一泊分の荷物というわけではなさそうだ。

とりあえず、元宮君がシャワーから出てくるタイミングを見計らって、暖かいロイヤルミルクティーを作っておく。

タオルを首にひっかけてまま出てきた彼を、ダイニングテーブルの、昨日と同じ場所に座らせて、それを渡した。

「おいしい……。ありがとうございます」

元宮君が微笑んだのを見て、私も反対側に腰を下ろす。

「寒くないか？ 大分濡れてしまったようだけど……」

彼の着ていたスーツは、雨を含んでジットリと重かったため、マンションの隣にあるクリーニング屋へさっき出してきた。スーツがあれだけ濡れれば、元宮君もかなり寒かったはずだ。

「はい、大丈夫です。突然押しかけた上に、クリーニングまで出し

てもらって……。すみません」

メガネを外して、Tシャツとジーンズへ着替えた元宮君は、スーツを着ている時より、やっぱり若く見える。でも、この格好の方が、彼にはよく似合っていると思った。

頭を下げる元宮君に、首を振る。

「それはかまわないけれど……」

突然押しかけられたことよりも、さっきの元宮君の言葉が気にかかっていた。

『泊めて下さい』 とかなんとか、言われた気が……。

「……一体、何があったんだ？」

そう聞くと、元宮君は、本当に困ったように眉根を寄せて、前髪をかきあげた。

「実は……。俺の住んでるアパートで今日の昼間、火事があったらしくて……」

か、火事!?

「ええ!? それは大変じゃないか!」

「はい……。でも、発見が早かったので、実際に燃えたのは、一階の火元になった部屋の半分と、その上の部屋が少しだけ、でしたけど。誰も怪我とかしなかったみたいだし」

それは、まあ、不幸中の幸いというやつか……。

人が亡くなるような大火事ではなかったということに、少しホッとします。

「俺、ケータイの電源切ってたんで、何度か連絡が入ってたみたいですけど、知らなくて。帰ってみて、びっくりして……」

そりゃあ、驚くだろう。朝と景色が変わっていたわけだから……。

学校内で、携帯電話はマナーモードにしておくのが決まりだ。でも、元宮君は、気が散るからと、電源を切っていたらしい。

「俺の部屋は、2階の燃えた部屋の隣なんですけど、幸いにも、少し煤がついてたのと、多少水かぶってたのとくらいで、大きな被害はなかったんです。ただ、そこで寝るのは難しいなってくらいにはひどくて……。大家さんも、もう古いアパートで、近々建て替えようと思ってたからって、近いうちに出ていって欲しいって言うし……」

「それは、ひどい話だな」

火事という災難にあった住人にその態度はいかかなものかと、大家の態度に思わず眉をひそめてしまう。

「まあ、大家さんの気持ちもわからなくはないですけどね。あそこは本当に古くて、家賃も破格の安さだったから、うちの学生で金のない奴が3人ほど暮らしていただけです。俺らが全員卒業したら取り壊しが決まっていたのも本当だし、補修するよりは、建て替え

た方が早いようなボロアパートなんで……」

元宮君が、そう言って苦笑する。

よっぽど古いアパートらしい。

「まあ、そういうわけで、幸いに衣類の入っている押入れなんかは無事だったんで、必要なものだけとりあえずバッグに詰めて、俺は今夜からの寝床を探さないといけなくなったんですけど……」

元宮君がそこで言葉を切って、こっちを見つめる。

その目が、泊めてくれと訴えていて、頭を抱えなくなった。

「……なぜ、私なんだ？ 友達とか、他にいるだろう？」

「親しい友人は、教師目指してる奴がほとんどで、皆、実習のために実家へ帰ってしまったてゐるんです。かといって、井上とかの実習仲間は地元組なんで、親のところから通ってるから頼みにくいし……」

確かに……確かに、そうかもしれないけれども！

「次の部屋がみつかるまで、とりあえずホテルに泊まるとか……」

「俺、この教育実習をしつかりとやりたいんです！ だから、実習の間に部屋を探しに行くとか、そういう時間がもったいないし、そんな時間があったらたくさん指導案を作って、先生に見てもらいたいし。そうになると、実習中ずっとホテルなんて泊まったら、金も……」

元宮君がそこで口ごもった。

「そうは言ってもなあ……………」

確かに、このマンションの部屋は、一人で住むには広い3LDKで、本来なら私の給料では払うのが難しい程のマンションだし、部屋も、もちろん余っている。

だから、元宮君の気持ちはわかる。わかるけれども……。

恋人でもない男を、しかも自分のことを好きだと言っている男を、一緒に住まわせていいものか……？

「先生！俺、お金、ホテルに泊まれるほどはないけど、でも、自分の分はきちんと払います！足りないようだったら、後でバイトでも何でもしてきちんと払いますから、だから、お願いします！それに……先生を襲ったりしません！誓いますっ！」

選手が宣誓をするように手を上げた元宮君は、真剣そのものだ。

……宣誓の内容は、どうかと思うけれども。

「ご両親には連絡したのか？このことは」

いくら遠くに住んでいるとしても、子供が火事で焼け出されたと知れば、駆けつけてくるのが親というものだろう。そして、親が来れば、部屋を探してもらうことだってできるだろうし、見つかるまで、一緒にホテルに泊まることも……。22歳とはいえ、まだ学生だ。それくらいの甘えは許されるはず。

そう思ったから、何気に口に出した言葉だったけれど、それに対して元宮君の表情が急に曇った。

「……親は、いません。俺が高3の時に事故で死にました。他にも家族はいません」

しまった……！

「あ……ごめん！つらい事を聞いてしまった」

知らなかったとはいえ、嫌なことを思い出させてしまった。

慌てて謝ったら、元宮君が軽く首を振って、ニコツと笑う。

「いえ……。気にしないで下さい。まあ、そういうわけなので、俺が頼れるところって限られてて。友人以外でって考えると……」

元宮君は、そう言って困ったようにチラツと私へ視線を投げかけてくる。

う……。

「でも、だからってな……」

やっぱり短い期間とはいえ、男女が2人で暮らすのは……。

「どうしてもダメですか？俺のこと、信用、してもらえませんか……？」

こっちを覗き込む元宮君の姿は、とても不安げで頼りなげで……。

……や、やばい。かわいい。

「いや、そんなことはないけれど、ただ、なんというか……」

ダメだ。あの顔を見たらダメだ。

「無理を言ってるのはわかってます。俺の中に、これを機会に先生とものと近付けたらっていう気持ちがあるのも確かです。そういうの、先生には、迷惑かもしれませんけど……」

だんだん小さくなっていく声に、慌てて首を振った。

「べ、別に、迷惑なわけじゃ……!」

気持ちはずれしいと思ってるし!

元宮君の顔が、パアツと輝いた。

「本当ですか!？」

「う、うん」

「じゃあ、お世話になっても!？」

「ええ!？それとこれとは……」

「ダメ、ですか……?」

「う……」

そ、その顔は反則……！

「どうしても？」

ああっ、そんな捨てられた子犬のような顔をするなよ……！

「ダメ、ですか……」

しゅんっとうなだれた元宮君の姿に、とうとう、ぐったりと脱力した。

ああ、もう………完敗。

「……実習が終わるまでだぞ？」

気づいた時には、口が動いていた。

「いやったあ……！」

こうして、私たちの期間限定共同生活が、始まった。

……だって、あんなかわいい顔をされて、ダメって言えるわけないじゃないか（泣）

5

翌朝。

ガシャゴトーンという派手な音で目が覚めた。

時計を見ればA M 6 .. 0 0。起きる時間にはまだ3 0分もある。

「なんだ？今の音……」

ぼおとした寝起きの頭で、昨夜から元宮君がうちにいることを
思い出す。

……と、いうことは？

慌てて部屋から飛び出すと、音の元凶がキッチンでうずくまっ
ていた。

「何事……？」

カウンターから見下ろした私の声に、パジャマ代わりのTシャツ
を着た元宮君が、驚いたように立ち上がった。

「あっ！お、おはようございます……」

「あゝ、うん。……おはよう」

……なんだか、照れくさい。

同じように感じたのか、顔を赤くした元宮君と挨拶を交わしつつ、彼の足元を見ると、そこにはスパイスの入った小瓶がたくさん散らばっていた。どうやらスパイス立てごと床へ落としてしまったらしい。

「すみません、起こしてしまって……。あの、先生が寝てる間に、朝食でも用意できたらと思ったんですけど……」

ああ……。それで、調味料を取ろうとして、落とした、と。

申し訳なさそうに頭をかく元宮君に、軽く首を振る。

「そんなこと……」

気にしなくてもいいのに、と続けようとした言葉が、ある物に目を奪われて、止まった。

フライパンの中で、黄身の潰れた目玉焼きが……。煮えている？

「……ええと、元宮君。これは何だろう？」

「え？ベーコンエッグ、かな……？」

スパイスを拾い上げた元宮君が、私の指差すものを見て答える。

ベーコンエッグ……。

ベーコンエッグが、なんでお湯の中で煮えているんだ？

「……ベーコンエッグというのは、焼くものじゃなかったかな？」

「えっと……。確か、水を入れるといいとかってどこかで聞いた気がしたんで、やってみたんですけど」

……ああ、なるほど。

「入れても入れなくてもいいけど、入れるなら、少しでいいんだけどね」

見る限り、コップ1杯近く入っていそうだ。

「ええ!? あ……。そうだったんですか。どおりで、おかしいなあ……」

恥ずかしそうに顔を真っ赤に染めた元宮君に、堪えきれずにクスクスと笑ってしまった。

そのまま、キッチンへ入ってフライパンの火を止める。

「すみません……。それ、どうしましょう?」

元宮君の指差すフライパンから、いったん卵たちを救出して、フライパンのお湯を捨てる。

「ん? せっかく元宮君が作ってくれたんだ。食べるよ」

「ええ!? でも……」

お湯を捨てたフライパンに油を引いて、もう一度ベーコンエッグを戻す。まあ、卵だし、食べられないことはないはずだ。

何よりも、朝食を用意しようとしてくれたその気持ちが嬉しいし……。

「元宮君が料理下手だったとは、意外だな。なんでも器用にこなしそうだと思っていたから。まさか、ベーコンエッグが作れないなんて……」

学校にいても、彼が不器用なところを見せることはなかったから、その意外な発見が少し楽しかった。

昨日の夜は、彼が部屋を整えて荷物を片付けたりしている間に、私が作ったし。

「そんなに嬉しそうに言わなくても……。俺、そんなに器用な人間じゃないですよ。料理もダメだし、掃除も苦手。割とズボラな方だと思います」

冷蔵庫からレタスときゅうり、キャベツにトマトを取り出して、そのうちレタスを彼に渡す。

「これをきれいに洗って、適当に手でちぎってその器に盛って。それくらいはできるだろう？」

「はあい」

「……でも、料理ができないとなると、普段はどうしていたんだ？」

「もっぱら学食とコンビニ弁当と定食屋。あとはカップ麺とか……」

レタスを洗っている元宮君の横で、キャベツを刻んでいく。

その手元を、元宮君が『おお』と言いながら見つめていた。

そういえば、昼は学食で高校生に混ざって食べていたんだっとな。

「そんな生活をしていたら体を壊すぞ？ お金だってバカにならないだろうし」

「まあ、確かに。わかってはいるんですけどね、こればかりは……」

その答えに、きゅうりを切り始めた手を止めて、うーん、と考える。

「せっかくだしな……。私でよければ、ここにいる間に、少し教えてあげようか？」

幸いに、料理は好きだし。

その提案に、元宮君がレタスを盛り付ける手を止めて、目を輝かせた。

「いいんですか!？」

「うん。まあ、基本的なことぐらいしか教えてあげられないと思うけど、それでよければ……」

「ぜひ!」

やった！と小さくガッツポーズをする元宮君をかわいいと思うつつ、きゅうりを刻む。

そうか。これからしばらく毎日この顔を寝起きに拝めるのか。

……悪くないかも。

トーストにサラダ、昨夜作ったスープとウイナー、そしてベークンエッグらしきもの。

それらを昨日と同じ場所で向き合って食べる。

昨日は気まずくて仕方なかった朝食も、今日は不思議と穏やかな気持ちで食べられた。

「今日から授業だな。緊張する？」

教育実習生は、初めの数日間を教師の授業を見たり手伝ったりして過ごし、その後初めて自分だけで授業を行う。元宮君は、今日がその授業デビューだった。

ウツと詰まった元宮君に、軽く睨まれる。

「あー、もう……。言わないでくださいよ。それじゃなくても緊張してるのに……」

「はは。ごめん。今日は、うちと麻由のクラスだったよな？」

「はい」

うなずいたその瞳は、緊張半分、やる気半分で輝いている。

なんだか、懐かしいなあ。自分の教育実習を思い出す。

私も、こんな顔をしていただろうか？

「指導案は、あれでいくんだらう？」

今日の授業の進め方を書いた学習指導案を、昨日、元宮君から見せてもらっていた。

「はい。……でも、先生、何にも言ってくれなかったし」

元宮君のジトツと睨んだ顔に、小さく笑う。

確かに見せてもらったけれども、あえて、何もコメントしなかったのだ。

「明日からの分は、きちんと言わせてもらおうよ。“初めて”は一度しかないし、今日学ぶことはとても多いと思うから……。私が、こはこうした方がいいと言うのは簡単だけれど、それじゃあ元宮君のためにならないんじゃないかと思うんだ。元宮君が必死に考えて作ったなら、後でしまったなと思うことがあった時に、すぐに身につくだろうし」

「はい」

私の言葉に、素直にうなづく元宮君がかわいい。

「大丈夫。十中八九、指導案どおりに進まないから」

「……そんな太鼓判いりません」

元宮君が、ガックリとうなだれたのを見て、クスクスと笑ってしまふ。

……楽しいな。

元宮君が作ってくれたベーコンエッグは、ベーコンの味もなくなっていたし、おいしいとは言いにくいけれど、目の前に座った彼との他愛のない会話が楽しくて、こういうのもいいな、とか思ってしまう。

「……なんかいいですね、こういうの」

「え？」

自分の心を読まれたのかと思って驚いて顔を上げると、元宮君が柔らかに笑っていた。

その笑顔がなんだかとても大人っぽく見えて、急にドキリとさせられてしまふ。

「俺、高3の時に親が死んでから、ずっと一人だったから……。こういう風に楽しい気持ちで誰かと一緒に朝飯食べることなかったし。先生の顔見てたら、なんか、いいなあって」

「で、でも、彼女とかいただろう？元宮君はモテそうだし……」

同じことを考えていたということが気恥ずかしくて、ごまかすようにサラダを口に運ぶ。

「そういう存在がいなかったわけじゃなかったけど、こんな風に朝飯食うことってなかったし、あんまり長続きもしなかったっていうか……。それに、俺、モテませんし」

「またまた。元宮君がモテないわけじゃないか」

こんなにかわいいのに！

「モテませんって。なにを根拠に……。むしろ、自分よりかわいい男なんてイヤ、とか言われて、振られちゃったりするくらいですよ？」

元宮君がそう言って肩をすくめる。

ええ？そんなものなのかなあ……？

改めて目の前の元宮君をジッと見つめてみる。

うん。やっぱり、元宮君は超絶にかawaii。まつげはファサッと音がしそうなほど長いし、その下の目はくりくりだし。

でも、だからこそ……。

「私なら、元宮君みたいなかわいー彼氏なら、『いいだろー、かわいーだろー、私のなんだぞー』って、自慢したくなるけどなあ……」

「？」

こんなにかわいいのに。私なら絶対そうするのに。

そう思って首を傾げたら、元宮君が一瞬キョトンとして、それから、何を思ったか突然吹き出すと、声を上げて笑い始めた。

「？」

そんなに変なことを言ったかな……？

「先生」

ようやく笑いをおさめた元宮君が、心底嬉しそうに笑みを浮かべる。

「うん？」

「大好きです！」

なんの脈絡もない唐突な言葉に、思わず手にした皿を落とすところだった。

慌てて皿を支えて元宮君を見れば、一人でうなずきながら、ニコニコと微笑んでいる。

「な、なんだあ？」

「俺、やっぱり先生がいいです。先生が好きです。どんどん好きになる」

「や、あの……」

ちょ、ちょっと、待て！

あまりに好きを連呼されて、顔が、カァツと熱くなる。

「先生。短い間とはいえ、せっかく一緒に暮らすんだし……」

「はい？」

「俺のこと、好きになって下さいね」

ニコツと笑った小悪魔に、今度こそ私は皿を落とした。

ああ、お気に入りの皿だったのに……。

「お疲れ様」

4時限目の授業を終えて戻ってきた図書準備室で、机に突っ伏して沈没している元宮君に、そう言って麦茶を渡す。

「どうだった？初授業は」

「……とっても、勉強になりました」

礼を言いながら受け取ったグラスを一気に空けた彼が、大きなため息とともに、そう言った。

「そうか。それは良かった」

今の気持ちが手に取るようにわかるだけに、つい笑ってしまう。

「授業って、受けてる時は長いと感じてましたけど、いざ教師の立場になってみると、短いですよねぇ……」

「ああ、うん。確かに。……元宮君の場合、少し詰め込みすぎた感じだったな。欲張りすぎて、時間がなくなったから、後半はひどく急ぎ足だったし。全体的に通してみても、結局何を一番に伝えたかったのか、つかみにくかった」

「……はい。猛反省中です」

元宮君が、小さくなって神妙にうなづく。

「でも、やり方は悪くなかったと思うよ。黒板の書き方も見やすかったし、時折笑いが混じるあたり、生徒達も馴染んでいたんじゃないか？」

「え！本当ですか？」

ぱあっと元宮君の顔が輝く。

ああ、かわいいなあ……。

「うん。今日はこの後、もう一つ授業があるだろう？さっきの方法は変えずに、反省点をふまえたものを期待しているからな？」

「はい！がんばります！」

はは。いい返事。

元宮君が、目をキラキラと輝かせながら、やる気いっぱい立ち上がる。それと同時に、図書準備室の戸が軽いノックと同時に開けられて、弁当を持った麻由が姿を現した。

「やつほ」

さっさと入ってきた麻由が、私と元宮君を見比べて、小首を傾げる。

「あ、各務先生、お疲れ様です。……じゃ、先生。俺、飯食ってきますね。午後の授業のことも考えないと」

「あんまり難しいこと考えながら食べると、消化に悪いぞ？」

「はは、気を付けます。じゃ、行ってきまっす！」

「いってらっしゃい」

「いってらっしゃい」

元宮君が軽やかな足取りで準備室を出て行くのを笑顔で見送っていた麻由が、戸が閉まった途端、クルッと振り返った。

「……あやしい」

「あ？」

麻由が妙なニヤニヤ笑いをしながら近づいてきて、いつものソファへ腰掛ける。

そして、隣へ腰掛けた私へ、ズイツと顔を近づけてきた。

「なに、なあに？もしかして、付き合い始めちゃったわけ？」

「はあ！？」

「なんでそうなる！？」

「えー？だって、昨日はちょっとよそよそしかったのに、今日はやけに親しげだもん」

「べ、別に、普通だろう？」

さっきのやりとりを思い出して、首をひねる。

いつもと同じだと思うけれど……？

「えー、絶対違う。なんて言うの？ 2人の距離がググッと縮まったような？ ほら、元宮君だって、いつもは“僕”って言うてるのに、暁に対して“俺”って言うてたしき。付き合ってるんじゃないなら、なあんか、あったでしょ？」

「……………」

……なんでこんなに鋭いんだ？

答えずにいたら、ズズズッと更に麻由の顔が近づく。

「わぁ！ 麻由！ 近い！」

キスしそうなくらいに近づかれて、慌ててそのかわいい顔を両手で挟んで、ベリッと遠ざけた。

「やんっ、ひどおい」

「なにが、ひどいんだ。もう少しで当たりそうなところだったぞ」

「あたし、暁とだったら……きゃっ」

そう言って両手で頬を押さえる麻由。

「……阿呆。バカやってると、茶、入れてやらないからな」

「え！うそうそ、ごめんなさい！」

まったく。そっちの趣味がなくても、あんなかわいい顔を近づけられたら抱きしめたく……やばい。このままじゃ変態になるな、私。

「ねえ、それで？それで？一体何があったのよ？」

麻由が小さなかわいい弁当を広げながら、期待に目を輝かせて私を見つめる。

私は、しぶしぶながらも、元宮君が転がり込んできたことを話した。

「それって、それって……！ど・う・せ・い、っていうやつじゃない！」

「違う！ど・う・きよ、だ。しかも期間限定のな」

きゃあ〜とか言いながら、例によって他人事を楽しんでいる麻由に、訂正しておく。

同棲だと、なんだか恋人同士みたいじゃないか……。

「ま、どっちでもいいけど。……でも、よくオツケーしたわね？あれだけ他人を家に入れるのを嫌がる人が」

麻由がニヤニヤニヤと、かわいい顔台無しの笑みを浮かべる。

「べ、別に。困っている元宮君を放ってはおけないし、部屋も余っているわけだし……。なにより、元宮君は既に私の家に一度、その……泊まって、いろいろと見られてしまっていたわけだし……」

私のあの少女趣味な部屋だって、彼は見ているのだから、今さら隠すものもないというか……。

モゴモゴと言った私に、ピンと来るものを感じたのか、麻由がにまあと笑う。

「そっか。そうよねえ。元宮君って、あの部屋を見ても引かなかったもんねえ？」

「う……あ……。い、いや、でも、引いたかもしれないぞ？鼻で笑われたし……」

確かに、元宮君は私の部屋へ足を踏み入れたことを話した時に、フツって笑ったんだ。それを思い出すと、胸が痛むけれど……。

「でも、その後も暁のこと、好きって言うてくれてるもんね？」

「……………うん」

顔が、カアツと熱くなる。

過去に何人かと付き合ったことがあるけれど、その誰とも、私は長続きしなかった。

その原因が、あの部屋、というか、私のかわいいもの好きな性格で……。

外見や言葉遣いが男らしい私は、性格もそうだと思われがちだった。

そして、相手が勘違いしたまま付き合っ、でも、自分のことを知って欲しくて、あの部屋を見せると……思いっきり引かれるのだ。

『暁には、似合わない』

面と向かってそう言われたことすら、ある。

けれど、元宮君は、あの部屋を見て、しかもその部屋で一緒に寝て、それでも私を好きだと言ってくれた。

そのことが、本当はともうれしかった。

今朝、『好きになって下さいね』と笑った彼の顔を思い出して、顔が更に熱くなる。

「い、一緒に暮らしてみれば、お互いに内面がわかってくるだろう？だから、私のことをもっと知っても、それでももし好きでいてくれたら……すごく、うれしい、というか。や、あのっ、それなら、私も元宮君のことを知りたいなって……」

「よしよし。わかったってば。……んもお、暁、かわいいっ!」

おそらく顔を真っ赤にしている私の頭を撫でた麻由が、ガバッと抱きついてきた。

「ちょ、麻由!？」

「いいから、いいから。……あたし、うれしいんだもん。暁、初めて会った頃にはもう、恋に臆病になってるみたいで、そういう色恋沙汰を避けてたじゃない?それが、少しでも興味を持てる人が現れたんだもん。これが喜ばずにいられますかっての!」

麻由が私を離して、ニコニコと笑う。

確かに、もう、自分をまるごと愛してくれる相手なんて、いない
思っていたから……。

「でも、元宮君が本当はあの部屋のこととか、どう思ってるか聞いてないし、一目ぼれだったってことは、こんな私だけど、外見とかから入ったわけだから、もし、年上の大人の女、みたいなのを彼が求めているのなら……私は、違うし。やっぱり幻滅されるんじゃないかな?そうになったら……」

怖い……。

恋をすること、その楽しさを知っている。だからこそ、その後に
待ち受けるものが、怖い。

それを考えると、どうしても臆病になる。踏み込めなくなる。

「だ〜いじょうぶ!」

麻由がどおんと胸を叩いてみせる。

任せておけ、と。

「もし、元宮君が暁を泣かせるような事したらあ……」

「？」

「……思い知らせてやるから」

ニヤッ……。

「……………」

……ああ、絶対にこいつだけは敵に回さないように気をつけよう。

「こ、こわかった……」

元宮君が、そう言いながら助手席から転がるように降りた。

別に、麻由に報復されたわけじゃない。

ただ彼は、車に乗っていただけだ。

「む。失礼な。とっても安全運転だったじゃないか」

私もそれに続いて、運転席から降り立つ。

私達の間には、私のかわいいかわいい黄色い愛車が止まっている。

今、この愛車に乗って、元宮君の暮らしていたアパートへやってきたところだった。

事の起こりは、元宮君に夕方かかってきた一本の電話だった。

仕事を終えて帰ってきて、私が元宮君に約束どおり料理を教えるあげつつ、2人で夕飯を作っていた。そこへ、元宮君が暮らしていたアパートの元住人から電話がかかってきたのだ。

ダイニングで電話に出た元宮君の話をなんとなく聞いていると、

どうやら相手は彼の隣の住人で、あの焼けてしまった2階で暮らしていた人らしい。つまり、自分は悪くないのに、一番被害を被ってしまった人なわけだ。

「――ああ、うん。それはかまわないけどさ。俺、今度の日曜にでも片付けに行くつもりだったし？車も借りなきゃいけないしな。ああ、そっか、うーん……うん……うん……」

割と仲が良かった友人らしく、くだけた調子で話す元宮君が新鮮だった。

ところで……。

「車が必要なら貸そうか？」

彼の口から出た車の一言に、思わず反応してしまった。

元宮君が『え？』と言って振り向く。

「あ、ちょっと待って。……先生、車、持ってるんですか？」

携帯を押さえて、元宮君が驚いた顔で聞き返す。

「うん。ほとんど乗ることもないけど、下の駐車場に置いてある。小型車だから、たいして荷物は乗らないと思うけれど、必要なら……」

車種名を言うと、元宮君がうなずく。

「たぶん、十分です。荷物も、衣類はある程度持ってきてるし、生

き残った家電とか食器とかくらいですから」

それくらいなら私の車でも乗りそうだ。

もし一度で乗らなければ、何往復かすればいい。その方が私にとっても都合……。

「こいつ、俺の隣に住んでた奴なんですけど、ほとんどの物が駄目になっちゃって。俺のところに置きっぱなしになってるもので、いらない物があつたら欲しいって言うんですよ。俺もこいつには結構世話になってるし、あの部屋のいらないもので役に立つならと思うんですけど、明日引越しするんで、できれば、今日のうちに選別して欲しいらしくて……」

なるほど。

元宮君は、日曜日にでもどこかで車を借りて、残りの荷物を片付けに行く予定だったから、それだと友人の予定に合わない、ということらしい。

そんなの、お安い御用だ。

「荷物もそんなにないなら、引越し先が決まるまでここへ置いてもらってかまわないし。私の車でよかったら、夕飯が済んでからでも貸してあげるよ」

「ありがとうございます！助かります！じゃあ……」

「ただし、運転手つきでね」

ニンマリと笑って自分を指差した私に、元宮君が一瞬首を傾げたけど、しばらく考えて、

「よろしく願います」

と言って、電話の友人にそのことを報告している。

きっと自分の運転が心配なんだろう、とか、勝手に解釈したらしい。

……でも、それは違う。

実は私、車の運転が好きなのだ。というより、あの車が好きと
いった方がいいかもしれないけれど。

昔から、街やテレビで見かけるビー〇ルという車のかわいさに惚れこんでいて、お金をためて、やっと去年念願の愛車を手に入れた。けれど、この辺りは交通の便もよくて、どこへ行くにも車で移動するより、電車で移動した方が早かったりするもんだから、せっかくの愛車に乗る機会が少なくて、残念に思っていたのだ。

だから、たった歩いて5分の距離でも、愛車に乗れるのならば、
いくらでも貸してあげるといふもの。

「じゃあ、先生。よろしく願います」

「うん。任せとけ」

夕飯を食べて、地下の駐車場で私の愛車に乗り込んだ元宮君に力

強くうなずいて、エンジンをかけた。

歩いて5分でも、その道は狭いから、車で行くには一度少し大きな通りへ出る必要がある。そのコースを通ると、車でも5分かかる。私はウキウキしながら、短いドライブへと駐車場を出発した。

……しかし。

「あ、安全運転って！確かに、ノロノロ運転をそう呼ぶのなら、そうかもしれないけど。……たった5分の間に、自転車とはぶつかりかける、人をよけたら対向車にぶつかりかける。しまいには、止めてあった車にさえぶつかりかけてたじゃないですか！」

む……。

よっぽどこわかったのか、元宮君の顔が少し青ざめている。

「うーん。もしかして、私は運転が下手なんだろうか？」

「……………自覚なし？」

「確かに、そんなに上手い方ではないとは思っていたけれど、今まで事故にあったこともないし、そう悪くもないと思っていた」

「……………俺の他に、誰か乗せたことは？」

「兄達と麻由」

「……みんなの感想は？」

「兄達には途中で運転を変わられた。麻由には、『これからは電車がいいな』と言われた」

兄さん達はただ単にビート○が運転してみたかったんだろうと、麻由は車に酔ったのかと思ったんだけど。

車、好きなのになあ……。運転、やめた方がいいのかなあ……。

ズーンと落ち込んで、愛車をなでる。

「あ……。い、いや！先生は下手なわけじゃなくて、あんまり運転しないから、慣れてないだけですよ、きっと！練習すれば大丈夫だと思っし、ある意味（あの運転で）事故にあわないっていうのも、才能かも！」

なんか、少し慌てた様子の元宮君が、落ち込んでいた私に元氣をくれる。

……そっか。あんまり運転してないもんなあ。そのせいか。

目の前がパアツと明るくなった気がした。

じゃあ、練習がてらもっと車に乗ればいいということだな！

「そうだな。じゃ、帰りに少しドライブでも……」

「ああああの、帰りは俺が運転したいなくなんて。俺もビートルっ

て運転してみたかったんですよね」

あははははっと元宮君が笑う。

本当は私が運転したいけど、この車を運転してみたい気持ちはわかるから、帰りの運転は彼に任せることにした。

うなずいた私に、元宮君は、やけにホッとした顔をした。

車で待っていてくれればいいという元宮君に、手伝った方が早いだろうと押し切ってアパートの彼の暮らしていた部屋へと足を運んだ。

近くの外灯に照らされたアパートは、確かにかなり古く、火事の跡も、思っていたよりもひどかった。その中に迷わず入っていく彼の後ろを追う。

「友達は？ 来てないのか？」

鍵を開けて入る元宮君の隣の部屋は、大分黒くなっていて、そこに住んでいたという彼の友人に同情する。

あれじゃあ、確かにほとんどのものが駄目になってしまっただろうな……。

「はい。今日必要なものだけ持っていけば、明日勝手に選んでいくそうです。使えなくなった家電品とかは大家さんが処分してくれるって言ってますし、俺は必要な物だけ持って出ればオッケー、とい

うわけです。あ、まだ濡れてるところもあるかもしれないし、汚れますから……」

そう言って電気をつけた元宮君が、被害を被ってないスリッパを出してくれる。それをありがたく履かせてもらって、彼の暮らしていた部屋へと上がる。

6畳程度の畳の部屋に青いカーペットが敷いてある。風呂とトイレは共同らしいから、本当に古いアパートのようだ。

それにしても……。

「元宮君がズボラというのは、本当らしいな……」

狭い部屋を見回す限りでは、決して片付いていると呼べる状態ではない。

「もう、だから車で待ってて下さいって言ったのに……」

押入れをあけた元宮君の顔が、恥ずかしいのか赤くなった。それを見てクスクスと笑ってしまう。

押入れから衣類を取り出す元宮君を横目に、私は小さなキッチンへと入った。そこはあまり使った形跡がなかったけれど、それでも小さな食器棚に数枚の皿と茶碗などが収められている。

元宮君に聞きながら、それらを出して、持ってきた新聞紙にくるんでからダンボールへと詰めていく。

……なんか、変な気分だ。

元宮君と知り合ったのが約1週間前。その時には、まさかこうやって彼の暮らしていた部屋へ足を踏み入れることになるなんて思いもしなかったな……。

変な気分。

……でも、悪くない、かも。

そんなことを考えながら、しばらく食器詰め作業をもくもくとなしていた時だった。

近くで、カサカサカサツという音が聞こえた気がして………その瞬間、条件反射のように体が固まった。

い、今の音は……？

背筋がゾッと冷える。

もしかして……もしかして……アレじゃ……？

おそろおそろ音のした方へ視線を動かして、その視線の端に黒っぽいものが移った瞬間……。

「ぎ、ぎゃーっ！ー！！」

「うわっ！なに！？……ええっ！？ちょ……センセツ！？」

キッチンから飛んできた私にいきなり飛びつかれた元宮君が、よろけそうになった体を慌てて堪える。

でも、今はそれどころじゃない。

「ごっ、ゴゴゴギ……！いたっ！」

力いっぱい元宮君に抱きついたまま、キッチンを指差す。

「は……？あ、ほんとだ。ちっちゃいやつだけど……」

抱きついた私越しにソレを発見したらしい元宮君は、離れようとしない私を引きずりながら、殺虫剤を手にした。それを確認して、次に何が行われるのかわかった私は、ササッと彼の背中に移動する。

シュウーッという音がして、しばらくアレが暴れているだろう間も、私は元宮君の背中に隠れて、それが見えないようにしていた。

クスクスという笑い声が背中越しに伝わってくるけど、手を離さずに、元宮君があちこち移動してアレを片付け終わるまで、目をつむって彼の背中に張り付いていた。

「はい、おしまい。先生、もういませんよ？」

笑いを含んだままの声に言われて、おそろおそろ目を開ける。

「ほ、ほんと？」

「もう、大丈夫ですって。……まあ、他にもいるかもしれませんけど」

「ええ！？やだっ！」

再びぎゅう……。

その様子に、元宮君の笑い声が大きくなる。

「嘘です。冗談ですよ。この部屋、確かにあんまり片付いてないけど、今まで出たことなかったんですから。……まあ、俺的には、ラッキーだったけど」

「ん？……あ。ああっ！こ、これは、あのっ！」

元宮君の言葉に顔を上げて、ようやく我に返った。

ななななな、何をやっているんだ、私！

ガバツと元宮君の背中から離れる。

「あらら、残念」

元宮君がつぶやく。

「ごめんっ！あのっ、あ、アレだけは、とても苦手で、つい……」

どうしてもダメなんだ、あの黒いのだけは。

でもでも、抱きつくなんて！思わずとはいえ、抱きつくなんてっ！

抱きしめた彼の、思いがけずたくましい感触が腕に残っていて、カアツと体中の血が顔に集まってくる気がする。

「先生、かわいすぎ……」

私の真っ赤になっているだろう顔を覗き込んだ元宮君が、笑いながらそう言った。

言われなれてない言葉に、さらに熱くなった……。

……男の人の運転する姿って、どうしてこうも格好よく見えるんだろう？

隣で、なんだかとても楽しげに運転する元宮君の整った横顔が、ハンドルを握るその大きな手が、すごく格好よく思えて、胸がドキドキしてしまう。

そういえば、兄さん達が運転しているのを見るのも好きだったな、昔から。

私には年の離れた兄が2人いて、車に乗れるようになったと同時に、彼らはよく私を遠くへ連れ出してくれた。

普段から、格好いいところだけは自慢の兄達が、運転してる時には3割増くらいに格好よく見えたっけ……。

「ん？……あれ？」

変なことを思い出しながら、ぼおっと外の景色を見ていたら、いつのまにかうちへ帰るコースから外れている事に気づいた。

「元宮君？」

不思議に思って隣の元宮君へ問いかけると、彼はチラッとこっちを見てから、ニコッと笑った。

「先生が少しドライブがしたいって言ってたから……。ダメでした

「？」

「え……いや、ダメじゃないけど……」

ドライブがしたいと言ったのは、運転の練習を兼ねてという意味だったんだけど、元宮君には伝わってなかったのか。

まあ、でも、たまにはこの子（愛車）も走りたいだろうし、私もドライブは好きだし……。

後ろに荷物を積んだまま、というのが気にならないでもないけど。

「それにしても……。本当に、これだけの荷物でいいのか？」

積みこんだ荷物に目を走らせながら、まだ使える家電や食器などを置いてきた彼に問い掛ける。

「はい。冷蔵庫はどうしたって積めないですし、電子レンジとかはもともともらい物だったので。俺は先生のところにお邪魔してるから困らないけど、あいつはすぐにでも使える家電があれば喜ぶと思うし。着る物と本があればそれで十分ですから、俺は」

にこやかに答える元宮君に、後ろに積まれた大量の本と衣類を見て、友達思いなんだなぁと感心する。

「本当に災難だったな」

「まあ……。あれだけ格安のアパートはもうないでしょうし、それを考えるとこれからきついなぁとは思いますがね」

「貧乏学生なものな」

「ええ……まあ……」

何気なく言った言葉に返ってきた返事が、妙に歯切れが悪くて、首をひねる。

「？」

「……俺、本当は、金がないわけじゃないですよ」

しばらく考え込むようにしていた彼が言ったその言葉に、驚く。

「え？だって、貧乏だって……」

そう言っていたのに、と戸惑う私に、チラッと向けられた視線が、一瞬だけフツと緩む。

でも、その後、前を向いた彼の横顔は、真剣そのものだった。

「元宮君……？」

「使いたくないんです、その金。………親が死んだ時にもらった保険金だから」

「あ……」

なんとなく言っているのかわからずにいたら、一瞬だけ優しい笑みを浮かべて、元宮君が、自分のことを話してくれた。

「俺の親、二人とも先生と同じで教師だったんです。だから、どうか、子供の頃は結構厳しく躾られてて……。で、それに対して不満に思っていた俺としては、ありがちにも高校生の時、グレたんです」

元宮君が：？　なんだか、想像がつかない。

「反抗しまくりましたよ、もう。学校は、出席日数ぎりぎりだったし、夜は遊び歩くし……。彼らの愛情を知らなかったわけじゃないんです。たまに帰れば親父に殴られました。母さんには泣かれました。それでも、二人の愛情を見て見ぬふりして。そんな自分は本当にバカだったって気づいたのは……。一人になってからでした」

「……………！」

「……卑怯ですよ、死ぬのは。やっとバカだったって気づいても、死なれたら謝ることもできないじゃないですか。あの人達にとって、最後まで俺はバカな息子で、もう撤回させてもらえないなんて、ずるいと思いました。財産をもらっても、保険金をもらっても、そんなものはいらないから、二人を返してくれ、って、謝らせてくれって……」

そこで、いったん言葉を切った元宮君が、ふうっと細く息を吐きだす。

「でも、どうしたってそれはもう叶わないから、だから俺、自分も教師を目指してみることにしたんです。親が生きてる時は、教師なんてくそくらえって思ってたのに。あの人達と同じ教師になったら、少しは近づけるかなって、理解できるかなって思ってた。ついでに俺のことも許してくれるんじゃないかなっていう、期待というか願望

もあったり。だから、あの金は、俺が教師として一人前になったって思えるまで、絶対に手をつけないって決めてるんです」

そして元宮君は、『だから、貧乏ですよ』と笑った。

……元宮君が、本気で教師を目指していることは知っていた。でも、その裏にこんな事情があったなんて知らなかった。

まっすぐ前を見たまま、淡々と話した彼の態度に、もう、胸が痛くて、痛くて……たまらなかった。

私は、何も言ってあげることができずに、ただ、堪え切れなくて、うつむいた。

「あ、先生。つきましたよ！ここって、結構きれいなんで一度先生と来たか……って……ええ！？」

どれくらい時間が経ったのか、ずっと物思いにふけるように静かに運転していた元宮君が、車を止めて、明るくこちらを振り向いて……目を丸くして叫んだ。

「先生！？……ちよっ、なんで泣いてるのっ！？」

とめどなく溢れてくる涙をもてあまして、ぼろぼろぼろと落ちてくるそれを、ただ手の平で受け止めていた私を、シートベルトを外した元宮君が覗きこむ。

「だ、だって……元宮くん、痛くて……。平気、そうに……。してるけど……。声、震えていたし……。つらかった……。だろうな……。って……。でも……。がんばった、んだなって……。うう……。」

ズビズビと鼻をすすっていたら、涙で濡れた頬を、元宮君が自分の羽織っているシャツでぬぐっていく。

「だからって、先生が泣かなくても……」

苦笑気味につぶやかれた言葉に、泣かせたのは君じゃないか！という理不尽な怒りが沸いてくる。

「し……。仕方……。ないだろう！私は……。こうみえて、涙腺が……。ゆるんだ……。あんな話を……。聞かせた……。君が、悪いっ……」

涙のせいじゃくりあげながら言う言葉は、弱々しくて、怒りは伝わらなかったかもしれない。

案の定、元宮君はクスクスと笑っているし……。

「先生に、聞いて欲しかったんだ。……。俺の全てを知って、好きになって欲しいから」

「うう……」

そんな、殺し文句を、今言わないで欲しい。

涙は止まらないうえに、顔まで熱くなってきた、なにがなんだか……。

とうとう密室でのその空気に耐え切れなくなって、私は、車から外へ抜け出した。

「…………う、わあ…………」

外へと避難した私を待っていたのは、まばゆい光達だった。なんとなく、山を登っている感じはしていたけど…………。

目の前に広がる夜景に、思わず声が漏れる。

「気に入ってもらえた？」

平日で、しかも穴場らしいこの場所には私達しかない。

目の前の柵へつかまって、下を眺めながら、隣に並んだ元宮君が問いかけることにコクコクとうなずいた。

「すごくきれいだ！知らなかった、こんな場所があるなんて…………」

感動して隣へ視線を動かすと、暗がりの中、すごく優しい顔をした元宮君と目が合って、胸がドキッと鳴った。

こんな風に男の人と並んで夜景をみるなんて、初めての体験だった。

夜景を見るのは好きだから、友人にお勧めの場所へ連れて行ってもらったことはある。でも、今まで恋人と呼んだ存在に連れてきてもらったことはなかったから…………。

「よかった。……涙も止まったみたいだし」

そう言われれば、と瞬きをすると、目に残っていた涙がポロツと零れ落ちた。

それを拭こうとあげた手を元宮君につかまれて、かわりにまた彼のシャツの袖で優しく拭われる。

その動作に、カアツと顔に血が上った。

「あああ、あの……」

「ん？」

なんだか、今更ながら、ひどく恥ずかしくなって、胸のドキドキが止まらなくて。つかまれた手を離そうとしたら、逆にギュツと強くつながれてしまう。

驚いて元宮君を見つめると、彼がニツコリと微笑んだ。

「先生の手、すごく冷たいから。本当は抱きしめたいけど、これで我慢」

そう言って元宮君が、つないだ手を軽く上げてみせる。

だ、だ、抱きしめたいって……！

彼のそんなストレートな言い方に、また胸の鼓動が早くなって、それが手から伝わってしまいそうで、怖い。

……けれど、彼の、私よりも大きな手のぬくもりがとても心地よくて。

「……………」

心の中でエイツと気合を入れながら、それを軽く握り返して、ごまかすように夜景に視線を移すと、隣からうれしそうな笑い声が聞こえた。

なんか、恥ずかしい……。

4つも年下なのに、急にそれを感じなくなった気がして、戸惑う。それで、気づいた。

「あれ？敬語……」

「ご両親の話を聞いたところまでは敬語だったと思うのに、なぜかそれが変わっている。」

「あゝ、まあ、あれだけかわいいところを見せられたら……ね？」

また聞かされたかわいいという言葉に、心臓がはねた。

「ちゃんと学校では気をつけますから。ダメですか？」

「あ……」

再び使われた敬語は、私と元宮君の間に、一枚の壁を作ってしまったようで、寂しく感じてしまう。

「べ、別に、いい……」

自分の感情に困惑しながらも、そう伝えたと、元宮君は満足そうに笑みを浮かべる。

「じゃあ、ついでに。……暁さんって呼んでもいい？」

ついでって……。

「それは……先生と呼ばれるより、そっちの方がいい」

少し恥ずかしいけれど、自宅でくつろいでいる時に先生と呼ばれることに抵抗があったのも事実で……。

そう言ったら、元宮君がニコニコと笑う。そして、今度は自分のことをちよんちよんと指差す。

「？」

何のことかわからずに首をひねった私に、元宮君が言った。

「俺のことは？」

そして、そう言われて初めて、自分のことも名前で呼んでほしいと言っているのだと気づく。

「ええ！？」

「俺の名前、覚えてる？」

それは、もちろん……。

「……幸紀、くん」

小さく呟くと、元宮く……幸紀君は、すごくうれしそうに笑った。

ただ名前を呼んだだけなのに、胸のドキドキがさらに早くなった気がして……。

「うん。……泣いてくれて、ありがとう。暁さん」

そう言われた時。

繋がれた手を、少しだけ強く握り締めた。

再び幸紀君の運転でマンションへ帰ってきた私達は、それほど多くない彼の荷物を、2往復ほどで部屋へ運び入れた。

「使わない家電や食器類は、とりあえずこの部屋へ入れておけばいいから」

そう言って、普段使っていない部屋を開けて灯りをつけると、隣から『わあ〜』という歓声が聞こえてきた。

振り返ると、幸紀君が目を輝かせて部屋の中を見つめている。

「すごい……！この部屋って暁さんの書斎？」

部屋に足を踏み入れた彼が、左右両壁に作りつけられた書棚に埋まった本達を見上げて聞く。

書棚の奥にある古びた木製の机を見て、そう思ったらしいけど……。

「違うよ。今は使っていない。私の祖父の書斎だったんだ。ここは元々祖父から譲り受けたマンションだから」

「へえ、おじいさんの……。それにしてもすごい数の本だね。いいなあ……」

衣類と本があればいいと言っていただけあって、幸紀君はかなり本好きらしい。ヨダレを垂らしかねない勢いで書棚を上から下まで

眺めている姿に、思わず笑いがもれてしまう。

「読みたかったら勝手に読んでいいぞ」

「え!?! ほんとに!?!」

「うん」

すぐくうれしそうに振り返った幸紀君にうなずくと、彼は文字通り飛び上がって喜んだ。

「どれにしよう………ん? ああっ! すごいっ! 竹波才造^{たけなみさいぞう}が全作揃ってる!」

「!」

たくさんある本の中から出てきたその名前に、少し驚く。

「幸紀君は、竹波才造が好きなのか?」

「うん、そう! さすがに手に入りにくい物もあって全部は読んでないけど、見つけたら買うようにしてるんだ。今日持ってきた本もほとんどがこの人の本だし。もう、すごく好きで……特に、これ!」

幸紀君が書棚から一冊を抜き出す。

ああ、それは……。

「「月の光に咲く花」」

私と幸紀君の声がだぶって、顔を見合わせて笑う。

私は、幸紀君に近づいてその本を受け取った。そしてペラペラと何気なくページをたぐる。

「代表作だな。私も、これが一番好きだ」

白い野花の咲き乱れる丘で出会い、恋に落ちた優しい青年と美しい少女の、悲しい恋物語だ。

運命に導かれるように出会った二人。徐々に育まれていく恋心……。

しかし、名家の令嬢である少女には許婚がいて、何の肩書きも持たない貧しい青年との恋は、誰からも認めてもらえなかった。

そして、二人はついに駆け落ちを決意する、のだけれど……。

「約束の日に、少女は来なかったんだよな。でも、青年は、裏切られたなんて一つも思わずに、ただひたすらに彼女を待ち続けて……。元々体の弱かった彼は、その丘で命を落としてしまう」

結局、少女は少女で、駆け落ちがばれて追いかけられている途中で、誤って川に落ちてしまっていた、という……。

「そうそう。すっごく切なくて痛いんだけど……。最後に、青年が少女の姿を見るっていうシーンがあるでしょ？」

幸紀君にうなずく。

真っ白な花が月明かりに照らされる中、それに囲まれて横たわる青年の元に、まるで野花の妖精のように美しく輝く少女が現れるのだ。

幻なのか、それとも少女が迎えに来たのか……。ただ、青年は幸せそうに微笑んで、目を閉じる……。

「あのシーンが、すごくきれいだなぁって思うんだ。評価でも言われてるみたいに、ストーリーは、確かにありがちな話かもしれない。でも、竹波才造の魅力はそこじゃないんだ。彼の書く世界は鮮やかで、繊細で、優しい色に満ちてる。読んで、その情景が、まるで映像のようにきれいに浮かんできて、その浮かんできた情景に泣けてしまう……。そんな経験をさせてもらったのは、俺にはこの人しかない」

幸紀君が目を輝かせて、興奮気味に語るのを聞いて、私は本の最後に載った写真をそっと触ってから、パタンとその本を閉じた。

今、私の顔はきつと笑っている。

……うれしすぎて。

「竹波才造ファンの幸紀君に、ひとつ、いい話を教えてあげよう」

「え？なに？」

「実は……この話に出てくる少女は生きていたんだ」

私の言葉に、幸紀君が眉根を寄せて首を傾げる。

私はそのかわいい顔に思わずクスリと笑ってしまってから、古びた机をそつと撫でた。

「この話はね、本当にあった話のアレンジなんだ。実際の青年は、妻に先立たれて子供を一人抱えた30男だったし、少女も結婚を控えた24歳の美しい女性だった。あと、2人が出会ったのはベンチがぼつんと一つだけある小さな丘で、その当時は本当に白い野花が咲いていたらしい」

「え……?」

幸紀君が驚いてポカンと口を開けて、満面に笑みを浮かべているだろう私を見つめている。

「細々と小説を書きながら工場に勤めて子供を育てていた男は、よくその丘へ子供と出かけていて、そこでよく出会う若い女性と仲良くなったんだ。二人は、そのベンチに腰掛けて話をするうちに、次第に惹かれあっていったものの、良家の子女である彼女には許婚がいて、その相手との結婚が間近に迫っていた。この辺は、小説に似ているな」

「……………」

「でも、金もない上にこぶつきの男には、小説のように駆け落ちなんて思い切ったことはできなかった。結局、彼女の結婚を止めることもせずに、自分の気持ちを隠して祝福するしかなくて。そして、彼女はよく晴れた大安の日、許婚のもとへ嫁いでいった……」

彼女も男が好きだったのに、それを告げずに、だ。

「ち、ちよっ……暁さん！？それ、その話……？」

「男は彼女の白無垢姿を、ひっそりと見送りながら、自分の気持ち
を小説にすることを決めた。それでできたのが、月の光に咲く花、
……」

「暁さんってば！」

少し強い口調で呼ばれて、我に返る。

「それ、一体どういう……？なんで暁さんがそんな話を……」

「ああ、ごめんごめん。幸紀君が言ってくれたことがあまりにうれ
しくて、ちよっと語ってしまった」

「うれしくて……？？」

首を傾げた幸紀君に、古びた机をコンコンツと叩く。

「筑茂才蔵、それが竹波才造の本名なんだ」

そして、筑茂才蔵は、私の祖父だった。

9 (後書き)

少し間が空いてしまいました。すみません。
できるだけ早く更新できるように頑張ります。

目を輝かせて、祖父の机に頬擦りしそうな幸紀君を止めて、リビングへ移動した。

ゆったりとしたソファに腰掛けた彼に、アッフルティーのカップを渡して、その隣に並んで座る。

「ありがと。それで、さっき暁さんが聞かせてくれた話は、おじいさんの話なんだよね？じゃあ、少女が生きてたっていうのは……？」

「ああ、うん。祖父達の話というよりは、私の昔話のようになるけど……。いいかな？」

「もっちろん！っていうか、一石二鳥？俺、暁さんのこともっと知りたいし」

「……………」

ニコツと笑って即答した幸紀君に、いちいち火照ってしまう頬を、ごまかすようにアッフルティーを口に含んだ。

ただ、横で小さく笑い声が聞こえたところをみると、全然ごまかせてなかったようだけど……。

「え、ええと、どこから話そう……」

やっぱり、うちの事情からかな？

「うちは医者一家で、両親も、年の離れた2人の兄達も今は医者として働いているんだけど……。だから、というか、小さい頃は、両親はあまり家にいなかったし、出来のいい兄達は、学校に塾にクラブにと忙しくて、私はいつも家にいた祖父に育てられたようなものだったんだ。祖父の話し方が移ってしまうくらい、私はいつも祖父と一緒にだった」

思い出すと笑ってしまうけれど、私がこういう言葉使いをするようになっていくことに気づいた両親と兄達が、少しでも女の子らしくしようとして、やたらとかわいいものに囲まれて暮らすようになったのだ。

……まあ、その結果、言葉使いは直らないうえに、かわいいもの大好き人間になってしまったんだけれど。

「祖父は厳しい人だったけれど、とても優しい人で。よく絵本を買ってくれて、祖父が仕事をしている間、私はその後ろでその本を読んで過ごした。そして、いつも同じ時間が来ると、散歩へ行く。それが日課で、連れて行かれるところはいつも同じ場所だった」

幸紀君がピンときたようで顔を輝かせた。

「それって、もしかして？」

「うん。本で言うところの野花の丘。昔、祖父が彼女と出会った思出の丘だった。‘月の光に咲く花’……。‘月光花’^{げっこうか}と呼ばれているけれど、あの話を書いている間も書いた後も、ほぼ毎日、祖父はその丘へ決まった時間に出かけていたらしい。父が小さかった頃は父の手を引いて、父が大きくなってからは一人で、兄達や私が生まれてからは、私達を連れて……」

さすがに台風の時やひどい雪の日は出かけられなかったけれど、それ以外の日は毎日、私は祖父に手を引かれて散歩に出た。

「すごいだろう？『月光花』の主人公みたいに、会えると信じて待っていたわけじゃない。だって、祖父は自分から彼女を送り出してしまっていたんだから……。でも、それでもいつか、彼女が自分の出した本を読んで、懐かしんでくれたら、それで、もしかして会いに来てくれたら……。そんな気持ちだったんだと思う。祖父が通ううちに、丘からは花が消えて、私が連れて行かれる頃には小さな公園になっていたけれど、それでも毎日祖父は通ったんだ」

「……………」

毎日連れて行ってもらう公園での祖父は、どこか遠い目をしていて、私が遊んでいる間もただ黙ってベンチに座っていた。

そう、あの日まで……。

「あれは、私が6歳になる頃だったと思う。祖父は、その頃既に60歳を迎えていて、それでも毎日の日課は欠かさずにいた。でも、あの日の公園は、いつもと違って……。祖父がいつも座るベンチに、きれいな着物を着た、かわいいおばあさんが座っていたんだ」

「その人が……？」

「うん。祖父の待ち人、艶子つやこさんだった。何度も読んだらしい『月光花』の本を手にして、艶子さんは『ごぶさたしています』と、涙を浮かべて祖父に頭を下げた。それに対して祖父は、『ああ』としか言わなかった。でも、それだけで十分だったんだと思う……」

‘月光花’の二人と違って、祖父達は生きて会えた。祖父が‘月光花’に託した願いは届いたのだから……。

隣に座る幸紀君から、ほおっつというため息が聞こえた。

「すごい、純愛だよね……。すごいなあ……」

幸紀君がすごいを連発する。

あの時、まだ小さかった私には、何が起きているのかわからなかった。

ただ、見上げた祖父の顔が、泣きそうに歪んでいて、驚いて……。

結局、いつもと違う祖父と、目の前で泣いているおばあさんの間で、私まで泣きだしてしまって、二人の感動の再会を、たった数分でぶち壊してしまったんだけれど。

大きくなって、二人の昔話を聞いた時に、どれだけあの日の自分を呪いたくなったか……。

……せっかく感動してくれている幸紀君には、話さないけれど。

ソファに沈み込んで、この、一人暮らしをするには贅沢すぎるほど広い部屋を見回した。

「元々、この部屋は、祖父が艶子さんと暮らすために買ったんだ」

「え！ そうなんだ？」

今、私達が座るソファも目の前のテーブルも、祖父たちが使っていた時のままだ。

「うん。祖父に会いにきた時、艶子さんは、ご主人も亡くされていたし、お子さんも独立して家を出た後で、一人暮らしをしていたんだ。それなら残りの余生を二人で暮らそうと、祖父はあっさりここを買った。家を買うよりもマンションの方が気軽だし、ここからは野花の丘だった公園も、小さく見えるから……」

「え！本当？」

立ち上がった幸紀君を、苦笑して止める。

今はもう夜で、外の景色なんて見えないのに。

「明日、教えてあげるから。……祖父も艶子さんもよく二人で眺めていたっけ」

「暁さんもよくここへ来てた？」

「もう、しょっちゅう。家に帰っても誰もいないけど、ここへ来れば二人がいたから……。書斎へ行けば、読む本には困らなかったし、艶子さんには料理を教えてもらえたし。何よりも幸せそうな二人を見るのが、好きだったから……。私が中学2年の時、艶子さんが亡くなって、その後を追うように翌年に祖父が亡くなるまで、私にとっては実家よりもこの方が、居心地が良かったし、思い出もたくさんあるよ……」

両親は、祖父がここを買った時、『愛人を囲うような真似』なん

て言って、いい顔しなかったけれど、それは違う。

“愛人”じゃない。二人は、“恋人”だった。

「懐かしいな……」

本当に、このマンションを譲り受けることができてよかったと思う。

ここに、あまり人を入れたくないのは、私にとって、今でもここは、祖父と艶子さんのもの、という気持ちがあるからだ。

今でも、書斎に入れば祖父が机に向かう姿が目に見え、キッチンで料理をすれば、艶子さんの優しい笑顔がちらつく。

窓辺から小さく見える公園を眺めれば、二人が微笑みあう姿を思い出す。

数々のシーンが残像のように浮かぶたび、背中を押されているような気持ちになって、また頑張ろうと思える。

幸せを、感じる……。

「……暁さん……」

「……ん？ ああ、ごめん。ちょっと昔に飛んでいたらしい」

ぼおっと二人のことを考えていたら、いつのまにか幸紀君に顔を覗き込まれていた。

「……………」

「なに？」

人の顔をジッと見つめて黙っている幸紀君の頬が、なぜか赤い。

なんだ……？

「幸紀く……」

「ああああ……どうしよう！すっごい抱きしめたいんだけどっ！」

「……は！？」

はいっ！？

突然私から離れた幸紀君が、両手をグッパ、グッパと閉じたり開いたりしている。

「ゆ、幸紀君！？」

な、なんなんだ、突然！？

「だって暁さん、すっごくきれいな顔してたんだ、今！……ね？抱きしめたら、ダメ？」

「ええっ！？」

きれいな顔……？

一体どういふことかわからないんだけれど……!？

幸紀君の顔が再びグッと近づいて、慌てて体を引く。

「ぎゅうって、ダメ?ダメ?」

さらに上目遣いで言われて、その愛くるしさにクラッとめまいを感じる。

わあゝっ、だから、その子犬の顔はダメなんだって……!

「ね、ダメ?」

「わ、わかった、わかったから……」

あ、しまっ……!

「暁さん!」

「うわあっ!」

勢いよく飛びついてきた幸紀君の体重を受け止めきれずに、そのままソファに倒れこむ。

……ああゝっ、これ、違うから!抱きしめるじゃなくて、押し倒してるからっ!

「ゆ、ゆ……」

どどどどうしよう!?

え!?!まさかつ、こ、このままっ!?

……襲わないって、襲わないって誓ったじゃないかぁ!!

「……………」

「……………」

しかし、この後の展開に内心焦りまくる私をよそに、なぜか、幸紀君は人の上に乗ったまま、本当に抱きしめた(抱きついた?)だけで、動く気配がなく……。

……………あれ?

「……暁さん」

「は、はい?」

幸紀君が少し体を離して、息がかかるくらいの至近距離で見つめてくる。

え?何!?!時間差攻撃かつ!?

思わず身構えて体が固まってしまう。

……しかし。

「……明日の小テスト、まだ作ってないって言ってなかったっけ?」

.....。

.....はい？

小テスト？

小テスト……小テスト……って。

「……ああっ！！今、何時！？」

ガバツと起き上がった私の上から、サツと幸紀君が横へどいた。

真後ろにあった壁掛け時計を振り返って見上げて、サアツと血の気が引いていく。

「い、1時……」

そういえばまだ風呂にも入っていない……。

うちの学校では、帰りのHRに小テストを行う。それは英単語であり、漢字であり……。

そして、その小テストの作成が順番で回ってくるのだけど、明日は私の担当で……。

あああ……これから風呂に入って、それから苦手なパソコンと格闘するとなると徹夜決定じゃないか……。

あっ！

「じゃあ、俺はお風呂の準備を……」

ガシッ！

逃げるように立ち上がった幸紀君の腕をしっかりと捕まえて、下から見上げる。

……できるだけ好意的に見えるように、笑みを浮かべて。

「う」

「幸紀君メインで小テスト作ろうか。これも勉強だし、うん。……手伝うから、な？」

「あ、卑怯！勉強とか言われたら断れないし……！俺も、指導案の仕上げがあるの……」

「よし。そっちもみっちり手伝うから！……幸紀君、パソコンうまいし。頼む。協力しよう？」

顔の前で手を合わせて幸紀君を拝む。

完徹なんて無理。幸紀君に手伝ってもらえば、きつと2時間くらいは眠れるはず……。

しばらくその状態でいると、幸紀君の長いため息が聞こえてきた。

「こんなに遅くなったのも、俺のせいだもんね……」

11

チャララ♪という軽快な音楽で、徐々に目が覚めていく。

ん……？何の音だっけ……？ああ、そうだ……携帯電話……。

でも、私のじゃないな……。

強烈な眠気を抱えて、それでももぞもぞと動くと、私の隣にあつたぬくもりからぬうつと手が伸びて、ピツという音と共にその音楽が止まった。

……………。

……………。

「どわあっ!？」

「あ………暁さん、おはよう………」

一気に目が覚めて、飛び起きた私の隣から、眠たげな幸紀君の声が聞こえてきて、彼は布団から顔を覗かせると、目をこすりながら大きくあくびした。

な、なんか、デジャヴ……。

そう思って、慌てて自分の格好を見下ろす。

……よかった。パジャマだ。

またやらかしたわけじゃないことに気づいて、ホッと胸を撫で下ろしていると、幸紀君が体を起こしてクスクスッと笑った。

「信用ないなあ、俺。すごい耐えたんだよ？」

なにを？とは、あえて聞かずにおくけれど……。

周りを見回せば、ここは、今、幸紀君が使っている部屋で、私達がいるのは来客用に置いてあったベッド、つまり幸紀君が使っている布団の中だった。

「なんで、ここに……？？」

昨晚、急いで風呂を済ませてから、リビングへ私のノートパソコンを移動した。そして、彼の考えた小テストをチェックして、彼の指導案を見ていたんだけど……。

「暁さん、気がついたらソファで寝ちゃってたから、風邪引いちゃうと思って、ここへ運んだんだよ」

「……運んだ？誰が？どうやって？」

「俺が。お姫様だっこで」

……お、おひつ、おひめさまだっこっ！？

ああああの、女の子の憧れの……って、違うっ！そうじゃなくてっ！

「お、重かっただろう？ごめん……！」

「全然。言ったでしょ？俺は男で、暁さんは女の人だって。なんならもう一回、してみる？」

ニヤニヤと笑って手を広げた幸紀君に、激しく首を振って遠慮する。

む、無理！恥ずかしすぎるっ……。

「あっ！そうだ！テストと指導案っ……」

「できてるよ」

今更大事なことを思い出して叫んだら、幸紀君からあっさりと答えが返ってきた。

途中までしか記憶がない私の代わりに、全部やってくれたらしい。

「うあっ、ごめ……」

「暁さん、さっさと寝ちゃうしさ。起こしても起きてくれないし」

謝ろうとしたのを遮って、幸紀君が大きいため息をついて言う。

「う……」

「結局、全部俺一人でやる羽目になっちゃって、終わったの5時近かったんだよね」

「うう……」

今、6時半ですね……。

「しかも暁さん、警戒心なさすぎ。……襲おうかどうか、本気で悩んだし」

「!？」

「さすがにそれはやめたけど。でも、ようやく終わって様子を見に来たら、寝ぼけた暁さんに捕まっちゃって……。今度は離してくれなくなっちゃうし」

「……………」

「もう、一緒に寝るしかないよね? そうなったら。なんていうの? 生殺し?」

……………。

ごめんなさい。ほんとうに、申し訳ありませんっ!

「その辺に転がしておいてくれてよかったのに……」

「そういうわけにいきません」

申し訳なく言ったら、きっぱりと否定された。

「私の部屋でもよかったし……」

リビングから、私の部屋は続いているけれども、この部屋は玄関に近い方にあるから、結構距離がある。

でも、そう言ったら、ふいに、幸紀君の目が、軽く泳いだ。

「ああ……うーん、暁さんの部屋はね、ちょっと……」

「……………」

……ちょっと？

「と、とにかく！本当に、ごめんなさい！」

怖くなって、幸紀君が何か言う前に、ごまかすように謝ると、彼がクスクスと笑い出す。

「？」

「まあ、幸せだったからいいけどね。……暁さん、あったかかったし」

「おわっ!？」

突然、幸紀君に抱きしめられて、驚く。

しかもそれは、昨日の抱きつくようなのとは違って、とても優しく包みこむような暖かさで、一気に心拍数があがって、顔に血が上るのがわかる。

私の後ろは壁で、逃げ場はない。というより、昨夜のことが後ろ

めたすぎて逃げられないというもの……。

「暁さん、俺、がんばったよね？」

「ああああ、うんっ、うんっ、がんばった、よ」

耳元でささやくように問われた言葉に、必死でうなずいた。

み、耳は、耳はやめてくれ……。

「そっか。……じゃあ」

「？」

ようやく離してくれた幸紀君にホッとしたのもつかの間、彼の顔に小悪魔な笑みが浮かんでいるのに気づいて、一瞬、嫌な予感が頭をかすめる。

「ご褒美、くれる？」

「へ？ご、ご褒美？ってなに……うんっ！？」

……………。

……………。

……………。

たっぷり30秒間キスした幸紀君が、体を離して満足そうにニコッと笑った。

「おはようゝの、ちゅう？」

首を傾げて、いたずらっぽく笑った幸紀君はとてもかわいかった。

かわいかった……けれども!!

………こんなに濃厚なおはようのチュウがあつてたまるかあつ!

12)

「不公平だ……」

職員会議の後、麻由と並んで歩く廊下の窓から見えた光景に、思わず足を止めてつぶやいた。

「なにが？」

一緒に立ち止まってグラウンドを見た麻由が聞き返す。

グラウンドでは野球部やサッカー部が、クラブ活動に汗を流している。

その中で、生徒達に混ざってサッカーの紅白戦に出場している幸紀君が見えた。

「ゆ……元宮君も寝不足なはずなのに、なんであんなに元気なんだ？」

おかしいじゃないか。

同じ寝不足なのに、片や既に疲労感を体中に抱え、片やグラウンドを駆け回っている。

しかも、幸紀君の方が寝ていないはずなのに。

「そりゃあ、まあ？年の差？」

「……………」

さらっと痛いところをついてくれる友人だ。

うれしすぎて涙が出そう……。

「それより、ここにはあたししかないし、幸紀君でもいいのよお？あ・き・ら・さん」

人が言い間違えそうになったのをすかさず拾って、麻由がニヤニヤと笑う。

この野郎……。

例によって例のごとく、昼休みに白状させられて麻由には全部知られてしまっているのだ。

「それにしても、元気だなあ……」

開いていた窓からベランダへ出ると、グラウンドの様子が更によくわかる。広いコートを右へ左へと走り回る幸紀君の姿に、つい口が笑みを作ってしまう。

「あ、また一人かわした！シュート！あゝ、惜しいっ！……へえゝ、元宮君って結構うまいんだね」

麻由がボールを蹴って走る幸紀君の姿に、少し驚いたように言う。

「高校生の時、エースストライカーだったらしいぞ。冗談めかして言っていたから、本当かどうかわからなかったけど……。どうやら

本当だったらいいな」

幸紀君のボールさばきにサッカー部員がついていけなくて悔しがっているのがわかる。

ご両親に反抗していたときも、サッカーだけは顔を出していたらしいから、すごく好きなんだろう。

楽しそうだし……。

「なあに？ 惚れ直し中なわけ？ ニヤニヤしちゃって……」

「は！？ わ、私は別に……」

人の顔を覗き込んで、とんでもないことを言う麻由に思わず顔が熱くなりながらも、首を振る。

惚れ直すも何も、惚れてなんて……。

惚れて、なんて……。

「そ？ ものすごくおく、恋する女の顔、してたけど？」

「ちがっ……！」

「違わないでしょ」

言い返そうとしたのを遮った麻由が、いつになく真剣な顔で、こっちを見つめる。

「……そんなにさ、自分の気持ちを押さえ込むようなことしないで、ぶつかってみたら？」

「……………」

……言わなかったのに、どうして麻由にはわかってしまうんだろう？

やっぱり、どこか私達が似ているから？

麻由の優しい視線に、私は、あきらめて小さくため息を吐き出した。

ベランダの手すりに額をコツンと乗せると、銀色のひんやりと冷たい感触が頭を冷やしてくれる気がする。

「……どんどん、惹かれていくんだ。笑いかけられる度に、名前を呼ばれる度に、かわいいと言われる度に、どんどん、どんどん……どうしようもなく、惹かれていくのがわかって……」

手をつながれて、抱きしめられて、キス、されて。

嫌いじゃない相手からそんなことをされれば、ドキドキするのは当たり前だ。

……でも、それだけじゃなかった。

『もつと』

そう叫ぶ自分がいた。

うれしくて、もっと彼の愛が欲しくなって……。

「でもっ！怖いんだ……！また自分を否定されてしまうんじゃないかって考えると、怖くて……。惹かれていけばいくほど、どんどん、どんどん、怖くなって……」

幸紀君がうちに来てから3日。

あの日以来、彼が私の部屋へ入ったことはない。

もちろん、人の部屋へむやみに入れないというのも、あるだろう。でも、それだけじゃない気がして……。

……あの部屋を、避けている気がする。

『ちょっと……』

今朝、そう言った幸紀君の顔がちらつく。

目を泳がせた彼の様子は、どこかおかしかった。

本当は、聞いてみたかった。その先を……。

でも。

……もう嫌なんだ、あんな気持ちを経験するのは。

『お前には似合わない』

『こんなのお前じゃない』

そう言われて、突き放されるのは……もう……。

それが、怖くて……。

「うん……。わかるよ、その気持ち……」

うつむいていた顔を上げれば、麻由の悲しそうな顔があった。

ああ、きっと今の私も同じような顔をしているんだろうな……。

「でも……。でもね？元宮君は、あと2日で実習が終われば、出て行っちゃうんだよ？」

「……………」

「もし、それっきりで会えなくなっても、いいの？後悔しない？」

麻由の問いに、心の奥がズキンツと重く痛む。

実習が終われば、彼は出て行く。実習の間だけ、そう言ったのは私だ。

期間限定の共同生活。そんな当たり前のことを、わかっていたはずなのに、いつの間にか考えないようにしていた自分がいた。

考えないようにしても、時は過ぎていくのに。

幸紀君の隣は心地良くて……。

「後悔なんて……」

するに決まっている……。

「あっ！」

ボソツと、小さくつぶやいた私の横で、グラウンドを見ていた麻由が叫んだ。

その声につられるように視線を移すと……。

「あ……」

ゴール近くで部員をかわした幸紀君の蹴ったボールが、ゴールキーパーの伸ばした手スレスレに、まるで吸い込まれるように、きれいにゴールの網を揺らした。

う、わあ……。

「すごい！すごかったね、今の！」

麻由の興奮気味の声に、ただコクコクとうなずくしかできない。

幸紀君と同チームの部員たちが、興奮気味に次々と彼に集まっては手を叩きあっていく。

ピーツと笛の音が聞こえて、ちょうど前半戦が終わったらしく、わらわらと校舎側の監督席へ部員が集まり始めた。

「おっ！」

麻由が、何を思ったかそのサッカー部の方へ声を張り上げて、ブンブンと手を振る。

「ちょっ、おい、麻由！？」

サッカー部のみならず、たくさんの視線がこっちへ集まったのに気づいて、慌てて横の麻由を叩くけれども、当の本人はまったく気にした様子がない。

「あ！麻由ちゃん先生！」

「麻由ちゃん先生だ〜！」

そんな声と男子学生のどよめきが聞こえて、あちこちで手を振り返すのが見えた。

さすが、アイドル教師……。

それにしても、クラブ活動を邪魔したら、顧問の先生から文句が………って、一緒に手を振るな、西崎先生（サッカー部顧問、38歳、妻子持ち）！

「元宮せんせえ〜っ、すごかったねえ〜っ、さっきの〜！」

麻由が、幸紀君へとびきりの笑みを浮かべて言う。

あぁっ、そんなことを言ったら……。

ほら、かわいいそうに、幸紀君が殺気のこもった目で部員から見られているじゃないか……。いや、だから西崎先生……あなたはいいでしょう、あなたは！

「ありがとうございますまあすっ！カッコよかったでしょうっ？」

部員と顧問の視線に苦笑しつつ、茶化して返してきた幸紀君に、チラッとこっちを見た麻由が、ニンマリと笑う。

……嫌な予感。

「うん！よかったよおー！ねえ？筑茂先生！」

やっぱり。

こいつは……。私にも、言え、と？

ばっちり幸紀君達にも聞こえるように同意を求められているだけに、返事をしないわけにいかない。

冷静に、いつものように……。

「……すごかった！格好よかったぞ！」

そう、私が叫んだ瞬間、幸紀君の顔が、笑みにくずれた。

……うれしい気持ちを抑えきれない、そんな顔だった。

「あ……う……」

「みんなもっ、元宮先生に負けるなっ！応援してるから、がんばってねっ！」

麻由がすかさず部員達の注目を集めてくれたおかげで、幸紀君のその顔は他の人には気づかれなかったようだけど、こっちは……。

おおっっという激しいどよめき（雄叫び？）とともに士気の上があった部員達に手を振った麻由が、人の火照る顔を覗き込んでニンマリと笑った。

「……愛されちゃってるね？」

「……………」

……信じてもいいんだろうか？彼の気持ちを。

「がんばれ、暁」

麻由の優しい声に、小さくうなずいた。

……人がせっかく決心したというのに。

料理をしている時も、ごはんを食べている時も、どのタイミングで切りだすのが自然だろうかと一人悶々と悩んでいた。

それで結局、風呂につかりながらようやく覚悟を決めて、不安な

気持ちを押し込んで出てきたら……。

幸紀君は、リビングのソファでぐったりと眠りこけていた。

「……幸紀君」

名前を呼んでみたけれど、一瞬眉根が寄せられただけで、また深い眠りへと落ちていく。

まあ、寝不足のうえにあれだけ激しい運動をしてきたら、疲れていて当然か……。

「風邪を引くぞ？」

いつも面倒くさがってドライヤーを使わない彼の髪が、少し湿って額に張り付いている。

起こすのはかわいそうだけど、このままでは風邪を引いてしまう。

私には幸紀君をお姫様抱っこなんて、できないだろうしな……。

「起きろ、幸紀君」

「ん……」

少し揺さぶってみたけれど、まったく起きる気配がない。

……仕方ない。しばらく寝かせておこう。

幸紀君が使っている部屋へお邪魔して、掛け布団を持ってくると、

それを彼の体にかける。ついでに額に張り付いた髪を掬い上げると、あどけない寝顔がかわいくて、小さく笑ってしまった。

「なんで……」

いつの間に、こんなに愛しくなってしまったんだろう……？

祖父と艶子さんの思い出がたくさん残るこの部屋で、誰か他の人と暮らすことになるなんて、考えたこともなかった。

いや、考えられなかったんだ。

……なのに。

ずいぶんと古くなった思い出のソファの上で、すうすうと気持ち良さそうな寝息をたてる幸紀君の姿が、まったく嫌じゃなくて。

あまりに自然で……。

「……好き」

好き、なんだ。

小さくつぶやいたら、気持ちが溢れてきて、涙がにじんだ。

実習も残すところあと2日。

実習生達にとって、恐怖の授業参観が始まった。この教育実習中に学んだことを結集して挑む授業を、教師達が見に来るのだ。

一人、また一人と緊張の授業で燃え尽きていく中、幸紀君は、明日の1時限目の予定だった。

「井上が、もう自分が何しゃべってるかわかんなかったって言った。あゝもう、俺も今日がよかったなあ。嫌なことは早く終わらせたい……」

放課後になって、図書準備室へ帰ってきた途端、幸紀君がくだけた様子で大きなため息をついた。

「まあ、そう言わず。せっかく明日なんだから、他の実習生達の言葉を参考にしてがんばれ。こればかりは私も助けてあげられないしな」

クスリと笑いながら、淹れたてのダージリンティーを、立ったままの幸紀君へ差し出す。

「ありがと。……うん、暁さんに恩返しするためにも、頑張らないと」

コンコンッ

幸紀君がダージリンティーに口をつけた時、軽いノックの音がして、私が返事をしたと同時に、うちのクラスの女生徒が3人入ってきた。

「失礼しまあす」

「なんだ。またお前たちか」

「なんだとは何よお、筑茂センセ冷たいなあ」

3人娘の1人、柳が頬を膨らませた。

柳志乃^{やなぎしの}、小出ゆうか^{こいで}、牧村美那^{まきむらみな}というこの帰宅部3人娘は、放課後になるとよくここへ訪ねてくる、というか遊びに来る。

「あ、先生達いいもの飲んでる」

柳が、私達のダージリンティーをモノ欲しそうに見つめるけれど、これはいつものこと。

「欲しければ、勝手に入れて飲め」

「わーい。美那よろしく!」

私が苦笑混じりに言うのも、牧村がお茶を淹れに立つのもいつものことだ。

「あ、牧村。あのダージリン開けたから、飲んでいいぞ」

「マジで? やった! よかったでしょ?」

「うん。これは好きだな」

「へへっ。先生ならそう言うと思ったんだ！」

牧村と私は紅茶好きという共通点があって、よくその話で盛り上がる。今日開けたダージリンは、この前牧村がおすすめ品だとしてきたものだった。

「先生、牧村も、ごちそうさまでした。……じゃあ、僕はそろそろクラブの方へ顔出してくるんで」

ダージリンティーを飲み終わった幸紀君が、そう言って立ち上がる。

「うん、おつか……」

「あ！あ！ちょっと待ったあ！」

お疲れさまと言おうとした私を遮って、柳が幸紀君のスーツを掴んだ。

「な、なに？」

その勢いにびっくりしたように幸紀君が立ち止まると、柳の隣で小出がカバンからがさごそとデジタルカメラを取り出し、牧村も自分の携帯を取り出して……。

それを見た幸紀君は、何か納得したように苦笑して、柳に腕を組まれ、次に小出と、という具合に次々と写真に納まっていく。

「何事なんだ、一体……？」

突然始まった撮影会に驚いているのは、私だけらしい。

「あれ？先生、知らないの？今実習生の先生達と写真撮るのが流行はやってるんだよ」

……それって、流行りとかいうものなのか？

「今年はさあ、先生達、かなりレベル高かったから、いかにカッコイイ&カワイイ先生とたくさん写真が撮れるか、みたいな競争になってるの」

私が柳に説明を受けている間に、幸紀君はそそくさと部屋を出て行った。

知らなかった、そんなことになっていたとは……。

「元宮先生なんて、校内2位だから、結構撮られまくってるよね」

小出の言葉に首を傾げる。

「校内2位？って、なんの？」

「「「実習生ランキング」」」

……………。

そんなの、あったのか。

3人娘のきれいなハモリに、驚くよりも呆れの気持ちで脱力する。

「ちなみに1位は瀬古先生で、3位が亀井先生でしょ、4位が井上先生で、5位が森山先生。元宮先生を含めたこの5人はね、こんなプロフィールまで出回ってるんだよ」

牧村が、カバンからメモ帳程度の大きさの、5枚つづりの冊子（？）を取り出した。

それを渡されてペラペラとめくると、先程名前の上がった実習生の簡易プロフィールが。

ご丁寧に写真入りなうえに、大学名とか誕生日とか血液型とか……ちよっと待て。スリーサイズ？

「誰だ？こんなもの作った暇人は……」

「新聞部だよ。あそこは常にネタに飢えてるからね。あ、ちゃんと女の先生版も出てるんだよ？スリーサイズは載ってないみたいだけど」

柳の言葉に他2人も『ねー』とうなずく。

新聞部、よっぽど暇なんだな……。

冊子をめくっていて、幸紀君のプロフィールで手が止まった。

K大、22歳。これは、知っている。ああ、血液型はAB型か。麻由と同じなんだな……。そういえばあの2人、どこか似ている気

も……小悪魔笑顔とか。

……ん？

「あれ？元宮先生、誕生日が……」

幸紀君のところに書いてある日付は、6月22日。

「あ、うん。明後日だね、誕生日」

し、知らなかった……。

当たり前のように答える柳に、少しショックを受ける。

「明日で先生最後だし、うちのクラスでも誕生日をかねてお別れのプレゼントをすることになって、今日代表が買いに行ってるんだ」

「へえ……。うん、それはいいな」

生徒達の気持ちに、胸が暖かくなる。

ただ、うちのクラスのことだ。どんなものを買ってくるやら……。

……まともな物じゃないことだけは確かだな。

プレゼント、か。

……私も、何かあげたいな。

3人娘は、その後も勝手に話し続けていたけれど、私はうわの空

で半分以上聞いていなかった。

幸紀君は、何を喜んでくれるだろうか……？

「え？誕生日？」

「うん、明後日が、幸紀君の誕生日だって……。違うのか？」

「明後日って22日？そっか、そうだね、誕生日だ……。忘れてた」

幸紀君がいつもの場所で夕飯の塩サバをほぐしながら、うんうんとうなずく。

本気で忘れていたらしい……。

「でも、なんで暁さんが……。もしかして、アレ、見た？」

「アレっていうのが、プロフィール帳のことなら、見させてもらっただぞ。今日柳たちに」

一瞬間が引きつった幸紀君に、ニヤツと笑って答えると、彼の顔が赤く染まった。

「あゝ、もう……。あの3人娘、余計なことを」

「幸紀君、校内2位なんだって？モテモテだな？」

「またそういうことを……。モテてないってば。俺は大学が近いから、俺を通して他のK大生と仲良くなるうなんて魂胆がミエミエだし。今時の高校生は、結構打算的なんだよ?」

そうかな? 柳たちの話を聞く限りではそんなこともなかったような気がするけれども……。

「それに、あれは、新聞部にどうしてもって泣きつかれて、仕方なく……。あんな形で出回るなんて聞かされてなかったし、恥ずかしかったらいいよ、まったく」

新聞部にだまされたんだと怒る幸紀君に笑って、私は食後のお茶を手にとった。

「まあ、おかげで私も幸紀君の誕生日を知ることができたわけだし……。それで、あの……。幸紀君は、今、何か欲しい物とか、あるのかな?」

「え?」

私と同じくお茶をすすっていた幸紀君が、私の唐突な問いに驚いたように目を丸くする。

恥ずかしくなって、ごまかすようにお茶を飲み干した。

「……あ、あの、な? 幸紀君の誕生日を知って、何かプレゼントを思ったんだけど、何をあげたらいいのかさっぱりわからなくて……。それで……」

「ちょっと待って、それって……。暁さんが、俺の誕生日、祝ってくれるってこと？」

驚いた顔のままの幸紀君に遮られて、うなづく。

祝う、というかプレゼントでもあげられれば、というか……。

「……………」

「幸紀君？」

突然、右手で顔を覆って黙りこんでしまった幸紀君に、おそろおそろ声をかける。

なにか、まずかった……？

「……うわぁ、やば……。すっごくうれしいかも……」

「へ？」

手を外して顔を出した幸紀君は、あのサッカーの時のように、うれしさを隠しきれないような笑みを満面に浮かべていた。

……鼓動が、勝手に速くなる。

「あ、あの、それで、欲しい物、は？」

自分の動揺をごまかすように、同じ質問を繰り返す。

「今欲しい物なんて……一つしかないんだけどな」

「？」

ボソツとつぶやかれた言葉の意味がわからなくて、首を傾げる。

幸紀君が、そんな私の反応に、クスツと笑った。

そして、しばらく考えるようにしてから、何か思いついたらしくニコニコと微笑んだ。

「二つお願いがあるんだけど、いいかな？」

「そんなに難しいことじゃなければ……」

プレゼントの代わりに、お願いを叶えて欲しいということらしい。

「じゃあ、一つめ。明日で実習期間が終わっちゃうけど、引越し先も決まらないし。……日曜日までここに置いてください」

人差し指を一本立てて言われたお願いは、あまりに簡単で。

……でも、彼の口から出た引越しの言葉に胸が痛んだ。

幸紀君は出て行くのだと、改めて気づかされて、一瞬泣きそうになる。

まだ、ぶつかることもできずにいるくせに……。

「……もちろん、かまわない。な、なんなら引越し先が決まるまで、いたらいいし」

ずるい答えだと思った。

怖くて、幸紀君の顔が見られなかった。

「……ん。助かる」

幸紀君の答えは簡潔で、逸らした視線を戻すと、いつものように優しい笑顔がそこにはあった。

何も気づかれなかった……？

「じゃあ、二つめ」

幸紀君がニツコリと笑って、指を2本に増やす。

「俺の誕生日に、暁さんを一日貸しきりさせてください」

「……私を？貸しきり……って？」

「朝から晩まで、俺に暁さんを独り占めさせてってこと。デートのお誘い、とも言う」

「………で、で、でえと！？」

デートって、あのデートか！？

「ダメ？もう予定入ってる？」

「い、いや、予定はない、けど………」

今週は特に学校へ行く用事もなかったはずだし……。

「じゃ、オツケー？」

「あ……うん、わかった」

「やった！」

幸紀君が無邪気に喜んで、どこに行こうかななどと楽しげに言いながら、食器を片付け始める。料理を教える代わりに片付けは幸紀君が担当してくれているから、それはいつものことだ。

それにしても、幸紀君が喜んでくれるのはいいことだけれど、ただデートするだけなんて、祝ってあげることにならないんじゃない？
なんとなく納得がいなくて、テーブルを片付けてから、流しに立つ幸紀君の隣に並んで聞いてみる。

「幸紀君、本当にそんなことでいいのか？他にもっと、欲しい物とかあったら……」

「ん？んゝ……」

ここ数日ですっかり慣れた手つきで食器を全て洗い終えて、タオルで手を拭きながら、幸紀君が私の顔を覗き込む。

「？」

「……俺の欲しいもの、本当に言っているの？」

「うん、もちろん。あ、でも私に用意できるものでお願いしたいけれど……」

幸紀君のことだから、本だろうか？でも、祖父の本は今手に入りにくくなってるから、それを言われたら難しいかな……？あ、でも、祖父の担当だった編集さんに頼めばなんとかしてくれるだろうか？

そんなことを考えていたら、いつの間にか……背中に冷蔵庫があった。

……あれ？

「ん？」

そして目の前には、幸紀君のかわいい顔。

「ええ！？な、なんで！？」

幸紀君が冷蔵庫に両手をついて、私を固定している。

あれ！？何が一体、どうなった！？

「暁さん、本当に俺の欲しいもの、わからない？」

「え、ええと……祖父の本、とか？」

とりあえずさっき考えていたものを答えてみるけど、幸紀君の手は離れず、首を振られてしまう。

「それもいいけど、違うよ」

「じ、じゃあ……家財道具？」

ほら、ほとんど置いてきてしまったし。

「それも違う。……わからない？」

「う……ううん……??」

幸紀君がこう言う限り、きっと私にもわかるものなんだろうと、そう思うんだけど……。

しばらく頭をひねって見たものの、幸紀君の望むプレゼントなんてやっぱりそれ以上思いつかなくて、私は降参とばかりに首を振った。

「ほんとに、曉さんって……かわいいよね」

「ひゃ!？」

かわいいの部分を耳元でささやかれて、思わず飛び上がりそうになる。

「ゆ、幸紀、くん……耳、みみ……」

くすぐったくて、背中がゾワゾワするからやめてもらおうと、そう言ったのに、幸紀君はそれを見無視して、あろうことか耳元でクスクスと笑う。

うう、拷問……。

「暁さん」

「は、はい？」

「俺が欲しいのは………暁さん、だよ」

「!？」

耳元にチュツと音を立ててキスされて、ささやかれた言葉とその行動に、耳を押さえてズルズルとしゃがみこんだ。

い、今、なんて言った!？

「ゆ、ゆ、ゆっ……」

「暁さんが、欲しいんだ」

「……あ……う……」

さらに頭上から降ってきた声に顔をあげると、そこに思いがけず真剣な顔があつて、何も言えなくなる。

てっきりからかっているんだと思ったのに……。

「用意できるかどうか、考えといてね」

最後にそれだけ言って、いつものようにニツコリと笑うと、幸紀君は楽しそうに鼻歌なんて歌いつつ、お風呂場へと消えていった。

………言い逃げ!?

見えなくなった背中に突っ込みつつ、うずく耳と熱くなった顔をもてあます。

『暁さんが欲しい』って……!欲しいって、どういう意味だっ!?

やっぱり、やっぱり………そういう、意味なのか?

………。

だ、大体っ、私が聞いたかったのは誕生日のプレゼントであって、あくまで『おめでとう』と言って渡す、リボンをかけた、あのプレゼントであって………リボンを………?

………。

………絶対、似合わないから。

一瞬、頭にリボンを付けた自分の姿を思い浮かべてしまって、泣きたい気持ちで、大きな冷蔵庫を抱きしめた。

「で？ 暁さん。意識してくれるのはとってもうれしいけど」

「な、なんだ？」

「……このびっみような距離、なに？」

朝の通勤列車の中、私達が乗るこの時間は比較的空いているため、いつものように座席に腰掛けた後、大きなため息と共にそう言っ、幸紀君が近づいてきた。

どうも昨日の夜のことが頭から離れず、今朝からうまく幸紀君の顔を見られなくて、電車に乗った後も、つい一人分くらい空けて腰掛けてしまったのだ。

「いや、あの……なんというか……わっ！」

しっかりいつも通り隣に腰掛けた幸紀君からすいっと視線を逸らすと、いきなり幸紀君の手が伸びてきて、グイッと顔が引っ張り戻される。

あ、メガネの奥の目が、少し怒っている。

「あんまり避けられると、ここでキスしちゃうけど、いい？」

「は！？ ばっ……ダメに決まっているだろう！？」

人が少ないとはいえ、他にも数人の乗客はいる。

思わず叫んで、浴びそうになった視線に顔が熱くなる。

人の気も知らないで、横からは笑い声が聞こえるし……。

「俺は別に気にしないけどね」

「……………」

……気にしてください。お願いだから。

「それより、暁さん。昨日のこと気にしてくれるのは、ほんとにうれいんだけど、そんな態度じゃ皆に怪しまれるよ？」

だ、誰のせいだ、誰のっ！

「……………わかってる。ちゃんと、する」

努力はする。努力は……。

「なら、いいけどさ」

そう言って背もたれにもたれかかった幸紀君から、ふと、小さなため息が聞こえてきた。

「……………どうした？」

「うん……。今日で最後かあって思って。なんかあっという間だったなあ……………」

幸紀君が、少し淋しそうにつぶやく。

そうだ。今日で最後。

こうやって一緒に学校へ行くのも、幸紀君の授業をする姿を見るのも……。

「……今日の授業参観、楽しみにしているからな」

胸に迫ってくる淋しさをごまかすように、あえてニヤリと笑って言う。

「意地悪」

顔をしかめた幸紀君に、クスリと笑った。

これくらいの仕返し、いいじゃないか。

「頑張れ、元宮先生」

本当に楽しみにしているんだから。

「はい」

幸紀君が、しっかりとうなずいた。

結果。

幸紀君の授業参観での評判は、悪くなかった。

自分の担当実習生という欲目を抜いても、10点中8点というところだろう。緊張は見えたものの、何を言っているのかわからないということもなかったし、私としては、満足な授業だった。

「なかなか、いい授業でしたねえ」

時間の許す限り実習生達の授業を見て回っている教頭が、準備室に戻ろうとしていた私の隣に並んで言った。

それじゃなくても細い目をさらに細めて笑う教頭に、こっちもつられて口元を緩める。

「はい。そう思います」

「担当教師が良かったのかな？」

「はは……個性的ですけど？」

おどけて言う教頭に言い返すと、彼が自分の広くなった額をペチツと叩く。

「おやおや……。これは、一本とられましたねえ」

……やっぱり、私のことだったんですか。

休み時間に入って教室移動している生徒が、私達に挨拶をして通り過ぎていく。そんな彼らに教頭は一つ一つ笑顔で答えていった。

彼は生徒からも慕われているのだ。

生徒達が通り過ぎた後、再び教頭が、彼より少し背の高い私を見上げる。

「元宮先生は、どうやら本気で教師を目指しているようですね」

「はい！あ……そう、言っています」

幸紀君の意気込みが伝わっていたのがわかって、つい嬉しくなつて大きな声になってしまった私に、教頭はニツコリと微笑んだ。

「どうやら先生も、実習生を育てることが楽しかったようですね？」

「はい。とても、勉強になりました」

幸紀君を指導してきて、自分が今までやってきたことは間違っていないかったと、そう感じた。

そして、まだまだ未熟だということも。

「そうですね。……自分が誇りを持っている仕事だからこそ、それを目指している若者を指導できることは、幸せなことだと、そう思いませんか？」

「はい」

「その上に、彼らを見ると、初心に帰らせて貰える。教師っていいなと再認識させられる。だから、私は教育実習というのものが

好きなんですよ」

ふんわりと優しく笑う教頭に、やっぱりこんな風になりたいな、と思う。

なんだか、胸の奥が暖かくなって、後で幸紀君にも教えてあげようと思った。

「ああ、そうそう」

「？」

職員室と図書準備室への分かれ道で、会釈をして別れようとした私に、教頭が突然立ち止まった。

「私の妻は、実は、私が昔担当した教育実習生でしてね」

「え？　そうなんですか！」

それは初耳だ。おしどり夫婦だとは聞いたことがあったけれども。

「ええ、今でも他校で教師をしていますよ」

教頭がそう言って、チラッと後ろを振り向く。その視線につられるように振り返ると、幸紀君が早足でこちらへ向ってきているところだった。

そして、教頭が再び私を見上げてニッコリと笑う。

「……なかなか、いいものですよ？」

.....。

.....はい？

「.....ええ！？ちょ、教頭！？」

どういう意味ですかっ！？

私の叫びむなしく、教頭はフフツと笑っただけで職員室へと去っていった。

「どうかしたんですか？顔、赤いですけど.....？」

追いついてきた幸紀君に私はただ首を振った。

.....教頭、恐るべし。

その日の晩、教育実習の全ての行程を終えた実習生達と一緒に、学校近くの居酒屋を貸し切って、盛大な打ち上げが行われることになった。

打ち上げが始まる前、幸紀君に、

「俺がいるし、またあの状態になってもちゃんと我慢するから、飲んでもいいよ？」

などと小声で言われた。

……そんなことを言われて、本当に酔っ払ったら、私は大馬鹿者だと思っぞ？

チビチビと、正体を失わない程度にビールを飲んで、隣に座る幸紀君の窺うような視線を時々受けるのが気にならないでもなかったけれども（私の境界線を見極めようとしているらしい）、それでもごくごく一般的な打ち上げは盛り上がっていた……のだけど。

初めは、皆、自分の担当教師に酒を注いで、実習中の礼など言いつつ、和やかに談笑していた。

しかし、いつの間にかやら、気づくと隣のテーブルだけに、異様に黒山の（スーツの集団だから特に）人ばかりが出来上がっていた。

その中心にいるのは……麻由。

「各務先生、次、何飲まれます？」

「んー、じゃあー、ライチ」

「ライチお願いします！……やっぱり飲むものもかわいっすよねえ」

違っぞ？ 麻由が一番好きなのは梅干の入った焼酎だぞ？ しかも親父のような飲み方するんだぞ？

「先生の趣味ってなんですか？」

「趣味って言うほどでもないけどお、映画見るのは好き」

「映画ですかっ！いいですね！こ、今度俺とっ……」

……我も我もと名乗りをあげている実習生達よ、君達に『どうしよっかなあ』なんてかわいく笑っている彼女が見る映画は、ホラーだけだぞ？しかもかなりグロテスクなのが好みだったりするんだぞ？

……うゝん。知らぬが仏。

「どうかしたんですか？むずかしい顔して」

「ん？ああ、ちょっと隣のテーブルがな……」

あまりにあわれで。実習生達が。

「あゝ、すごいですよね、あのテーブル……」

私の答えをどうとったのかは知らないけれど、幸紀君が隣のテーブルヘチラッと視線を送って、恐れとも呆れとも取れるような声で言う。

それに対して、私の向かい側に腰掛けて春巻きをぱくついていた香田さんがうなずいた。

「まあねえゝ。みんな大学帰らないといけない奴ばっかだし、必死なんですよ。……それにしても、なんっで気づかないかね？まったく相手にされてないじゃんね？」

体育会系の香田さんが、麻由に群がる実習生たちをバツサリと切る。

さすが同性、わかるらしい。

「え？　そうか？　なんか、瀬古とか余裕ぶっこいた顔してねえ？」

麻由のところから追いやられてきていた井上君が、香田さんの隣で不思議そうな顔をする。

その言葉に隣のテーブルを見ると、例の校内ランキング1位と3位と5位がいる。まあ、ここには2位と4位がいるけど……。

そういえばこのメンバー、麻由と阿部さんが入れればあの日の飲み会メンバーだな。

「なにになに？　何の話？」

噂をすれば、阿部さん登場……。

お酒を持って移動してきた阿部さんに、香田さんが話の流れを説明した。

「ああ、それは井上くん、わかってないね！　そんなこともわからない人には、各務先生は手に負えないよ、絶対。早めに振られて正解だね！」

「うっ……お前な……」

あゝ、阿部さん、容赦ないな……。井上君、痛そうだぞ？

「あたし、さっき通りがかりに各務先生の言うこと聞いてたけど、ケータイの番号聞かれた先生ね、『今日、持ってきてないの〜』って言ってた。さらに、『自分の番号、覚えられなくて……ごめんね?』って。わかる?この意味」

阿部さんが麻由の真似をして可愛らしく小首を傾げて謝ってみせる。

それを見て、思わず笑った。結構、似ている。

「わかる?って言われても……。そのまんまの意味……」

「なわけないでしょ!あゝもう、これだから男はっ」

まったくわかっていない様子の井上君に阿部さんがビシツと言う。

「こら、ひとくくりにするなよ、阿部。そこは、『これだから井上は』だろ?……各務先生、ケータイ持って来てましたよね?」

幸紀君まで井上君にひどいことを言って、私に同意を求めてくる。

「まあね。ああ言っている手前、礼儀としてきちんと音は切ってあると思うけど。彼らは、どうやらまったく相手にされていないらしいな」

「ということよ、わかった?井上くん」

「うん。各務先生はやっぱり優しいなあって……」

……ああ、全然わかってないな。恋は盲目。

井上君がぼーっと男達に囲まれた麻由を見つめるのを見て、阿部さんがやれやれと首を振った。あきらめたらしい。

「まあ、モテる女は大変だ、ということでもいいんじゃない？」

今までひたすら食べることに熱中していた香田さんが何杯目になるかわからないビールを注文して、満足げにそう言った。

それを受けて、井上君が何かを思い出したように幸紀君へ向き直った。

「ああ、そういえば、元宮も今日は大変だったって？」

「……何が？」

「まあ、とぼけちゃって。あたしも聞いたよお？かなりプレゼント攻撃にあったんだって？元宮センセ」

井上君と阿部さんのニヤニヤ笑いに、幸紀君が苦笑いする。

「へえ、じゃあもしかして、そのピンクの、えらくかわいらしいネクタイもプレゼントの一つ？」

そう言って香田さんが指差したのは、幸紀君が締めているネクタイで……。

それを見た瞬間、私は堪えきれずに噴き出してしまった。

「……せゝんゝせゝ?」

「あははっ…いや、だってっ……」

笑いを止められない私を、幸紀君がジトツと睨む。

幸紀君が今締めているピンクの小花柄ネクタイは、例の、うちのクラスからのプレゼントなのだ。このネクタイの他に、ピンクの花束と、ピンクのネコ耳を彼はもらっている。

そう、ピンクづくし。

まあ、うちのクラスのことだから、普通のプレゼントなんて用意していないだろうとは思っていたけど……。なぜに、ネコ耳?

それにしても、他の男性ならそんなものをもらったら、似合わないとおかしいと思うのに、幸紀君の場合、あまりに似合いすぎて、おかしくて……。クラスの皆の前で、もらったネクタイを締めて、しぶしぶながらもネコ耳をつけた瞬間、クラス中が一瞬しゝんと静まり返ってしまった。

まあ、その後『似合う』と『かわいい』の大合唱と大爆笑になったのだけだ。

いや、もう、あまりのかわいさに、鼻血ふきそうだったし。

……幸紀君、写真撮らせてくれないかなあ?

幸紀君からその事情を聞いた3人も、そろって噴き出した。

「ネ、ネコ耳って……!」

「絶対似合う〜! あたしも見たかった!!」

井上君と阿部さんが、テーブルをバンバン叩きながら爆笑している。

「あゝ、おかし……! で? 何? 結局、元宮はそのプレゼントしかもらわなかったわけ?」

ひとしきり笑った後、ムスリとビールをあおっている幸紀君に、香田さんが聞いた。

そういえば、あれだけ高校生達から呼び出されたりしていたけど、一度も何かを持って帰ってくることはなかったな……。

そう思って、横の幸紀君を見ると、なぜかばっちり目があってしまった。

「?」

そして、幸紀君が何を思ったかニヤツと笑う。

……嫌な予感が。

「まあね。そういうの、受け取るわけにいかないし。それに……俺が欲しいプレゼントは、明日、もらえるかもしれないし?」

「!」

はわあっ!?

な、何を言い出すんだっ! 突然!

「え? え? それって何? 彼女とかから……」

「あ、あのっ! メニュー、そう、メニュー、どこかなっ!？」

興味津々で乗り出した阿部さんが聞き返そうとしたのを、思わずさえぎってしまう。

……ああっ、しまった! すごく不自然だったか、今の! みんな、びっくりした顔でこっち見てるし!

「え、ええと……」

「はい、どうぞ?」

ごまかすように何か言おうとした私にメニューを差し出したのは、にこやかな笑顔を浮かべた幸紀君だった。

……なんだか、その笑みが怖いのですが。もしかして、さっきの発言は、ネコ耳のことを大笑いした報復……?

「……ど、どうも」

おそろおそろメニューを受け取ろうとしたとき……。

「ああ、そうだ、先生。ついでに……俺の欲しいものも、一緒に頼んでもらえます?」

ニツコリと微笑んだ小悪魔に、私はメニュー表を取り落とした。

ごめんなさい、もう、笑いません……。。

15

どうしよう……。

「暁さぁん！そろそろ出かけようよー！」

リビングからは幸紀君の呼ぶ声が聞こえる。

出かけようと言っていた時間が過ぎ始めていることには気づいていた。

準備もできているのだけど。

……どうしても鏡の前から動けない。

「暁さん？」

コンコンツと戸の叩かれる音が聞こえて、ようやく、ノロノロと鏡の前から移動した。

一息を吐き出して、ゆっくりと戸を開ける。

「……………」

ちょうど目の前にいた幸紀君が、一步下がった。

そして、出てきた私の格好を見て、驚いたように目を丸くしたまま、固まる。

「や、やっぱり、変、かな？変、だよな、うん。私も変だと思うんだ。……き、着替えなおしてくるっ！」

クルッと回れ右して、再び戸を開けようと手を伸ばすと、その手がパシッと幸紀君に掴まれてしまった。そのままグイッと戸の前から引っ張られる。

「スカートだ……。暁さんが、スカート穿いてる」

幸紀君が、しみじみと人の足元を見ながら言う。

……もう、だから嫌だと言ったじゃないか！麻由の阿呆！

私は、普段からパンツスーツを愛用していて、スカートを穿くことなんてほとんどないし、枚数だって持っていない。だから、当然今日だっていつものようにスカートなんて穿くつもりはなかった。

それなのに、昨日麻由に今日のことを相談したら、『絶対、スカート！』と強く言われて、しかも、もし穿かなかったことがバレたら、何されるかわからないから、仕方なく……。

さんざん悩んで、膝丈のスカートに、七分袖のシャツ、あとは首元にチョーカーを巻いただけのシンプルな形にはしたけれども……。

大体、スカートは好きだけど、似合わないし、かわいい格好でこの話し方だと更に浮くから、苦手なのに。

「やっぱり着替えて……」

「いいっ！」

「へ？」

激しく後悔している私をさえぎって、幸紀君が私の手をギュッと握る。

「すっごくかわいい、暁さん！あゝ、もう、絶対そんな格好してくれないと思ってたから、不意打ちだよ！」

「……変、じゃない？」

「ぜんっぜん！それどころか……。うわゝ、もう、どうしよう！すっごくうれしいんだけど！……ねえ、暁さん？このかわいい格好、俺のためってうぬぼれてもいい？」

カアツと顔に血が上る。

そ、そうか、幸紀君のため？そう、なるのかな……。？そういえば、昔の恋人の前でもスカートなんて穿いたことなかったな……。

幸紀君はといえば、白が基調の長袖シャツに細身のブラックジーンズだ。

シャツの間から見える、シルバーのクロスに男を感じさせられて、思わず目を逸らしてしまう。

「じゃ、行こっか」

笑顔でそう言った幸紀君に手をつながれたまま、“幸紀君誕生日デート”が、始まった。

幸紀君の運転する私の愛車で（誕生日のお祝いだから私が運転するというのは、断られた）連れてこられたのは、水族館だった。

「来たことある？」

幸紀君の問いに首を振る。

数年前にできてからずっと来てみたいとは思っていたものの、なかなか来る機会がなかった。

土曜日ということと、梅雨の晴れ間も重なって、家族連れにカップルにと、結構賑わっている。

入り口付近が混雑していて、人ごみに押されそうになる度に幸紀君が助けてくれた。

「暁さんは、ここでちょっと待ってて」

「え？」

入り口に入ったところで、幸紀君はそう言っつないでいた手を離すと、私をひとり残して、さらに人が固まっているところへとスタスタ行ってしまう。

いきなり一人にさせられて、近くの柱へもたれかかったまま、所在無げに待っていると、しばらくして幸紀君が入館券を2枚手にし

て戻ってきた。

「はい、どうぞ」

「え!?!なんで? 私が払うよ。幸紀君の誕生日なのに……」

手渡された券に慌てて財布を取り出そうとしたら、その手を止められる。

「いいから! デートは男が払うもんなの!」

「でも、今日は……」

「ダ・メ! これ、俺のポリシーだから。暁さんには今日、それに従ってもらうからね」

もらうからねって……。

私にだってお祝いさせて欲しいんだけど。初めからそのつもりだったし。

「でもな、幸紀君……」

「俺の誕生日を祝ってくれるつもりなら、思いっきり楽しんで? 俺はそれが何よりうれしいから、ね?」

むう……。

そんなことを言われたら何も言えなくなるじゃないか。

「……じゃあ、夕飯は私がごちそうするからな。これは私も譲らないからな！」

「そんな力んで言わなくても……。わかった。じゃあ、手作りがいな」

「うん！がんばって腕を振るう」

交渉が成立したところで、お互いになんだかおかしくなって顔を見合わせて笑った。

朝から感じていた緊張も、一気にとけた気がする。

「じゃ、行きますか」

そう言って差し出された手を、ためらいなく握り締めた。

この水族館で一番気に入ったのは、クラゲの水槽が大きかったことだ。

他の水族館でもクラゲにはつい見入ってしまうのだけど、この水族館にはたくさんの種類のクラゲがいて、思わず水槽に張り付いてしまった。

「クラゲっていいよね……」

「うん。あの、ふわふわしているのを見ると、癒されるよな……」

大きくてゆらゆらと揺れているものや、小さくて一生懸命ぶかぶかしているもの、そんなクラゲたちを見ていると飽きなくて。

結局、二人そろって気に入ってしまって、ゆうに10分以上、クラゲの水槽の前から動けなかった。

そして、クラゲ達に名残を惜しんでから、レストランで軽い昼食をとって、水族館の目玉であるアシカショーやイルカショーも見て、その迫力とかわいさにさらに大満足した。

「楽しかった？水族館」

「うん！すつごく！……あ」

満たされた気持ちで出口に向かう途中、出口付近に用意されているおみやげ物屋さんで目に付いた物に、思わず足を止めてしまった。

ああっ、か、かわいいっ……！

手の平に乗るサイズの、真っ白なクラゲのぬいぐるみが置いてあった。イルカやアザラシのぬいぐるみなど、定番のぬいぐるみの横に置いてあるそれに、思わず手を伸ばしそうになって、幸紀君がいたことに気づいて、慌てて手を引っ込める。

「どうかした？」

不思議そうな顔で首を傾げる幸紀君に、小さく首を振る。

「なんでもない。……ええと、ちょっと、化粧直しに行ってくる」

「ん。ここで待ってるから」

幸紀君がおみやげ物屋さんに入っていくのを見てから、手洗いへと足を向けた。

「馬鹿だ、私……」

つぶやいたら、涙が出そうになった……。

「あれ？ここ……」

水族館を出て、次はどこへ連れて行かれるんだろうと外の景色を見ていたら、だんだんと見覚えのある街並みに変わってきていることに気づく。

「幸紀君、もしかして……？」

私の問いに幸紀君はニコツと笑っただけで答えず、適当な駐車場へ車を入れると私を促して車を降りた。

しばらく黙って歩くと、小さい頃に祖父とよく来た公園に辿り着く。

「野花の公園……」

「うん。どうしても暁さんと一緒に来たくて」

ジャングルジムとブランコ、あとは砂場があるだけの小さな公園には、日暮れ間近ということもあって、一組の親子連れがいるだけだった。

そして、その親子連れも、私達がベンチに腰掛けると同時に公園を去っていき、私と幸紀君だけが残された。

「懐かしいな……」

「ここに来るの、久しぶり？」

「うん。ずいぶん来ていないな、そういえば。高校までは家も近いきし、たまに散歩したけど……。家を出てあそこで暮らし始めてからは、小さくだけ見えるし、あまり足を伸ばすことはなかったし……」

近くの街並みは少し変わってしまったけれど、この公園は私が子供の頃からほとんど変わっていない。多少遊具が新しくなったり、逆に錆びてしまっていたりするぐらいで……。

すごく懐かしい……。

「そっか。……“月光花”はここから生まれたんだよね」

「うん。祖父と艶子さんもここで、このベンチで出会ったんだ」

きっと祖父達が出会った頃のベンチではないだろうけど、それでも愛しくなって、私はベンチをひと撫でした。

私がブランコで遊んでいようが、砂場で他の子と喧嘩していようが、祖父はいつもこのベンチで、隣にまるで誰かがいるかのように一人分空けて腰掛けていた。

そしてあの日。

ずっと待ち続けたその人が、その場所へ、祖父がいつも空けていたその場所へ腰を下ろしていたんだ……。

ずっと、二人のような恋がしたいと思っていた。

あんな風に、柔らかに、暖かい恋を。

かけがえのない、たった一人の人と……。

つないでいた手がふいにキュッと握られて、隣に座る幸紀君を見れば、目が合った瞬間にフワッと優しく笑いかけてくれる。

……どうか、彼がその人でありますように。

祈りを込めて、目を閉じたら。

暖かいキスが降りてきた。

15) (後書き)

次が最終話です。

もう少し、お付き合い下さいませ。

エピローグ

午後9時30分。

宣言どおり、幸紀君の好物をかたっぱしから作って、買ってきたワインとケーキで誕生日をお祝いした。

料理も喜んでもらえたし、ワインもケーキもおいしくて幸せだったし、言うことないくらい楽しかった、ただけれども。

……あと2時間半。

少し酔ってしまった私から先に風呂へ入って、今は幸紀君が入っている。

おかげですっかり酔いも覚めた。

覚めて……思い出してしまった。

………例の、プレゼントを。

リビングのソファに腰掛けて、そこに置いてあるクッションを抱きしめた。でも落ち着かなくて、また立ちあがってうろうろとテーブルの周りを一周する。

……あと2時間半で幸紀君の誕生日が終わってしまう。

「ど、どうしよう……」

幸紀君は本気だろうか？ やっぱり冗談だったとか……………いや、あの目は本気だったな。

クッションをさらにもう一つ抱きしめる。

幸紀君のことは好きだし……………キスだって……………いっぱいしたし……………。

……………。

ああっ、でも、プレゼントというからには、『はい、どうぞ』ってあげるものだろうか！？ それは、それは、あまりに……………恥ずかしすぎる。

どどどどうしようっ……………！？

再びうろうろと挙動不審な行動を続けていると、突然後ろから、プツと噴き出す声が聞こえてきた。

「あ」

いつからそこにいたのか、幸紀君が激しく肩を揺らして笑っている。

うう……………恥ずかしすぎる。

慌ててクッションをソファへ戻した。

「あゝ、もう、ほんつとに、暁さんは……………」

風呂上りの濡れ髪を、タオルでガシガシと拭きながら、幸紀君が

私の前に立つ。

「あ、あの……ええと……」

どうしたらいいのかわからずに、ただ恥ずかしくて、熱くなった顔をごまかすようにうつむいた。

その私の頭に、幸紀君の大きな手が乗って、ふわっと優しく撫でられる。

男の人にそんな風に頭を撫でられたことなんてなくて、驚いて顔を上げれば、幸紀君がすごく優しい顔で、でも、少し困ったような顔で、私を見つめていた。

「そんなに固くならないで。無理強いなんて、するつもりないんだから。……あんなこと言ったけど、俺が欲しいのは暁さんの気持ちなんだし。俺としては、今日一日暁さんを独占できて、暁さんに祝ってもらって、それでもう十分だから、ね？」

無理強いなんて、そんなこと思ってないのに。

だから……十分とか、言うな。そんな、いなくなるみたいなこと……！

『ここにいて』と言いたいの。言って、その胸に飛び込んでしまいたいのに。

その後待ち受けるものが怖くて、ただ、黙って、何度も首を振った。

「あ！そうだ！」

突然、幸紀君がそう叫んで、私へニコツと笑う。

「？」

「俺、暁さんにプレゼントがあるんだ。ちょっと、待っててね」

プレゼント？幸紀君が私に？……って、なぜ？今日は幸紀君の誕生日で、プレゼントをもらうべきなのは幸紀君の方じゃ？

そんなことを考えて首を傾げていると、幸紀君が自分の部屋から見覚えのある袋を持って現れた。

「あれ？それ……」

幸紀君が持っていたのは今日行った水族館のおみやげ物屋さんの袋だった。

私が化粧直しに行っている間に、何かを買っていたのは気づいていたけれども、誰かへのおみやげなんだろうと思っていたんだけど。

「はい。暁さんに、プレゼント」

「え？でも……」

幸紀君の誕生日に、その本人からプレゼントをもらうって、どうなんだろう？

「いいから、いいから。開けてみてよ」

ニコニコと、私が袋を開けるのを待っている幸紀君に、これ以上何か言っても聞き入れてもらえないんだろうと、とりあえず、袋を開ける。

袋の中にまた紙袋が入っていて、それにはプレゼント用のリボンが巻いてあった。

……これじゃあ、本当に逆じゃないか。

そう思いながらも、そのリボンをほどいて、中身を取り出して……。

「……こ、れ……」

中から出てきたものを手に取った瞬間、私は動けなくなった。

……クラゲのぬいぐるみ。

おみやげ物屋さんで、私が手に取ろうとしてやめた、あの、かわいいぬいぐるみだった。

「……ゆ、きくん」

「気に入ってくれた？」

「どう……して……」

どうしようもなく、声が、震える……。

「ん？だって暁さん、これ見てたでしょ？買うのかなって思ったのに、やめちゃったみたいだったから、『どうかした？』って聞いたんだけど、『なんでもない』って、なんか悲しい顔で言うし……。暁さん、こういうの好きそうだし、どうしたんだろうって。暁さん買わないなら、俺が買ったら、喜んでくれるかなって、買ってみたんだけど……。って、なんで泣いてるの！？」

クラゲにつけられたかわいい顔が歪んだなと思ったら、涙がボロボロと流れ出した。

幸紀君が驚いたように、今回はパジャマ代わりのTシャツで私の涙を拭ってくれる。

「どうしたの？俺、暁さんに喜んで欲しかったんだけど……。いけないことした？ぬいぐるみ、気に入らなかった？」

……違う、違うんだ。

言葉にならなくて、首を振る。

「じゃあ、どうしたの？」

困ったように優しく涙を拭き続けてくれる幸紀君の手を握り締め、黙ったまま、私の部屋へ彼を引っ張った。

「え？ちよっ……。暁さん！？」

驚いた様子の幸紀君と一緒に私の部屋へ入って、電気をつければ、少女趣味丸出しのフリフリカーテンやベッド、ぬいぐるみや人形達が出迎えてくれる。

私には、当たり前前の、心安らぐ光景……でも。

「暁さん……?」

後ろから、幸紀君の戸惑った声が聞こえて、ずっと掴んでいた彼の手を離れた。

「……ゆ……幸紀君は……嫌じゃない?」

「え?」

声がどうしようもなく震えて、幸紀君の顔を見ることができない。

でも、聞かなければ……。ずっと、聞きたかったことを、聞かなければ。

前に、進めないから……。

「この部屋……。わ、私、この部屋……似合わないだろう? 変、だろう? 私が、こんな、かわいいものに囲まれているの……。幸紀君は、こんな私を……嫌じゃない、の?」

「……………」

勇気を振り絞って聞いたのはいいけれど、やっぱり怖くて。

逃げるようにベッドに腰掛けて、下を向く。

ずっと持ったままだったクラゲをぎゅっと握り締めたら、クラゲ

の顔が不細工に歪んだ。

これを買ってくれた幸紀君なら、もしかしたら……。でも……。

幸紀君が、そんな私の前にゆっくりと立ったのがわかる。

でも、その口からため息がもれた瞬間、私は堪えきれなくなって、耳を塞ごうと両手を上げた。

「暁さん……」

「やっ……」

やっぱり、聞きたくない。怖い！

でも、耳を塞ぐ前に、パシッと両手がかまれて、クラゲのぬいぐるみが幸紀君の足元へコロコロッと転がる。

「幸紀く……」

「俺、好きだって言ったよね？」

「……………！」

静かに言われた言葉に、ビクリと体が反応して、おそろおそろ顔をあげた。

目の前には、幸紀君の少し怒った顔があって……。

「俺は、暁さんが好きだよ。言葉だけじゃなくて、体中でそう伝え

てきたつもりだったんだけど……。伝わってなかった？俺の気持ち、信じてもらえてなかったの？」

「ちがっ……！そうじゃないっ、そうじゃなくて！」

幸紀君の気持ちは、すごく伝わってきて、すごくうれしくて……。

信じてなかったわけじゃない。そうじゃなくて、ただ……。

フルフルと、首を振る。

「わ、私、今まで『お前には似合わない』って……。『こんなお前じゃない』って、言われてきて……。だから、この部屋を見ても『好きだ』って言うてくれた幸紀君の気持ちがうれしくて……。でも、やっぱり、だんだん不安になってきて……。」

怖かった。

私のことを、私の全部を好きになってくれる人はいないんじゃないかなにかと思っていた。だから、私も誰も好きにならないようにしようと思った。

傷つきたくなかったんだ、これ以上……。

……でも。

そう思っていたはずなのに、幸紀君のことをあっという間に好きになってしまっ。

幸紀君に否定されたら、私はもう二度と立ち直れなくなる、そう

思った……。

「誰がそんなバカなことを……。暁さんも、俺とそんな奴、一緒にしないの！俺はそんな風に思ったことなんて、一度もないよ？なんで、不安になったりするかな……。？」

「で、でも！……幸紀君だって、あの朝、ここで目覚めた朝！……この部屋のこと、鼻で笑ったじゃないか！それに、あれ以来、この部屋に寄り付こうとしなかっただろう！？私が眠ってしまった時だって、こっちに運んでよかったのについて言ったら、『ちよつと……。』って、目、泳がせたし……。』

だから、幸紀君の‘好き’が、私の全てに対してなのか、そうじゃないのか、わからなかった。

「やっぱり、幸紀君も嫌なんだろうって……。そう、思って……。』

また涙が出てきて、顔をうつむけた。

否定されるのが怖くて、自分が傷つきたくなくて、どうしても聞けなかった。

『どこにも行くな』と、『ここにいて』と言いたくて、でも、言えなかった。

「マジで……。？うわ……。ごめん、暁さん！俺、そんなつもりじゃ……。まさか、そのせいで暁さんがそんな風に思ってたなんて、全然知らなくて……。』

焦ったようにそう言った幸紀君が、ひざまずいて、正面から優し

く抱きしめてくれる。

「幸紀君？」

「ごめん……。俺、毎日、どんどん暁さんとの距離が縮まってきた気がするのに、どうしても暁さんが完全に傾いてくれなくて、どうしよう、どうしたらいいって、氣ばかり焦ってた。俺、まだまだガキだ……。自分のことばかりで、暁さんの気持ちに気づいてあげられなかった。ほんとに、ごめん……」

自分を責めて、辛そうに謝る幸紀君に、腕の中でただ首を振った。

幸紀君は悪くない。私が、ただ勝手に、怖がってただけだから……。

ずっと首を振り続けていると、幸紀君の腕が緩んで、コツンと額がくつついた。

その、至近距離にある彼の顔が、なぜか赤い……？

「？」

「……あのね、暁さん。俺、今からすっごく恥ずかしい告白するけど、笑わないでよ？」

「恥ずかしい、告白……？」

「俺、確かに暁さんの部屋に近づかないようにしてた。でもそれは、暁さんが気にしてるような理由じゃ全然なくて……。目が泳いだっていうのも……。止める自信がなかったとか、かっこ悪いこと、

言えなかったからっていうか……………」

格好悪い…………？止める自信って…………？？

「なにを…………？？」

さらに顔を赤くする幸紀君に聞き返せば、小さな声で返事が返ってくる。

「だから、自分を……」

「自分？」

さっぱり意味がわからなくて首をひねった私に、幸紀君が顔を上げて、盛大なため息をついた。

「……なんで暁さんは、こんなに鈍いかなあ」

む…………失礼な…………。

「もう……。だからね？俺と暁さんはあの日、ここで…………寝たわけでしょ？暁さんは酔って覚えてないかもしれないけど、俺は覚えてるんだよ、すっかりばっちり。だから当然、この部屋へ入れば、その時のことを思い出すわけで、暁さんが寝ちゃった時だって、ここに連れて来たら理性なんてぶっとびそうだったし、今だって、どれだけ我慢してると思っ…………」

「わあゝ！いいっ！それ以上言わなくていいからっ！」

とんでもなく恥ずかしいことを言う幸紀君の口を慌てて塞いだ。

かあつと顔が熱くなる。

そそそ、そうか、そんな理由……。

幸紀君が、クスクスと笑いながら、私の手を離して、真っ赤になっ
っているはずの顔を覗きこむ。

「だから、俺はこの部屋が嫌で避けてたんじゃないから。わかった
?」

「うん……」

コックリとうなずく。

「……俺は、暁さんのことが好きだよ。きっと、どんな暁さんを知
っても、好きだって言える」

真剣な顔でそう言ってくれた幸紀君に、きゅっと手を握られて、
私もゆっくりとそれを握り返した。

うれしい……。。

再び抱きしめられて、そのぬくもりを私も抱きしめ返そうとして
……。

「あれ？」

ふともう一つの疑問が解けていないことに気づいて首を傾げた。

「じゃあ、あの時笑ったのは？鼻で笑ったよな？」

そもそも初めにそれがあったから、ずっと不安を抱えることになったんだ。

顔を上げた幸紀君を、なんで？と見つめれば、彼が『うつ』と答えにつまる。

「？」

「……それって、あの日曜日の朝、俺が暁さんに説明した時のこと、だよな？」

「うん、それ」

私のことを心配してこの部屋へ入ったと話してくれた時に、フツて笑われたんだ。

てっきり、『似合わない部屋』だと思ったんだろうなと……。

「鼻で笑ったつもりなんて、全然なかったんだけど……。むしろ、あまりに暁さんらしくて笑っちゃったっていうか……」

「？」

「……………」

「?..?」

「……………それ、話さなきゃダメ？」

「え？話してくれないのか？」

なんでそんなに言いたくないんだろうと、首を捻れば、幸紀君が『う』と唸り声をあげる。

「……どうしても？」

「できれば、聞きたいな」

「暁さん、この話聞いたら、俺のこと嫌いになるかもしれないよ？」

「ならないよ。約束する」

私のことを全部好きだと言ってくれた幸紀君を、嫌いになることなんてありえない。今までのが全部嘘でしたとも言われない限りは。

とうとう幸紀君が、あきらめのため息をつく。

「そんな、あっさり……。いや、もちろん、うれしいんだけど……。ああ……。この話だけは絶対しないつもりだったのになあ。もう、知らないからね？ちよつと話、長くなるけど、いい？」

コックリとうなずくと、幸紀君がしゃがみこんで、もう一度ため息をついた。

「……俺さ、暁さんのこと一目ぼれだったって言ったけど、あれ、半分嘘なんだ」

嘘？半分って、なんだ？

「初めて会った時に、いいなあって思ったのも事実なんだけどね。でも、正確には二目ぼれ、かな……」

二目ぼれ……？？それは、二度目に会った時、ということ……？

「え？ちよっと、待った。私達が初めて会ったのは、あの教育実習の顔合わせの時だよな？」

あの、幸紀君のかわいさに私が内心飛び上がった、あの時のはず。大体、一目ぼれというのも信じられなかったけれども、二目ぼれって、なんだろう？

そう思って、首を傾げて幸紀君を見ると、彼が言いにくそうに首を振る。

「実は違ったりするんだよね、それが。……もつと前」

「ええ！？どこかで会ってた!？」

幸紀君の言葉に驚く。

まったくそんな記憶はないぞ？

これだけ私好みのかわいい顔に会っていれば、私が覚えてないわけがないと思うんだけど……。一体、どこで……？

「睨さんって、電車に乗ってる時、あんまり周りを見るほうじゃないよね？本読んでたりして……」

「え？……ああ、うん、確かに」

電車の中で本を読むのは好きだ。あのガタゴトンという揺れが心地よくて、ぼおつと考え事をしていることも多いと思う。それが原因で乗り過ごしたこともあったり……。

「でもね、暁さんが周りを見てなくても、結構周りの人は暁さんを見てるんだよ？知ってた？」

「え？ええ？なんで？私、何か変な動きしていたりする……？」

自分で気づいていないだけで、妙な動きとか変な顔とか、していたりするのかと思って、やだなあと、そう聞けば、幸紀君が盛大にため息をついて、ガツクリとうなだれた。

「違うって……。っていうか、やっぱり、気づいてないし……。あのね、暁さん。自分がかかなり目をひく美人だってわかってる？自分で気づいてなくても、結構周りは暁さんのこと『きれいだなあ』って見てたりするんだけど」

……私が、美人？まさか。

「そんなわけない。だって、声をかけられることなんてめったにないし、言い寄られることだって、ほとんどないし……。幸紀君の思い違いだよ」

麻由みたいにモテたことなんてないし、どちらかといえば怖そうな顔だと思う。

ほら、私は覚えてないけれど、香田さんたちに絡んできた男達をひと睨みで蹴散らしたというし……。

「思い違いじゃないって！……確かに、暁さんは、声をかけにくい雰囲気美人さんだから、自覚ないのもわからないでもないけど。凜としてかっこいいっていうか、声かけても相手にしてもらえないだろうなっていう感じの美人だから。俺も、初めて暁さんを見た時は、そう思ったし……」

うーん、そうは思わないけど……。

確かに、麻由からは『美人なんだから自信を持て』と言われるけれども、それは友人の欲目（？）なんだろうと思うし……。

「あー、もういいや……。暁さんだもんね……」

「？」

「だからね、俺が初めて暁さんに会ったというか、見たのは、電車の中だったんだけど」

「あ、うん」

幸紀君がわけのわからないことをつぶやいて、何かを諦めたように苦笑してから、話を戻す。

「その時の俺は、本屋に寄って好きな作家の新刊を買って、家へ帰るところで。途中で乗りこんできた暁さんを、きれいな人だなあと思って思った。それで、何気なく暁さんを見てたら、暁さんがカバンから読みかけらしい本を取り出して読み始めたんだけど、それがちよ

うど俺が買ってきた本と同じで、驚いて……」

「……………」

「俺は、どうなんだろう？おもしろいのかな？って、暁さんから目が離せなくなった。それで、しばらくして読み終わったらしい暁さんが本を閉じて……。その本を、満足そうに、愛しそうに撫でたんだよね。俺、『よっしゃ』って、自分が書いた本なわけでもないのに、すごくうれしくなっちゃって。帰ってから即効でその本読んで、それはやっぱりおもしろかったんだけど、暁さんの表情を思い出して、さらに楽しく読ませてもらった気がする。また会えたらいいなって、その時は、そう思った……」

……全然、知らなかった。

確かに電車でよく本は読んでいるし、気に入った本とか、好きな物は、撫でる癖もある。

でも、幸紀君にそれを見られていたなんて、まったく気づかなかったな。

やっぱり、私は鈍いのか……。

「その時は本当に、また会えたらな、くらいの気持ちで……。でも、この後、二目ぼれすることになるんだけど……」

「じゃあ、それが教育実習の日だな？」

あの日が二度目だったのかと、そう思って聞いた私に、幸紀君がさらに言いにくそうに頬をかく。

「……それも違ったりするんだよね、実は」

「ええ！？まだ会ってた！？」

またまた驚く私に、幸紀君がコックリとうなずく。

……どれだけ鈍いんだ、私。

「二度目に会ったのは、K書店だよ。暁さん、あそこによく行くでしょ？」

「うん」

K書店は、学校のある駅から一つ先にある大きな書店で、交通の便もいいし、確かに、よく利用している。

「俺がK書店に入ったら、暁さんはちょうどレジで精算してるところだったんだ。俺は、また会えたって、ラッキーって思ってた。でも、精算の終わった暁さんが、俺のいる出口の方へ歩いてきて、もうすぐすれ違うってところで……突然、立ち止まっちゃって。ちょっとドキドキしてた俺としては、拍子抜けしたんだけど。なんだ？なんで止まったんだ？って……」

「あ……もしかして、それ……」

K書店で私が立ち止まる理由といえば……。

「うん。かわいいぬいぐるみが、積んであったんだよね」

……ああ、やっぱり。

K書店は、本だけじゃなく、文具や雑貨も置いていて、その雑貨のブースには、ぬいぐるみコーナーが設けられているのだ。そこでぬいぐるみを見るのは癖になっているし、この部屋にいるぬいぐるみの中にも、K書店から連れ帰った子たちがたくさんいる。

それを、見られていた……？

「俺、自分でも何してるんだろうとか思ったんだけど、暁さんが立ち止まったのが気になって……。すっごく怪しいけどさ、近くの棚に隠れて、見てたんだよね、暁さんのこと。そしたら、暁さん、クマのぬいぐるみが気に入ったみたいで、それを手にとって……。笑ったんだ。ふにゃって、もうたまらないって感じで……」

「……………」

幸紀君の顔がみるみる赤くなるのを、凝視してしまう。

「前に見た時の印象が、‘凜としてカッコイイ美人’だったから、その笑顔はもう不意打ち。俺、バカみたいに一人で赤くなって、うるたえて……。で、それで、二目ぼれ」

「……………」

うそ、だろう……？

「それで……ここまで話したから、もう、ぶっちゃけちゃうけど……。俺、どうしても暁さんのことが知りたくなって。自分の買い物そっちのけで……。暁さんの後、付いてったんだよ。一緒に電車に乗

り込んで、なんか、話すきっかけないかなって、暁さんの方うかがいながら……。でも、そんなきっかけなんて見つからなくて、焦った時、学校のある駅で女子高生が乗り込んできて、暁さんのこと、『先生』って……」

「あ……」

「そのころ、教育実習先を決めなきゃいけない時期に来てた俺がしたことなんて、もう、言わなくてもわかるでしょ？」

幸紀君の問いに、コクツとうなずく。

幸紀君がうちの学校に実習に来たのは、私に会うため……？

私の、ため……？

「じゃあ、あの朝のは……」

「思い出し笑い？っていうか……。暁さんらしい部屋だったなあって」

「……………」

黙っていたら、恥ずかしそうに、幸紀君が顔を赤くした。

「あゝ、もうっ！だから言いたくなかったんだってば！呆れてるでしょ？呆れてるよね？っていうか、怖いよね、俺。後つけたりとか、なんか、ストーカーっぽいし……。ごめ……」

「本当……？」

「え？」

「その話、本当の本当……？」

幸紀君が謝ろうとしたのを遮って問いかけたら、きょとした顔で彼がうなずく。

「うん。まったくの嘘偽りなし。こんな恥ずかしい嘘つかない……
……って、だから、なんで泣くの！？」

すっかり止まったと思っていた涙が、ボロボロと再び溢れ出す。

「やっぱり、嫌いになっちゃった？俺のこと……」

おそろおそろ涙を拭ってくれる幸紀君に、ブンブンと力いっぱい首を振った。

「違う……。うれ、しい……」

「え？……ええ！？」

幸紀君が相当驚いたのか、目を丸くして涙を拭う手を止める。

「だ、だって……。私、かわいいもの……。本当に……。似合わないって、言われるんだ……。K書店の人に……。だって……。いつもぬいぐるみ、『プレゼント用ですね』……。って、言われるんだぞ？……。どこへ行っても……。そうだし……。なのに……。幸紀君が……。ぬいぐるみ持った……。私を見て……。好きだって……。だから……」

うれしくて……。

幸紀君は、最初から本当の私を好きになってくれていたんだ……。

なのに、勝手に臆病になって、私は……。

「暁さん……」

幸紀君が、涙の止まらない私の瞼に口付ける。

その、優しい仕草に、気持ちが溢れて止まらなくなる。

「……好き」

「え!？」

「幸紀君が、好きなんだ。とっくに好きになってた……」

ごめん、怖がりで……。なかなか、言えなくて……。

「あ、暁さん……」

「どこにも、行かないで……。ここに、いてくれる……?」

あれだけ言えなかった言葉が、するするっと出てきた。

「暁さん……!」

幸紀君のTシャツをギュッと掴めば、その手が捕らえられて、力強い腕に体ごと抱きしめられた。

「俺、いていいの？」

「うん」

「おじいさん達の思い出の家なのに……？」

「うん。幸紀君なら、いい。……幸紀君じゃなきゃ、嫌なんだ」

しっかりとわずいて、抱きしめ返したら、満面に笑みを浮かべた幸紀君が、たくさんキスしてくれた。

「暁さん……」

「……ん……」

力の抜けた体が、いつの間にかベッドに寝かせられていて、正面にある幸紀君の少し上気した顔が、いたずらっぽく笑っていて……。

「な、に……？」

「今日はたくさんプレゼントもらった気がするけど。……もう一つ、もらってもいい？」

……。

「……………ば、ばっかっ!! そういうこと、聞くな!」

このタイミングで、聞くか!? 普通……。

熱くなった顔に、幸紀君がクスクスと笑いながら、キスを落とす。

「好きだ、暁さん。……愛してる」

翌朝。

目が覚めて、隣にあるぬくもりに顔を上げたら、幸紀君がニコニコとこっちを見ていた。

「おはよう、暁さん」

「お……オハヨウ……」

チュツとキスされて、恥ずかしさで一気に覚醒する。

「今日は、叫ばないね？」

「あ、当たり前だ！ちゃんと……その……お、覚えて……」

だあー！何を言わすんだ！！何をっ！！

幸紀君が、私の言葉に満足そうに笑う。

「昨日の暁さん、かわいかったなあ……。酔っ払った時もよかった

けど、素面しやうふの暁さんはまた一段と、こう……」

「ぎゃあー！！！！何を言うんだっ！朝っぱらから！！」

とんでもないことを言われそうな予感に、慌てて耳をふさぐ。

「何って……。感想？」

「い、いらないから！そんなのっ！大体、酔っていた時のことなんて、知らないしっ……！！」

ブンブンと首を振った私に、クスクスと笑っていた幸紀君が、ハタと笑うのをやめる。

そして、一瞬後には、あの、小悪魔笑顔が……。

ああ……ものすごく、嫌な予感が。

「そうだよね、覚えてないんだよねえ、暁さん。あの、あつゝい夜のこと……」

「え？え？」

その手は何？

「それって、やっぱり寂しいし、暁さんも記憶がないのって、気持ち悪いでしょ？だから、協力するし……」

協力って！？

……いや、だから！なんで押し倒すっ！？

「思いだそっか？」

ニコッ。

「……え！？ちよっ……ま、待てっ……！！！」

結果。

………。

………思い出さなくていい記憶って、あると思うんだ（泣）

— END —

エピローグ（後書き）

これにて『恋愛事情　～暁の場合～』完結です。

つたない文章にも関わらず、ここまでお付き合い下さいました皆様、ありがとうございます。

初めての投稿で、緊張の連続でした。

でも、読んでくれている人がいる。そのことがとても励みになりました。

そのうち、この話にも出てきた、麻由の恋愛事情についても、投稿できたらいいなと思っています（自信はありませんが……）

これから、できるだけ書いていきたいと思っていますので、もし、お暇があれば、また読んでやって下さい。

本当に、本当に、ありがとうございました。

番外編「Ever After」(前)(前書き)

2人の、その後のお話です。

今回は、幸紀視点で、前後編に分けてお送り致します。

※注意※

『恋愛事情2』麻由の場合』のネタバレを含みますので、『麻由の場合』読了後をおすすめ致します。

番外編「Ever After」(前)

‘かわいい’なんて、ほめ言葉じゃないと思ってた。

「本当に俺たちが行ってもいいの？千寿^{ちず}さんのパーティー……」

慣れないタキシードに身を包んで自室から出てくると、白いドレスを纏った麻由さんが、俺を上から下まで眺めて、かわいらしい笑顔でもってニコツと笑った。

白いドレスとパーティー用の化粧をした麻由さんは、いつも以上に男を惑わすフェロモンを放出しまくってるけど……。

「うん。似合ってるよ、ゆっきー。七五三みたいで」

……絶対、言うと思った。

それじゃなくても童顔の俺が、タキシードなんてもの似合うわけないのは、自分がよくわかってるよ、ちくしょう。

それでも、髪を後ろに撫で付けて、メガネもかけて、なんとか成人に見えるかなってくらいには努力したんだけど（23歳には見えないとしても、だ）

「冗談だってば。そんなにへこまないの。かわいい、かわいい」

「麻由さん……。余計にへこむんだけど」

「あは。わかって言ってるもん」

……それって、どうなの。

「なによお。暁に『かわいい』って言われたら、うれしそうな顔するくせに」

麻由さんがダイニングテーブルに頬杖をついて膨れる。

あのねえ……。

「暁さんは特別だから、あったり前でしょ」

俺の大切な大切な恋人なんだから。

「まっ！言ってくれちゃって。少しくらい照れたらどう？」

麻由さんがつまらなそうに言って、イスから立ちあがる。

「で？その暁は、まだなわけ？」

「そういえば、遅いね」

チラリと時計を見れば、迎えが来る時間が迫ってる。

暁さんが部屋へ引っ込んでから、30分以上が経過していた。

俺のタキシードも暁さんのドレスも、麻由さんの恋人である直人さんが今日のパーティーのために用意してくれたものだ。

暁さんのだけでいいって言ったのに、『こっちが無理に誘うんだから』って、気づくと俺の分まで用意されてて、暁さんは麻由さんに連れられてドレスを選ばされていた。

まあ、フォーマルな服なんて持っていないし、ありがたかったけど……。

……これから先に着ることがあるのかな、これ。

「まあった、暁は……。あ。そういえば暁のドレスって、ゆっきー、まだ見てないんだっけ？」

「ああ、うん」

どんなのを買ったのか知りたかったけど、暁さんは絶対に見せてくれなかったし。

さっき麻由さんと一緒に美容院から帰ってきた時も、恥ずかしがって俺が部屋から出る前に引っ込んでしまったし。

麻由さんがニヤツて笑う。

そして、何も言わずに暁さんの部屋の前へ行くと、ノックもせず扉を開けた。

……一緒に暮らしてる俺でも、ノックくらいするよ？

「うわっ！ま、麻由！？」

姿は見えないけど、中から暁さんの焦ったような声が聞こえてくる。

「やっぱり。もう！なによ、そのナチュラルメイクは！しっかりお化粧しなさいって言ったでしょ！」

「だ、だって、似合わないとおも……」

「あゝ、もう！貸して！絶対に似合うってばっ！」

「あ、ちよつ、麻由……っ！」

……………。

……………すごい、気になるんですけど。

部屋を覗いてみたい気もするけど、それをするとう暁さんが怒りそうだし。

……待ちますか。

とりあえず手持ち無沙汰で、キッチンでコーヒーメーカーから俺専用のマグカップにコーヒーを注いだ。

それに口をつけて、何気なくキッチンを見渡すと、どうしても口元が緩んでしまう。

俺のマグカップ、俺の茶碗、俺の箸……。他にもいろいろ、俺専

用の食器が並んでる。

彼女のその隣の隣に。

暁さんと恋人同士になって、一緒に暮らし始めてから、もうすぐ1年。

彼女と対の食器もずいぶん増えて、俺のものが彼女の隣に当たり前に並んでいることが、どうしようもなくうれしくて、ついついそれを見ては、ニヤついてしまうのを止められない。

いっつも暁さんに、不思議そうな顔をされてしまっただけど。

対で買ったワイングラスを眺めて、マグカップを口に運ぶ。

このグラス達みたいにな、ずっと並んでいられたら。

……これからも、ずっと。

最近持ち歩いてる小さな箱を、ポケットの上からそっと触った。

「ほら！直くん、来ちゃったってばっ！」

インターホンの鳴る音がして、俺がそれを確認する前に、麻由さんが暁さんの部屋から飛び出してきた。

来訪者の映し出される画面には俺同様、タキシードに身を包んだ（彼の方が断然似合ってるのが悲しい……）直人さんの姿。

「あ、なお……」

「直くん！用意できたから、今、降りる〜！」

俺が言うのをさえぎって、麻由さんが受話器を奪ってしまう。

……人の家のインターホンを。

『わかった。駐車場にいるから』

「はい」

麻由さんがニッコニコと受話器を下ろした。

「準備、できたの？」

暁さんの部屋をチラッと見るけど、彼女が出てくる気配はない。

まあ、なんとなく、状況はわかるんだけどね……。

「む〜ふ〜ふ〜。もう、ばっちりなんだから！ゆっきー、鼻血注意よ？」

鼻血……？

「暁？あーきーらー！ああ、もう！あの子ったら……」

名前を呼ばれても出てこようとしない暁さんに、麻由さんがまた部屋へ戻っていく。

「麻由っ!?! ちょ……待った……!」

暁さんのそんな声が聞こえて、麻由さんに腕を引かれた彼女が部屋から引きずられるように現れ……て……。

「!」

恥ずかしそうに俺の前に立った暁さんを見て、固まった。

シンプルな水色のワンピースドレスに、髪を緩めにまとめて、いつもよりしっかりと化粧をした彼女は、とてつもなく色っぽくて、きれいで……。

うわ……。

……これは、マジで、鼻血吹きそう。

「ね? ね? たまんないでしょ?」

誇らしげな笑みを浮かべて言う麻由さんに、黙って親指を突き出した。

グッジョブ。

「へ、変じゃない……?」

何も言えずにいた俺のせいで、暁さんが、不安そうな表情で問いかけてくる。

その顔が、かわいすぎて、ギュッと抱きしめてキスの雨を降らせなくなるのをグッとこらえた。

「すっごく似合ってるよ、暁さん！きれい！かわいいっ！」

俺の言葉に、暁さんがホッとしたように頬を緩ませる。

……それ、反則だし。

あまりに無防備な表情に、我慢できなくなって、彼女を軽く抱きしめた。

「ゆ、幸紀くん!？」

「あゝ、もう、やばいって。他の男に見せたくないし。閉じ込めておきたいし。……パーティー行くの、やめよっか？」

顔を赤くして焦る暁さんは、さらにかわいくて、半ば本気でそんなことを言ってみる。

パーティーなんて行ったら、悪い虫が寄ってきそうだし。

まあ、そんな虫、近づけるつもりは一切ないんだけど。

「え? え!？」

「……ちよつと、ちよつと、ゆっきー。いつまでそうやってるつもり? バカ言ってるんで、そろそろ行くよ」

俺の言葉に本気で驚く暁さんの横から、麻由さんの呆れた声が聞

こえて、しぶしぶながらもぬくもりを離した。

「まったく、みせつけてくれちゃって。あたしの存在、忘れないでよね」

からかい半分に、あえて暁さんへそう言った麻由さんが、暁さんの顔が真っ赤になったのを見届けてから、満足そうに玄関へ向かう。

暁さんの反応がおもしろいから、わざとああいうことを言うんだ、あの人は。

……気持ちはすっごくわかるんだけどさ、俺も。

赤い顔をもてあましてる暁さんの肩に、春物の薄いコートをかけてあげる。

ずっと車とはいえ、外は梅雨の小雨が降ってるし、コートの下が袖のないのワンピースだから、寒いかもしれないなあ。

「寒くない？ 大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だ。あ、あの、幸紀君……」

「ん？」

彼女を気遣うように目を合わせれば、なぜか彼女の顔がさっきよりも赤くなってる。

なんだ??

「あ、あのな……えつと……。幸紀君も、すつごく素敵だ。……か、格好いい」

「!」

………ああ、この人は本当にもう!

言った後、さらに恥ずかしそうに視線をさまよわせる暁さんに、クスリと笑う。

うれしくて、愛しくて。

たまらずに、彼女の唇の端に口付けた。

「ゆっ……!」

「せっかくのお化粧が落ちちゃうといけないから、今はこれで我慢。だけど、帰ったら……覚悟しておいてね? 暁さん」

……今日は、寝かさないから。

その意味に気づいた暁さんの顔が、これ以上ないほど赤くなった。

エレベーターの前で待っていた麻由さんと一緒に、地下の駐車場まで降りると、高級外車から直人さんが降りて、軽くこちらへ手を上げてみせた。

「直くん！お待たせ」

タタタツと軽い足取りで、彼の元へ麻由さんが駆けていく。

やっぱり、かつこいいよなあ、直人さん。

顔はモデルになれそうなほどかっこよくて、背も高く、大会社の社長で。同じ男として、えゝって、ひがみたくなるくらいスペシヤルな人だけど、性格は至って温和で、気さく。

彼とも知り合って一年が経つけど、今ではすっかり友人と呼べる存在になってる。忙しい割には、麻由さんと一緒にうちによくきてるし。

まあ、そんな直人さんだけど、彼は、麻由さんにべた惚れで……。

「直くん？」

直人さんが、自分の目の前に立って小首を傾げる恋人の姿に、上げた手を下ろすことも忘れて固まってる。

……なんか、思考が手に取るようにわかるかも。

「なおく……って、こら！」

麻由さんが直人さんの目の前で手をひらひらと動かすと、急に直人さんがその手を引いて、彼女をギュッと抱きしめて、頬に何度もキスを落とす。

「麻由、かわいい……」

「ひゃ！」

……ダメじゃん、直人さん。俺より我慢できてないし。

直人さんの欠点を、しいて上げるとすれば。

麻由さんのことになる、一切周りが見えなくなるってことも
しない。

「麻由のやつ、人のこと言えないじゃないか……」

一向に離れる様子のない2人に、俺の横で暁さんが軽く頬を膨ら
ませて呟いた。

今日、俺たちを、豪華ホテルで行われる誕生日パーティーなんて
ものに呼んでくれたのは、直人さんの友人で、彼と一緒に会社を興
して、今は副社長をしてる、堂本千寿さんだ。

直人さんと知り合って割とすぐに紹介された彼女は、ぱりつとス
ーツを着こなした、俺が劣等感を抱きたくなるくらい、外見も中身
も、とてもとてもかっこいい女の人だったんだけど……。

「麻由！ 暁！！ あゝ！！ なんってかわいいっ！！」

……………なんていうか、‘女’好きな人だった。

パーティー会場で待ちうけていた千寿さんが、両腕をそれぞれうまく使って、暁さんと麻由さんを一度に抱きしめる。

「あ、あの、千寿さんっ……」

「ちいちゃんったら、もう」

暁さんの困った声と、麻由さんの楽しげな声を聞いて、俺と直人さんは同時にそれぞれの恋人を千寿さんから引き剥がした。

「麻由は僕のだ」「暁さんはダメって言ってるでしょ」

同時に言った俺たちに、千寿さんがチツと舌打ちする。

そんな仕草もその辺の男たちよりかっこよくて、様になるから、彼女は危険なんだ。

「心の狭い奴らめ」

……………どうせ、狭いですよ。

「誕生日おめでと、ちいちゃん」

「おめでと、千寿さん。今日はお招き頂いてありがとうございます」

麻由さんと暁さんが、それぞれに千寿さんへプレゼントを渡すと、千寿さんがうれしそうにそれを受け取った。

……ところで。

「ちいちゃんがドレスなんて、珍しいね？」

麻由さんが瞳を輝かせて千寿さんの姿を上から下まで眺める。

そうなのだ。

ショートカットのはずの髪は、なぜかポニーテールになってるし（つけ毛？）、ドレスはシンプルだけど真っ赤なロングドレスでとても華やかだ。

それはそれはとても似合っていてきれいだし、やっぱり千寿さんは女の人なんだよなあって、改めて思ったりもしたけど、あまりそういう格好を好まないはずの千寿さんだから、違和感がある。

そう思って、再び千寿さんの顔を見ると、ものすごく不機嫌な顔になってて。

「これは、仕方がなく、着てるんだ！」

ブスッと不機嫌丸出しの千寿さんを見て、直人さんが苦笑しながら教えてくれる。

「ほら、ちいは、堂本の社長令嬢だから。今回のパーティーは、ちいの結婚相手探しの意味もあるらしくて、ね……」

「」「えっ!？」」

直人さんの言葉に、俺たち3人は、同時に驚きの声をあげた。

確かに、千寿さんが、ホテル経営とか手広くやってる堂本グループ（このホテルもそうだけど）の社長令嬢だってことは、聞いて知ってたし、このパーティーが、千寿さんの御両親主催で、ありとあらゆる業界から人が集まるらしいってことも、聞いてはいたけど……。

結婚相手って………だって、千寿さんは、ねえ？

「えー、ちいちゃん、結婚しちゃうの？」

麻由さんのちよつと残念そうな声に、千寿さんの顔に、いつもの怪しい笑みが浮かぶ。

「やだな、麻由。するわけないだろう？……そのうち、ジョウからお前を奪う気にいるのに」

……………。

これは、冗談。わかってる。冗談だよ、それっぽく聞こえても。っていうか、麻由さん、頬染めちゃダメだろ……。

「ジョウ、睨むなって。冗談だろ？」

「お前のは、シャレにならない」

確かに。

つい、俺も一緒になってコクコクとうなずいた。

「はいはい、わかったって。……あゝあ。今までは、よかったんだよなあ、ジョウがいたから。こいつ、見栄えだけはいいいし、今みたく睨みは恐いし、男除けになってたんだよ。うちの親父も私がジョウとデキてるって、勝手に信じてたし……」

……ああ、なるほど。

よく考えてみれば、千寿さんって、大手IT企業の副社長で、超大手グループの社長令嬢で、しかも美人で……。

逆玉の興狙いの男連中から見たら、ヨダレもんだもんなあ。

「おかげで、ジョウが麻由助けたっていうあの記事見た親父に、怒られた、怒られた。勝手に騙されてたくせに、『お前がモタモタしとるからだー』とかキレやがって、あんのくそ親父」

千寿さんが、すごく腹立たしそうにグッと拳を握り締める。

「まあ、そういうわけで、結果がこれ。仕方ねえから、今日一日は適当に相手してやるけどさ……」

今度は、はあゝっと、盛大にため息をついてうつむいた千寿さんは、既に疲れ気味だ。

大変なんだなあ、千寿さんも……。

そう思って、かける適当な言葉も見つからずにいると、千寿さんが、ガバツと顔を上げる。

「だから、終わったら、ここのスイートに集合な！」

「「「は？」」「」」

千寿さんが笑顔を浮かべて言った言葉に、今度は4人の言葉が重なった。

「二次会するに決まってるだろ？ どうせこんなパーティーじゃ、ストレス溜まるばかりで、せつかくの誕生日が楽しくなくなっちゃうし。ああ、心配すんなって。夜通し飲めるように、ちゃんとお前らの部屋も押さえてあるから」

二次会？ 夜通し？ 部屋押さえてあるって……。

いやいや、聞いてないし！

俺は、暁さんと驚き顔を見合わせた。

「おい、こら、ちい……」

同じく初耳らしい直人さんが、文句を言おうと口を開くと、千寿さんがさらにニツコリと笑う。

……あゝ、なんかすっごい圧力が。

「友達だよな、皆」

……………。

千寿さんって、酒豪だったよね？

「祝ってくれるだろ？私の誕生日」

……………。

しかも絡み酒でさ、人にもたろっぷり飲ませないと気がすまなかったよね？

「祝ってくれるよな？私の誕生日」

……………。

「……………」

俺と直人さんは、互いに顔を見合わせて、同時にこっそりと諦めのため息をついた。

たぶん、考えていることは同じだ。

……せっかく、イチャイチャするつもりだったのに！

ポケットに入れた小箱が、コトリと音を立てた。

パーティーが始まる寸前に千寿さんが呼ばれていって、俺達が会場に入ると、会場内の人の多さに圧倒された。

こんな盛大な、しかも高級なパーティーに出たことがない俺は、情けないけど、ゴクリと喉を鳴らしてしまう。

ふと、タキシードの袖が引っ張られた気がして振り向いたら、曉さんが、俺以上に緊張した顔で、困ったようにこっちを見てた。

「ゆ、幸紀君……」

その不安そうな顔に、俺の緊張がかえってほぐれて、直人さんと麻由さんがそうしているように、そっと腕を差し出すと、曉さんがゆっくりと手を添える。

ホッと息を吐いた曉さんと目があうと、彼女が安心したように微笑んだ。

俺の隣にいて、そんな顔を見せてくれる彼女を、たまらなく愛しいと思う。

パーティーが始まって早々、主役の千寿さんは、男達に囲まれて見えなくなった。

あの様子じゃあ、確かにストレスも溜まる。

「千寿さん、大丈夫だろうか？」

同じことを考えたらしい暁さんが、心配そうに時々チラチラと見える赤いドレスを目で追ってる。

「まあ、後で俺達が精一杯祝ってあげようよ」

ストレス発散も兼ねてね。

「うん、そうだな」

暁さんが、千寿さんから目を離してうなずいた。

直人さんと麻由さんも、千寿さん程ではないけど、あちこちで捕まって話しこんでいるようだ。

残された俺達がすることと言えば……。

「とりあえず、食べよう、暁さん！」

卑しいと言われようと、こんな高級ホテルの料理、食べられる機会は滅多にないんだから。

俺の言葉に、暁さんの瞳が輝いた。

ひとしきり美酒と美食を堪能して、何気なく暁さんを見たら、ほ

んのりと目尻が潤んできていることに気づいた。

……これ以上は、やめた方がいいな。

暁さんと暮らすようになって、彼女の酔いの境界がわかるようになった。傍目にはわかりにくいけど、目尻が少し潤んでくると境界が近い証拠なんだ。

「暁さん、まだ酔ってないよね？」

「うん。酔ってない」

暁さんは根が素直だから、酔ってる時に同じ質問をすると、ちゃんと『酔っている』って言う。

俺も、これを麻由さんに教えてもらった時には、嘘だろうと思ってたけど……本当だった。あり得ないほどの素直さに、思わず笑ってしまったくらいだ。

「なんかソフトドリンクもらってくるよ。この後もあるし、今はこれ以上飲まない方がいいから」

っていうか、これ以上飲んでもらったら困るんだ、ほんと。

暁さんには酔うと悪癖があって、無性に人恋しくなるせいで、無意識に人を誘ってしまう。俺相手に出る分にはいいんだけど（俺的には拷問だけど）、やばいくらいにかわいくなってしまう彼女を、この会場の男どもに見られたくない。絶対に。

俺の言葉に納得してうなづく暁さんを壁際に残して、急いでソフ

トドリンクをもらいに行く。

「あれ？幸紀……？」

ドリンクを選んでいたところへ、そう声をかけられて振り返ったら、ピンク色のドレスを着た女の人が出て……。

その顔を見た瞬間、誰だか気づいて、驚いた。

「美沙希？」

進藤美沙希。俺と同じ大学に通ってた奴で……昔、少しだけつきあってた。

「ああ！やっぱり幸紀だ。びっくりした、どうしたの？」

決している別れ方をしたわけじゃないけど、もう、過去の出来事として話せるくらいには時間が流れてる。

近づいてきた美沙希は、相変わらずかわいらしくて、だけど大学の頃と違う、しとやかさみたいなものが出て、少しきれいになった。

「俺は、今日の主役とちょっとした知り合い。美沙希は？って、そこか……」

確か美沙希の父親は、堂本系列の会社で、社長をしていたことを思い出す。

「そう。お父さんのコネで、兄さんの付き添い。兄さん、堂本さん

をゲットするようにお父さんから言われちゃってるの。無謀としか
言いようがないんだけどね」

美沙希が指を差す先には、千寿さんを囲む群れがある。どうやら
あの中に彼女の兄もいるらしい。

「最近どうしてるの？先生になったんでしょ？」

俺はこの春から、暁さんのいる学校とは2駅程離れた私立校で、
念願の教師として働いてる。

それを、誰かから聞いていたらしい。

「まあね。美沙希は？」

「あたしは、ふつつうのOL。お父さんのコネで入ったんだけど、
まあ、結構楽しくやってる」

「そっか」

美沙希らしく元気にやってるんだな。

「あの、さ……」

美沙希が、少し考えるようにしてから、小さく俺に問いかける。

「何？」

「……幸紀は、今、いい恋してる？」

何を聞かれるかと思えば……。

いい恋、か。

フツと口元が緩む。

「してるよ、すごく。今日も彼女と一緒になんだ」

そう言って、人込みの中を残してきた暁さんの姿を探す。

と……彼女が、二人の男に挟まれて困った顔をしてるのが見えて。

げっ！しまった！あいつら……！

「美沙希、悪いけど、俺……！」

「待って」

慌てて立ち去ろうとした俺の腕が、美沙希につかまれた。

「おい、美沙希……」

「こんな所で言うことじゃないの、わかってるけど。でも……。幸紀」

そう言った美沙希の瞳が真剣で、暁さんのことが気になったけど、きちんと向き合わざるを得なくなった。

「……あの時は、ごめんなさい。ずっと謝りたかったの。ひどいことと言って、ごめん」

「ああ……」

別れた時に言われたことを思い出して、苦笑する。

腹は立っただし、印象的だったのは確かだけど、今更、わざわざ謝るようなことでもないのに……。

「あたし、幸紀が全然あたしのことを見てくれない気がして、悔しくて……。だから、本心じゃなかったから。ごめんね」

「美沙希……」

……確かに、あの頃の俺は、彼女が言うように、彼女に本気で向き合ってなかったと思う。

美沙希を好きだと思いう気持ちじゃなかったとか、そういうことじゃなくて。

ただ、誰かに傍にいて欲しい、そういう気持ちの方が強かった。

今、暁さんと一緒にいて、すごく幸せで満たされてて。

‘誰か’じゃなくて、‘暁さん’にいて欲しい。暁さんじゃないとダメだって、そう思う。

でも、あの頃の俺には、それだけの気持ちがなかった。

「いや、俺が悪かったと思う。美沙希が気にすることなんてないか

ら……。俺の方こそ、ごめん」

そう言って謝ったら、美沙希がホッとした顔で首を横に振って、俺から手を離す。

「うん。いいの。ずっと気になってて……。でも、今日会えてよかった」

「ん。俺も」

「引き止めてごめんね。彼女と仲良くね」

スッキリした顔でニッコリと笑った美沙希に、俺もうなずいた。

そして、ニヤリと笑う。

「美沙希も、いい恋しろよ。……。俺みたいに！」

「あ、なんかムカつく。大きなお世話よ、バカ幸紀！」

怒って叩く真似をした美沙希が、その後、彼女らしい明るい笑顔を浮かべるのを見届けて。

俺は、最愛の人の元へ、急いだ。

番外編「Ever After」(前)(後書き)

後編に続きます。

番外編「Ever After」(後)

「あ、あの、連れがいますから……」

「連れなんていないじゃん。それにしても、本当にきれいだね、君」

「ねえ、パーティーが終わったら、ここのラウンジで飲もうよ」

短髪ピアス野郎と長髪茶髪野郎の二人連れに挟まれて身動きの取れない暁さんが、泣きそうに困っているのを見て、俺の中で怒りが一気に加速する。

こんな奴らから守るつもりでいたのに！何やってんだ、俺！！

「すみません。俺の連れに構わないでもらえますか」

「幸紀君……」

後ろから声をかけると、俺を見つけた暁さんが、ホッとした顔をする。

俺は、強引に男たちの間に入って、暁さんの手を取った。

「へえ、えらくかわいいのが出てきたじゃん」

俺の登場に、立ち去るところか、バカにしたようにそう言ったピアス野郎を精一杯睨み付ける。

ああ、ちくしょう。俺に直人さんみたいな眼力があったら！

「行こう、暁さん」

「あ、うん……」

男達から立ち去ろうと暁さんの手を引っ張ると、俺の前に腕が伸びてきて行く手を阻まれた。

もう1人の茶髪野郎だ。

「ごめんね、ボク。お兄さんたち、お姉さんに用があるんだ。勝手に連れて行かないでくれるかな？」

……誰がボクだ！こんの酔っ払いがっ！

その酒臭い息を吹きかけられて、殴りたい気持ちをグッと堪えた。

「しつこい男は嫌われますよ、お兄さんたち」

嫌味たっぷりに笑ってやると、茶髪野郎がムツとした顔をする。

「……お前、俺が誰だか知ってんの？」

知るかっ！

どうせ、どっかのボンボンだろうが。

あゝ、殴りてえ、殴りてえ……！でも殴ったら千寿さんに迷惑がかかるよな、ちくしょう……。

黙って拳を握り締めた俺に、何を勘違いしたんだか、奴らが勝ち誇った顔で言う。

「お前みたいなお子ちゃまの出番はないつつうの。あっち行つてけよ」

「そうそう。ボクみたいなかわいい子より、俺達の方が、彼女には似合ってるの。わかる？」

……さっきから聞いてれば、かわいいだのお子様だの、いちいちうるせえよ！

俺と暁さんが似合ってないだと？

……んなことは、言われなくても俺がいつちばんわかってる！！

「いいっ加減に……」

「かわいくて何が悪いっ！！」

……………へ？

我慢が限界に達して、さらに拳を握り締めた俺の叫びに被るように、隣から暁さんが叫んだ。

あ、暁さん……………？

氣勢をそがれて、驚いて彼女を見たら、瞳に涙を浮かべて、きつく男達を睨んでる。

その視線に、男達が一瞬ひるんだ。

……そうだった。きれいな人の睨みて怖いんだよね。暁さん、前に酔っ払いをひと睨みで蹴散らしたことあったし。

そんなことを考えてると、俺の手をギュッと握った暁さんの瞳に、どろどろ涙が溜まってきて……。

「暁さ……」

「ゆ、幸紀君は！かわいくて格好いい、私の、自慢の恋人、なんっ……だからっ……！」

「！」

声をかけようとした俺を無視して叫んだ暁さんの瞳から、とうとうボロボロと涙がこぼれだす。

「つり合ってないのなんてっ……わかってる、けどっ……！私の、恋人、なんだからっ……！！！」

「暁さん……」

涙の止まらない暁さんを、そっと抱きしめて、その背中をさすると、暁さんがしがみついてくる。

やばいかも………すっげえ、うれしいんだけど、俺。

暁さんをナンパしてた男たちが、周りの注目を集めていることに気づいて、舌打ちしてその場を去ろうとする。

正直、暁さんの発言で、そいつらに対する怒りなんて一気になくなっちゃってたから、俺はもうどうでもよかったんだけど……。

「……人の大切な友人を泣かせたのは、お前らか？」

地を這うような低音で、怒りオーラたっぷりの本日の主役が仁王立ちで現れた。

そして、立ち去ろうとしてた奴らを睨み付ける。

二人の、酒で赤くなっていた顔が、一気に青くなった。

気づけば、会場中がこっちを注目してて……。

「え、いや……これは……」

「俺達は別に……」

急にしどろもどろになった男たちに、千寿さんが冷たい視線を投げかける。

直人さんほどじゃないけど、これもまた、かなり怖い……。しかも、千寿さん今、ストレスMAXだし。

「問答無用。人のパーティーを台無しにしゃがって。……叩きだせ」

千寿さんの言葉に従って現れたホテルマン達が、半ば強引に、ナンパ野郎どもを外へと促す。

「堂本さんっ、待っ……!!」

「違うんだ、誤解……!!」

「うるさい!二度と私の前に顔を出すな」

言い捨てて背を向けた千寿さんに、2人の男たちは、最後まで何か言いながら、場外へ連れられていった。

静かになった会場の中、暁さんは、まだ涙が止まらなくて、俺にしがみついている。

人前で泣くことも、ましてやこんなに人がたくさんいるところで俺に抱きつくなんて、普段絶対にしない人だけに、相当恐かったのかと、心配になった。

同じく心配そうな顔で、麻由さんと直人さんがこっちへ近づいて来ようとするのを、千寿さんが軽く手で止めた。

「皆さん、お騒がせしました。まったく、人の誕生日を祝いもせず、か弱い女性を泣かせるなんて、何をしに來たんでしょうね?彼らは」

千寿さんがよく通る声で広い会場へ言うと、場内から笑い声が漏れた。

「さて、そろそろ皆様の空腹も満たされたころでしょう。皆様からたくさんの祝いの言葉とプレゼントを頂いたお礼に、私から、ささやかではございますが、お返しを御用意させて頂きました。ぜひ、お楽しみ下さい。……では」

千寿さんがそう言って、パンツと大きく手を鳴らすと、会場が薄暗くなり、スポットが前面のステージにバンツと当たる。

そこにいたのは、俺にはわからないけど、たぶん有名な管弦楽団で、スポットを合図に、すばらしい生演奏が始まった。

会場に集まった客が、感嘆の声を上げて演奏の方に注目したのを確認した千寿さんが、薄暗い中、近くに寄ってきていたホテルマンから何かを受け取ると、俺の方へとやって来た。

「千寿さん、ごめ……」

「殴っちまえばよかったのに」

……あれ？

謝ろうとした俺に、千寿さんが無然とした顔で言う。

俺、千寿さんに迷惑かからないように我慢したんだけど……。

それがわかったのか、千寿さんがフンツと鼻で笑う。

「お前が殴ったぐらいで、迷惑被ったりしねえよ、バアカ」

「……………」

大分、機嫌が悪いね、千寿さん……。

「ほら、これ」

「へ？」

千寿さんがさっきホテルマンから受け取ったものを、俺の手を掴んで乗せる。

……これって、部屋の鍵？

「暁が泣いてんのは、半分はお前のせいだろうが。……まったく、自分の女ほっぽって、他の女と話してんなよ」

千寿さんの言葉に、暁さんがピクリと反応する。

「あ……」

それって、美沙希のこと、だよな。

千寿さん、あの人込みの中でよく見てるな……って、そうじゃなくって。

まさか？

暁さんが人前で泣いたり、俺に抱きついたりしたのは……。

「ここはいいから、さっさと弁解してこい。でも、二次会には絶対に参加してもらいうからな」

腕を組んだ千寿さんが、クイっと、顎で会場の出口を差す。

俺は、鍵を握り締めて、うなずいた。

「サンキュ、千寿さん」

千寿さんが、肩をすくめて、笑みを浮かべた。

「暁、そのバカが嫌になったら、いつでも私のところへおいで」

……冗談でも、やめて下さい。

千寿さんが用意してくれてた部屋は、普段の俺なら、絶対入るのをためらってしまうくらい、かなりデラックスな部屋で。

部屋の中も窓から見える夜景も、とてもきれいそうだったけど、俺は、全部そっちのけで、そっと暁さんをキングサイズのベッドに座らせて、その前に跪いた。

そのまま、彼女をじっと見つめる。

「あ、あんまり見るな。化粧も取れて、ぐちゃぐちゃだから……」

まだ瞳に涙を浮かべている暁さんのその言葉に、涙で濡れる彼女の頬へ、何度も口付けた。

何を言うんだろう、この人は。

「きれいだよ、暁さん」

確かに、化粧は取れかけちゃってるけど、でも、俺にとってはどんな暁さんもきれいで、かわいい。

暁さんが、少し頬を赤く染める。何度言ってもこういう初々しい反応を返す彼女が、愛しくて堪らないんだ。

「ごめんね、暁さん。俺が離れたせいで……」

そう言って謝ったら、暁さんが首を横に振る。

「幸紀君のせいじゃない……。酔っ払いに絡まれるなんて、きっと、私に隙があったんだ」

隙って……。っていうか、あれってれっきとしたナンパだったと思うんだけど。

相変わらず自分が美人だっていう自覚がないんだから、もう。

……でも、今は、そんなことより。

「ねえ、暁さん。……俺に聞きたいことは？」

こういう聞き方ずるいかな、とは思った。でも、こうでもしないと、暁さんは言わないから……。

案の定、暁さんが困ったような顔をして、それから、さらにしばらく悩んでから、ようやく口を開く。

「……幸紀君が話していた女の子は、誰？」

おずおずと尋ねた暁さんに、少し笑って、俺は、あるがままを話す。

「大学時代に、少しだけつきあってた子」

「……………」

やっぱり、って、暁さんが悲しそうな不安そうな、複雑な顔をする。

そんな顔させたくはないけど、でも、今回だけは、少しうれしく思ってしまう。

「それでもって、俺のことを『自分よりかわいい男なんてサイテー』って振った子」

「あ………」

前に、そんな風に言われたことがあるって、暁さんに話したことがあった。それを、ちゃんと覚えてくれていたらしい。

……それなら、その話をした後には暁さん、何って言ったか覚えてる？

「俺さ、暁さんに会うまで、‘かわいい’って言われるの嫌いだったんだ。女顔の童顔だから、仕方ないのかもしれないけど……男から告白されたって、うれしくもないし」

苦く言った俺に、暁さんが目を丸くする。

中学、高校、大学と、俺を女と勘違いした奴や、そうじゃなくて
って奴もいたけど……。まあ、どっちにしても、俺にとってはあま
りにうれしくない思い出だ。

『皆がなんて言ってるか知ってる？美沙希の彼氏って、美沙希より
もモテるね、だって……。自分よりかわいい男なんて、サイテー
よ。恥ずかしくて、もう一緒に歩けない。……。別れよ』

それが、美沙希が俺に言った別れ際のセリフ。

これを言われたのも、学祭のイベントで嫌々女装させられてた俺
に、男どもが群がってた後だった。

……ドレスを着せられたままで、彼女に別れ話された男なんて、
俺くらいだと思う。

情けないやら、恥ずかしいやら、むなしいやらで、その後しばらく、
かわいいって言われる度に、相手を睨んだりしてた。

「……でも、暁さんが言ってくれたんだ。覚えてる？『元宮君みた
いなかawaii彼氏なら、自慢したくなる』って言ってくれたの。俺、
すっごくうれしかったんだよ？」

まだつきあう前の話。

あの時初めて、かわいいと言われたことをうれしく思った。

その前から、暁さんを手に入れたと思ってたけど、あれ以来、さらにその気持ちが強くなったんだ。

絶対に、振り向かせてやるって……。

「だから、今日もうれしかった。本当に、自慢の恋人だって、暁さんが言ってくれたから」

「えっと、あれは……」

暁さんの顔が真っ赤に染まる。

今更照れる彼女が、かわいい。

「ねえ、暁さん？……妬いてくれたの？」

いつもは言わない台詞を言って、人前で俺にしがみついてしまうくらいに、嫉妬してくれた？

更に赤くなって、おろおろと口ごもる暁さん。

「う、うう………妬き、ました……」

小さく呟いた暁さんへ、堪らずにキスを顔中に降らす。

「だ、だってな……。お似合いだったから……。お似合いだって、思ってしまったんだ……」

キスの合間に、さらに続けた暁さんの、その不安げな声に、俺は動きを止める。

お似合い……？俺と美沙希が？

「あの女の子、すごくかわいかったから……。幸紀君と並んでると、なんだか、かわいいカップルだなあって、思ってしまった……。私は、年も上だし、背だって高いし……。幸紀君と並んでもアンバランスで……。幸紀君には、私より、ああいう女の子の方が似合ってるんじゃないかって、そう、思ったら、悲しくなって……。そうしたら、あの酔っ払い達が……」

似合わないって、言ったから。

徐々に声が小さくなって、再び瞳を潤ませた暁さんに、俺は一瞬ポカン、としてしまって、そして、少し笑ってしまう。

……だって、それは俺の台詞。

暁さんは俺より年上で、教師としても先輩で、きれいでかわいくて、俺みたいな、大学生に毛が生えた程度の新米社会人には、本当にもったいないような人だから。

ナンパ野郎が言うことがいちいちもともだから、頭に來たんだ。

事実、あいつらの方が、見た目のバランスは取れてるように感じて。

でも。

……俺は、誰がなんと言おうと、暁さんを手放すつもりはないから。

暁さんの一筋流れた涙を親指で拭って、彼女の瞳をまっすぐに、真剣に見つめた。

「……暁さん。暁さんは俺の、自慢の恋人だよ。きれいで、それでいてかわいくて、仕事をしてる姿はカッコよくて。俺にはもったいないくらい、すごい恋人」

「幸紀君……？」

俺のいつもと違う様子に、少し戸惑ってる様子の暁さんから体を離して、ずっとポケットに入れていた小箱を取り出す。

……暁さんに似合いそうだって、一目ぼれして買ってしまっ以来、早く渡したいけど、まだ渡さない方がいいんじゃないかって、ずっと悩んでた。

暁さんに見つかったら恥ずかしいし、毎日持ち歩いてた。

俺は、まだまだ仕事始めたばかりの新米だし、もう数年がんばってからの方がいいんじゃないかとも思ったけど。

……もう、決めた。

「誰がなんて言おうが関係ない。俺は、暁さんが一番大事だし、これから、ずっと大切にしていきたいって思ってるから……」

持ち歩いてたせいで、少し形が崩れてしまった小箱に巻かれてたリボンを暁さんの前でほどいて、さらに箱を取り出す。そして、出てきたベルベットの箱の中身を、暁さんに見えるように開いた。

そこに入っているのは、プラチナに、透明なダイヤ1つとそれを挟むように小さなピンクダイヤが2つ並んでる、そんな指輪で。

……婚約指輪、のつもり。

「幸紀くん、これっ……」

目を丸くした暁さんを前に、一度深く息を吸って、吐く。

すっげ、緊張する……。

頑張れ、俺！

「俺は、まだ仕事始めたばかりだし、まだまだ頼りないところも多いけど。暁さんを愛してる気持ちだけは誰にも負けないし、ずっと大切にするって約束する。だから……」

これからずっと一緒に並んでいたいから。

「俺と、結婚して下さい！」

い、言った……。

暁さんが、緊張でドッキドキの俺と指輪を交互にゆっくりと見つめて……。

そして、再び泣き出した。

「暁さん……？」

あの……返事が欲しかったり……。

せめて、首を縦か横に振る、とか……。

……横に振られたら、立ち直れない自信あるけど。

「ふっ……う………す、るっ………！」

もんもんと答えを待ってた俺に、そう叫んで抱きついてきた彼女を、反射的に抱きしめ返す。

「え？」

今、なんて？

「ゆきく……っ……けっこん、するっ………！」

………。

………結婚、するって言った？ 言ったよな？

「………いやったあー!!」

「うわっ！」

叫んで、暁さんを力いっぱい抱きしめたら、勢いがつきすぎて、彼女をベッドに押し倒してしまう。

少し体を起こして、お互いに小さく笑って、キスをして。

ずっと握り締めていた箱から指輪を取り出して彼女の薬指にはめて。

少し恥ずかしそうに自分の左手を見つめる彼女に、またキスをし

て。
「これからも、ずっと一緒にいようね」

そう言ったら。

「うんっ！」

返事と一緒に、満面の笑みを睨さんがくれた。

……って、そこまではよかったんだけど。

だってさあ、プロポーズして、オッケーもらって、幸せ最高潮って感じで。そしたら、当然、睨さんとイチチャイチャラブしたい

でしょ？

ああ、もういいや、千寿さんの二次会なんて、ほっとけほっとけってなったって、仕方ないよな？

なのに。

幸せ空気にぽおっとなって、千寿さんのことをいい感じで忘れてる暁さんを、シメシメって思っただけがそうとしてた、まさにその時に、鳴る電話。

……なんだよ、このタイミング。

嫌な予感がしたけど、部屋の電話だし、暁さんが気にするし、無視するわけにもいなくて、出ちゃった俺。

「はい、もしも……」

「今、部屋の前にいる。10秒以内に出て来い。さもなくばマスターキーで開ける」

……………。

……………ありえねえ！迎えに来てるし！

超絶不機嫌な千寿さんの声に、マスターキーで開けられたら堪らないと、慌てて服を直す暁さんと、扉に飛びつく俺。

暁さんがちゃんと服を着たのを確認して、扉を開けたら。

「二次会だあーっ！」

……………。

仁王立ちでそう宣言した千寿さんに、逆らえる奴は、たぶんいない。

「ん？」

その後、慌てて出てきた暁さんの赤い顔（余韻で）と、少し見える鎖骨（あ、キスマーク）、それから左手の薬指（……）へ視線を流した千寿さんが俺を見下ろす（悔しいかな、彼女は俺より高い）

その視線の意味するものに、俺の背中に流れるのは冷たい汗だった。

「……いゝい度胸だなあ、幸紀？」

「あ、あはは？」

その後？

……そりゃもう、盛大に祝いましたとも（泣）！

— E N D —

番外編「Ever After」(後) (後書き)

ここまでお付き合い下さいまして、誠にありがとうございます。
番外編、楽しんで頂けたでしょうか？

『暁編』『麻由編』ともに、これで完結です。もしかしたら、ある日ふと思いついて番外編が増えることがあるかもしれませんが、とりあえずは、ここまでにしたいと思います。

暖かい感想をくださった方々、何よりここまで読んで頂いた皆様に、心からの感謝を送ります。

本当に、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4729f/>

彼女の恋愛事情 ～暁の場合～

2010年10月9日03時21分発行